令和５年度文部科学省
新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）
実施報告書

滋賀県立守山北高等学校

新学科「みらい共創科」の設置にむけて

滋賀県立守山北高等学校
校長　　松　村　友　二

本校は令和３年度からは滋賀県教育研究事業「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定を受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実を目指す教育の研究を行ってきました。また、「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定も受け、自己を振り返り、変容を確認する取組を進めることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめ、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を推進することで、自分の将来を展望したくましく生き抜く態度や能力を身につける教育の研究に取り組んできました。

この度、令和５年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、上記のようなこれまでの取組をさらに発展させるべく令和７年度開設の新学科「みらい共創科」の土台作りを進めてきました。本校のスクール・ミッションとして、「①未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校　②地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校　③地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校」というものがあります。これらの使命を実現すべく、心強い味方であるコーディネーターの力をお借りして、新学科開設に向け校内の環境整備、教育課程の検討などを中心に取り組んでまいりました。全国的に普通科改革の特色づくりが求められている中で、可能性を秘めた本校周辺の地域資源や人材を活用しながら、新しい学びのスタイルを構築していくダイナミズムを教職員とともに分かち合いたいと思っています。

創設以来、「地域に根差した高等学校」として歴史を刻んでまいりましたが、偏差値の高い進学重視の普通科人気に加え、駅から遠い交通の不便さやクラブ活動の衰退化など様々な要因の影響を受けながらも開校から４０年の歩みを進めてまいりました。高校全入時代と言われる中で、生徒たちの学びのモチベーションが大きく問われています。ややもすれば普通科は中学校の勉強の延長になってしまい、受け身的な学びから抜け切れぬまま卒業していくことが繰り返されているように思います。本校の新学科では、自ら課題を発見し解決する力を育む探究学習を学校設定科目の中で特化しながら、様々な経験を通じて生徒自らが学びのメソッドを創りだせるようになることで、主体的に学ぶこととはどういうことかを知ってもらいたいと思っています。今後は、全国の先進校の取組も参考にしながら、「守北スタイル」を構築していく所存です。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり、ご指導ご支援を賜っております文部科学省、滋賀県教育委員会、運営指導委員の皆様をはじめ、各大学、企業、地域の皆様方等、多くの方々に心より感謝申し上げるとともに、“新生守山北高校”を思い描きながら、日ごろの多くの業務をこなす中で、本事業に向けた校内会議、研修等に協力していただいている本校職員に敬意を表し、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和５年度　文部科学省
「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」実施報告書

目次

〇巻頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
〇目次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第１章　本校の概要
　１―１　所在地　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　１－２　設置学科および在籍生徒数　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　１－３　スクール・ミッション　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　１－４　スクール・ポリシー　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第２章　令和５年度研究開発の概要
　２－１　事業の実施計画の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　２－２　事業の実施日程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　２－３　事業の実施概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　（１）　カリキュラムの検討内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　（２）　管理機関による事業の実施体制や管理方法　・・・・・・・・・・・・・・・31
　　（３）　高等学校における事業の実施体制や管理方法　・・・・・・・・・・・・・・33
　　（４）　運営指導委員会の体制および取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
　　（５）　コンソーシアムの体制および取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
　　（６）　コーディネーターの配置および活動内容　・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　（７）　新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況　・・・・41
　　（８）　管理機関における事業全体の成果検証、評価　・・・・・・・・・・・・・・42
　　（９）　管理機関による支援体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　　（10）　成果普及のための取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　　（11）　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組　・・・・・・・45
　　（12）　他の事業との関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

第３章　研究開発の内容
　３－１　運営指導委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
　３－２　教科主任会議　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　３－３　拡大推進室会議　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
　３－４　学校運営協議会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　３－５　先進校視察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　３－６　新学科設置に向けた先行実施事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　３－７　守山北高校研究成果報告会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81

第４章　参考資料
　４－１　滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画　・・・・・・・・・・・・82

第１章　本校の概要

１－１　所在地

〒524-0004　滋賀県守山市笠原町 1263

１－２　設置学科および在籍生徒数（令和５年５月１日現在）

	１年	２年	３年	計
普通科	143	141	132	416

１－３　スクール・ミッション

① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校

② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校

③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

１－４　スクール・ポリシー

滋賀県立守山北高等学校　スクール・ポリシー

スクール・ミッション　～目指す学校像～

① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

このような生徒を待っています（アドミッション・ポリシー）

① 高校生活に目標を持ち、学習意欲の旺盛な生徒を募集します。
② 部活動や生徒会活動に積極的に取り組み、学校や地域の活性化に貢献できる生徒を募集します。
③ 地域課題に関心があり解決に向けての取り組みや地域との協働活動に意欲的な生徒を募集します。
④ 互いの個性を認め合い、相手の立場に立って物事を考えられる生徒を募集します。

このような教育活動を行います（カリキュラム・ポリシー）

① 地域をフィールドとした体験的な学びと地域課題をテーマに、ＳＤＧｓの視点から探究学習に取り組みます。
② キャリア教育の充実と多彩なカリキュラム、学びのＤＸ等により学力向上に取り組みます。
③ 主権者教育や読書活動などにより、思いやりの心、規範意識などの社会性を育てる教育活動に取り組みます。
④ 生徒一人ひとりを大切にし、個に応じた支援に取り組みます。

このような生徒を育てます（グラデュエーション・ポリシー）

① 「人を想う心」を大切に、多様性を尊重する生徒を育成します。
② 自尊感情を育み、自らの個性や能力を存分に発揮することができる生徒を育成します。
③ 起業家精神にあふれ、地域の課題解決に向け、自ら考え行動する生徒を育成します。
④ 豊かなコミュニケーション能力を備え、他者と協働しながら地域の未来を創造する生徒を育成します。

令和5年3月策定

第２章　令和５年度研究開発の概要

２－１　事業の実施計画の概要（事業申請時のもの）

■実施計画書（所属等は令和５年５月現在）

２－１―１　事業の概要

（１）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 （ふりがな）	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	滋賀県立守山北高等学校 （もりやまきた）	地域社会学科	令和７年度	○

（２）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	４０人	学年制	

（３）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

守山北高等学校では、滋賀県教育研究事業「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定を受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実をめざす教育の研究を行ってきた。また、「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定も受け、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめ、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を推進することで、自分の将来を展望したくましく生き抜く態度や能力を身につける教育の研究に取り組んできた。

具体的には、アクティブワーキングとして、興味関心ある学問や職業について、専門家や先輩起業家の講演を聞いたり、SDGs の 17 の目標の一つを選択して地域課題と結びつけ、福祉施設などの関係機関へフィールドワークに出かけるなど、ＮＰＯ法人と連携して、グループ探究や発表などを実施し、地域の課題や魅力に着目した実践的な学びを推進する素地が培われてきたところである。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では 2040 年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の１つとしている。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、さまざまな切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となる。

守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や「三方よし（＝ウェルビーイングにつながるもの）」の文化的土壌を受け、この地域社会に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、ＮＰＯ等と協働した教育活動を展開することで、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が育まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への

歩みに取り組む新学科の設置を予定している。その主な教育内容は、学校設定教科「みらい共創」を軸に、次のような科目内容を考えている。

「地域理解」では、地域の自然や環境、地理や歴史、生活や文化、産業や経済等について地域の専門家による講義や生徒による調査等により、守山市を中心とした地域社会について理解を深めることを主な内容とする。また、生徒自身のキャリア形成や起業家精神醸成を目途として、地域の事業所等でのインターンシップやジョブシャドウイングに取り組む。

「みらい共創」では、「地域理解」で理解を深めた地域課題や起業家精神（チャレンジ精神）をもとに、グループごとにテーマを決定し、地域課題とウェルビーイングの視点からの解決策を探究し、その成果を発表すること等を主な内容とする。大学や企業等の協力を得て、さまざまな手法で調査研究を推進するとともに琵琶湖に近い立地や豊富な地域資源を活用し、地域をフィールドとした実物・本物体験を重視した探究学習を展開する。また社会で活躍する様々な職種の企業・社会人の協力を得た「企業コラボ学習」を展開する。

「キャリア形成」では、２年次までに探究した地域課題の解決策を地域社会の未来の姿に具体化する取組を主な内容とする。それぞれのテーマに応じた専門家や関係者の協力を得たり内容によっては地元自治体や自治会などと協働したタウンミーティングを開催したりしながら、ウェルビーイングの視点から、地域課題の解決に繋がる起業プランの提案や政策提言等を行うことを目標とする。

２－１―２　事業の目的等

（１）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

本県の状況として、県全体の中学校卒業者数は、令和４年度は 13,781 人とピーク時から 33.6%の減少、令和 16 年度には 12,152 人と、さらに 11.8%の減少が見込まれる。このような人口減少や急速な社会情勢の変化に対応した魅力と活力ある高等学校づくりが必要となっていることから、令和２年度に滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、議論を積み重ね、概ね 10 から 15 年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのための「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」（以下「基本方針」とする。）を、令和４年３月に策定した。

この基本方針では、生徒が社会から学び地域と連携・協働した学校づくり、そして普通科の特色化を進めることとしており、県立全日制高等学校 44 校中 29 校を占める普通科について、学際領域に関する学科、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科等の設置を、高校の魅力化・改革の取組の方向性の一つとして示した。そして教育課程や少人数指導の工夫、外部人材の活用を図ることはもちろん、行政機関や地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためのコーディネーターの配置やコンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等の取組が重要であるとした。

さらに令和４年度には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義するとともに、基本方針に基づき、各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン（以下「魅力化プラン」とする。）」を策定した。守山北高等学校についてはスクール・ミッションを、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校としている。また魅力化プランでは、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重点校に位置づけ、特に新学科設置にむけて取組を推進する。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では 2040 年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の１つとしている。市内には、守山北高等学校の

ほかに県立中高一貫教育校、私立大学の系列附属高校があり、近隣地域には職業系総合学科高校、農業高校、美術科併置や体育科併置普通科高校、スポーツ強豪校、協働学習の教育課程に特色ある普通科高校と多様な特色ある高校が存在する。そのなかで守山北高等学校は、学びの特色のない普通科高校の印象が強く、その上公共交通機関の利便性も悪いことが中学生にとって魅力を感じられない高等学校となってしまったところがある。しかし高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、さまざまな切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、守山市が掲げるアントレプレナーシップとの相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となると考えている。また令和４年度には豊かな自然環境を活用し、次世代を担う環境リーダーの育成やアントレプレナーシップ教育など守山北高等学校の魅力ある学校づくりに向けて、市が連携して取り組みたいとの要望が出され、市から地域連携の強い要請があったところである。

こうした高校教育改革方針、県、守山市の施策など学校を取り巻く状況を踏まえ、地域社会の課題や魅力に着目し実践的な学びを展開し、地域の発展・成長に寄与する人材の育成を図る必要があり、守山北高等学校に「みらい共創科」を設置する。

（２）学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

守山北高等学校のスクール・ミッションは、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校である。そのことから、地域社会に関する新学科の名称を「みらい共創科」とし、目指す生徒像を、「多様性を尊重し、他者と協働しながらよりよい地域の未来を創造する人物」とする。

他者と協働しながら課題解決に取り組む方法の実践において、多様性を尊重しながら自他を大切にする姿勢や共感力を身につけることをめざし、またそれらは起業家精神およびキャリア形成に繋がるものであり、予測不可能と言われる社会において、困難を乗り越え、自らの答を見いだしながら未来を切り拓く力を身につけ、主体性やチャレンジ力を備えた地域の未来を創造する人材の育成をめざすものである。

新学科では、地域をフィールドとする協働的な学びを展開することにより、予測困難な社会において、生徒が地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値を創造することができる力を身につけることを目指す。そのために、オンラインにより個に応じた学びを深化させるとともに地域をフィールドとした本物体験で地域課題や地域の未来の姿を探究する取組を展開する。

取組を推進するにあたっては、地域社会に根差したウェルビーイングの視点から、地域課題を探究し地域の未来の姿を構想することを大切にする。守山北高等学校の立地する守山市は「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進しており、ウェルビーイングの視点からの教育活動は、市民一人ひとりの幸せを実現しようとする地元自治体と未来社会を共創することに繋がる。また、ウェルビーイングの考え方は、近江商人が遺した「三方よし」すなわち、自分・相手・社会の幸せという理念とも共通する。誰もが「幸せでありたい」という想いを持つ一方で幸せの在り方は一様ではない中で、人は人と関わり合いながらよき自分、よき相手、よき社会を実現していくという「三方よし」の理念は、幸せの実現へ示唆を与えている。このように、守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や文化的土壌は、新学科の取組の目標を実現するために必要十分なもの

と言える。加えて、地域に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、ＮＰＯ等と協働した教育活動（フィールドワーク）を展開することにより、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が育まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への歩みを加速させることにもなる。

さらに、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標とする守山市との連携により、小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することを目標とする。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、さまざまな切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。これらの取組の推進にあたっては、学びのＤＸを推進し、本物体験に加えICTを活用した対話的・協働的で深い学びにも挑戦する。現地フィールドワークに加えオンラインを活用した探究活動、Webを通じた探究成果発表等を展開することで、一層幅広い視野から地域課題や地域社会の未来の姿を検証することに繋がることを期待している。

２－１―３　実施体制

（１）管理機関における実施体制や事業の管理方法

本県教育委員会事務局における実施体制については、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長１名、参事（校長級）１名、主担当として主査（副校長・教頭級）１名、主任主事１名をその任にあてる。

担当者と校長間で取組状況やコンソーシアムの構築・管理運営について随時情報を共有するとともに、月１回以上は守山北高等学校に出向き、コーディネーター等も交えながら取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行う。また、コーディネーターの活動状況については、毎月活動報告書を高校教育課魅力ある高校づくり推進室へ提出してもらい、業務実態を把握・管理する。あわせて高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動にも立ち会い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーター等と協議を行いながら進め、事業管理を行っていく。

また、県の「魅力化プラン」において地域連携重点校に指定した普通科高校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を定期的に開催することを予定しており、この連絡会議において、各高校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認することとしている。この連絡会議の場で、守山北高等学校からの諸提案を行い、関係各組織に積極的な協働・協力を要請し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、地域連携にかかる課題の共有と成果の普及を行っていく。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は原則として年２回開催（令和５年度の連絡会議は、令和６年１月下旬に開催予定）し、本県の地域連携重点校について、守山北高等学校からの提案等により、諸課題等の情報共有を行うとともに、他の高等学校の進捗状況を確認しながら、守山北高等学校の改善点等を把握することとしている。働き方改革の観点から、オンラインによる開催も積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は滋賀県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室長を事務局長に据え、参事（校長級）および業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、指導主事を配置する。

この「地域連携重点魅力化連絡会議」に加え、守山北高等学校については、年３回、運営指導委員会を開催することで、コンソーシアムの構築や管理運営を含めた事業の進捗状況や成果につ

いて、その都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。運営指導委員会は外部有識者で構成するものとし、事業の目的に鑑み、以下の構成で委員委嘱を行う。

・委員　学識経験者（滋賀大学教育学部教授）：評価や学校経営、改革について指導
・委員　学識経験者（立命館大学経済学部准教授）：滋賀県「学校を核とした地域力強化プラン」に係る推進協議会委員でもあり、地域協働について指導
・委員　守山市長：地元行政の立場から、地域連携・地域人材育成について指導
・委員　民間企業（株式会社日本政策金融公庫　大津支店支店長）：高校生ビジネスプラン・グランプリを主催しており、アントレプレナーシップの育成について指導・助言
・委員　民間企業（ＮＰＯ法人碧いびわ湖）：環境教育の専門家として指導

運営指導委員会は、県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室参事（校長級）が事務局長となり、業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、主任主事をその任にあてる。

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、管理機関では、令和４年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この事業において、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

コーディネート人材に期待する、評価する考え方は３点ある。１点目として、高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、生徒を指導するというより、授業において地域との関わり、機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介したりするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを求めたい。２点目は、県立学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を求める。高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することも期待する。３点目としては、地域連携の流れを持続可能なものにするため、属人的な活動で終わらせるのではなく、協働体制（コンソーシアム）を構築・充実させ、事業指定終了後も持続可能な協働体制構築のコーディネート機能を期待する。その評価は、校長との面談を含めたコーディネート人材の自己評価、コーディネート人材も企画にかかわる学校設定教科の実施に向けた試行的な各種授業・行事での生徒アンケートの結果や、運営指導委員による事業内容全体を含めた教育課程の検証、事業の進捗状況等にかかわり評価を行う。また事業全体としても、年２回実施の学校評価（自己評価や学校関係者評価）において行い、複数の視点で評価していく。

令和４年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高校 29 校のうち、地域連携重点により魅力化を図ることを推進する 13 校で「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和５年度から開催することを予定している。その中で、守山北高等学校による地域社会に関する学科の設置に向けた具体的な提案を期待するほか、普通科改革の推進のための必要条件を探るなかで事業全体の成果・検証を行う。併せて守山北高等学校では、年３回、運営指導委員会を開催し、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てることとしている。

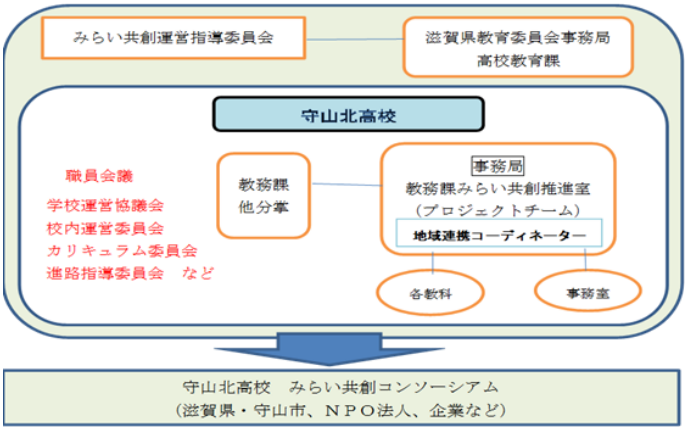
さらに、管理機関は、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業のその後の取組

や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を４年後・７年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究し評価も行う。集計・分析した調査結果は、国の事業終了後も、事業実施校や県教育委員会において、本事業の成果の検証および「魅力化プラン」の地域連携重点の事業成果のための基礎資料として役立てることとしている。

また、スクール・ミッション、スクール・ポリシーの観点からも事業全体を成果検証し、評価していく。特に、高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、行政機関の施策への反映やコンソーシアムや報告会でのコメント等で社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としての観点で評価したい。さらに、県教育委員会で実施する中学校等卒業予定者進路希望調査の結果も注視し、守山市内４中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力、成果について、守山市教育委員会とも協力し分析・検証していくこととしている。

（３）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

校長は、校務分掌の１つとして、教務課内にみらい共創推進室を設置する。プロジェクトリーダー（専任）および担当教員（教務課兼務）、コーディネーターを配置、協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築の原案作成にあたり、みらい共創科設置の事務局となる。カリキュラムに関すること、進路指導に関すること、学校全体の教育活動に関すること等、内容と必要に応じて、カリキュラム委員会、進路指導委員会、校内運営委員会などの協議を行い、最終的には職員会議で全体報告をして取組を進める。



校長と教頭は、みらい共創推進室との定期的な会議を実施し、事業全体の企画立案や、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討状況、地域の各種主体と連携した授業や活動などの企画について報告を受け、事業全体を管理していく。また Microsoft Teams を活用することで、管理職・教員・コーディネーターの日頃のやりとりを可視化し、お互いの状況把握が常時可能な状況をつくる。

みらい共創推進室を中心に、育成する資質・能力を、職員会議のなかで学校全体として明確・共有化を図りながら、学校運営協議会やコンソーシアム等を通じて地域とも共有化を図り、カリキュラム開発を計画していく。そして担当教員・コーディネーターが連絡・調整を図りながらカリキュラム全体の有機的なつながりを意識した教育実践を展開する。その実践に対し、生徒の活動への総体的な評価活動、地域住民やコンソーシアムへの意識・評価に関する調査（アンケート）を実施する。その評価活動や調査結果を年３回の運営指導委員会や、コンソーシアム代表者会議、職員会議に諮り、みらい共創推進室を中心に、全教員で生徒と地域の実態を踏まえた教育実践として改善・充実を図る協議を行うことで、ＰＤＣＡサイクルを展開していく。そのうえで１年間の成果を管理機関が行う「地域連携重点魅力化連絡会議」において、守山北高等学校からの提案等を行い、地域連携に対する諸課題等の情報共有を行うとともに、守山北高等学校の改善点等に関する助言も得たいと考えている。

事業開始当初は、学校と地域の関係構築・事業推進をまずは大事にしながら、次に本事業に関するコンソーシアム構築・メンバー調整を行い、各主体との調整や立ち上げ、その運営を実施し

ていく。
　また、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者と校長で取組状況を共有するとともに、月１回以上は、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行うほか、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリ-ダーなどと協議を行う。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

　地域社会学科に関わる研究開発の実績としては、令和３年度からマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を彦根工業高校において実施している。彦根工業高等学校は、「ものづくりはひとづくり」をモットーとした創立 100 年の歴史ある学校である。高校がある彦根市には高等教育機関として、滋賀県立大学工学部・環境科学部や滋賀大学データサイエンス学部等がある。伝統技術等のビッグデータ分析など ICT・デジタル教育で連携を図りながら、社会的課題を新たなチャンスととらえ、高付加価値を持つ産業へと創出できる“人財”を多様な主体の共創により育成するシステムを構想し、研究推進に取り組んでいる。
　絶えず革新し続ける最先端技術と滋賀の風土が培ってきた伝統産業等の技と心を生かし、地域産業界と彦根工業高校が一体・同期化し、郷土愛にあふれた人財育成によって地域を活性化させ、地域産業の未来像の実現を資するものである。
　また、令和元年から実施された文部科学省事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に３校が申請を行ったところ、令和元年度からグローカル型アソシエイト校に高島高等学校、令和２年度からプロフェッショナル型アソシエイト校に大津高等学校が認定された。
　高島高等学校は、地域の特性に応じながら同時にグローバルな視点ももって社会課題の研究を行う、フィールドワークを含む「高島学」での探究的な学びを実施している。また大津高等学校は地域の課題を家庭科の視点から捉え、地域と連携・協働しながら、地域理解を深化させ、職業観を醸成しながら、地域をどのように活性化し、地域に貢献していくべきかに取り組んでいる。両校の事業指定は終了したが研究成果をいかし、地域連携を推進する取組を継続していくとともに、県内高等学校へも情報発信を行う。
　さらに、滋賀県独自の研究指定事業として、３つの研究事業を実施している。
　「県立高等学校魅力化推進事業」では、モデル校に地域連携のためのコーディネーターを配置し、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICT による学校間連携授業に取り組んだ。
　「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」では、研究推進校に守山北高等学校を指定し、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実に取り組んだ。
　「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」では、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組み、守山北高等学校をはじめ、17 校を指定している。
　本県では、県立高等学校と地域社会との連携は重要であるととらえ、守山北高等学校をはじめ複数の学校に対し、県独自の地域連携事業をはじめ、学校運営協議会設置を推進し、コミュニティ・スクールを拡大してきた。現在、守山北高等学校はコミュニティ・スクールとして地域連携を深めているが、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を

受けることにより、学校と地域の関係性をさらに深め、学校と地域の連携・協働による教育活動の推進の先導性を高めることで、本県高校教育の更なる充実をはかりたい。

（５）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
滋賀大学教育学部 教授	大野　裕己	評価、学校経営、改革の視点で指導助言
立命館大学経済学部 准教授	武井　哲郎	滋賀県「学校を核とした地域力強化プラン」に係る推進協議会委員 地域協働で指導助言
守山市 市長	森中　高史	市長。行政のトップとして、地域連携、地域人材育成を指導助言
株式会社日本政策金融公庫 大津支店長	桶土井　雅章	大津支店長。企業家精神、ビジネスプランについて指導助言
ＮＰＯ法人碧いびわ湖 常務理事	根木山　恒平	滋賀県の環境教育を推進する専門家として指導助言

（６）運営指導委員会が取り組む内容

運営指導委員会には県教育委員会から参事・主査・主任主事も入り、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価を行う。新学科の目的である、地域を通して学び、将来社会人として地域や社会で活躍・貢献できる力を伸ばす教育について、教育課程の検証、事業の進捗状況等について指導助言を行う。また地域や関係機関のコンソーシアムに働きかけ、学校とコンソーシアムを有機的につなげる役割や、さらに高校教員やコンソーシアムの参加主体に向けた、新学科の理解向上に向けた研修を推進することで、高校と地域のスムーズな連携実現を目指す。

２－１―４　学際領域学科又は地域社会学科等における取組

（１）学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

琵琶湖に近い立地、豊かな自然環境や歴史環境等の地域資源を活かした本物体験による地域をフィールドとした探究的な学びと、小中高の連携によるキャリア形成や地域人材の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育（地域人材の育成）を新学科における教育内容の柱とし、学びの方法・手法として、学びのＤＸを推進し、新しい学びの姿を構築する。

１人１台端末を活用する各教科の学習では、学び直しや発展的な学習に対応できるよう個に応じた学びを提供する取組を推進する。また、探究学習の推進にあたっては、大学や企業等の協力を得ながら、生徒自身が、ICT を活用した調査研究に取り組める環境の整備を進め、本物体験とオンラインによる対話的・協働的で深い学びの実現を目指す。例えば、対面では都合がつかない講師とも、一斉的な全体講義だけでなく、グループによるディスカッションを行い、探究の視点の広がりや深まりを期待する。また対面においても、オンラインにおいても、講師には１回の講義ではなく、複数回にまたがる指導も考えている。講師が社会人であれば本校生徒に対面で指導する時間をとりにくい状況も考えられ、オンラインを有効に活用したいと考えている。さらに教科学習以外でも、オンラインの活用により、芸術やスポーツの専門性のある教員や生徒が地域の中学校等とともに活動したり、地域や大学等の専門家による指導を受けたりする活動を展開する。この活動は、生徒や地域住民で創り上げるスポーツ・文化活動への発展が期待でき、地域と

の協働活動の展開や地域の活性化に繋がるものとなる。
　教育内容の中心となる地域課題とその解決策を探究する学習は、ウェルビーイングの視点から、地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値の創造に繋がるものとなるように取組を推進する。「総合的な探究の時間」では、アントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育に取り組み、キャリア形成と起業家精神（チャレンジ精神）を育むこととする。また、学校設定教科「みらい共創」においては、各学年に系統的に学校設定科目を配置し、「総合的な探究の時間」で培った起業家精神に裏付けられた探究学習が展開できるように配慮する。具体的な学校設定科目としては、１年次に地域社会の理解と起業家精神醸成をねらいとする「地域理解」、２年次に地域をフィールドとして地域課題やその解決策を探究するとともに、企業コラボ学習を展開する「みらい共創」、３年次にはウェルビーイングの視点をもとに地域課題の解決策を起業プランや政策提言として具体化する「キャリア形成」を各１単位設定する。各科目における教育内容やそのねらい、評価等については、大学講師のカリキュラム・アドバイザーや革新的な教育活動講師の指導・助言も受けながら研究を進めていく。
　「地域理解」「みらい共創」のなかでコンソーシアムの関係団体には、生徒の探究学習の進め方や課題の設定、具体的なフィールドワークなどでの指導やコラボ学習で協力をいただくことを、「キャリア形成」ではコンソーシアム関係者や地域住民、中学生等と地域の未来像などについて懇談を行い、生徒の提案についての評価にかかわっていただくことを想定している。
　ウェルビーイングの視点からの探究学習は、一人ひとりの幸せを実現しようと「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進する守山市の構想とも一致し、守山市との協働関係を一層深めることで、学校と地域との未来共創に繋がり、まちづくりにも寄与する取組となる。さらに、一人ひとりの幸せを大切にするウェルビーイングの視点は、生徒が、フィールドワークやオンラインによる他者との関わりを通じて、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢を育むことに繋がり、インクルーシブな社会の姿を地域の人々と共有し、学校と地域の未来共創に発展する取組となる。

（２）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法
　すでに連携・協力いただいている関係機関もあり、運営指導委員会委員の助言も得ながら、コンソーシアムの体制作りを行う。地域や関係機関それぞれが主体的にできることや意見を出し合う場として、コンソーシアムを構築する。
　みらい共創推進室が中心となりコンソーシアムとやり取りを行う。コンソーシアム構成員は、地域に根差したウェルビーイングの観点から県立大学地域共生センターをはじめ、大学や福祉・農業・まちづくり団体・機関等を、アントレプレナーシップ・キャリア教育として、商工関係団体・施設、地元起業家等を構成員に迎え入れる。
　本事業におけるコーディネーターは、まずは高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、授業において地域との関わりや機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介するなど、地域に興味を持つきっかけづくりを進める。そのうえで学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を発揮し、高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することを期待する。さらに地域連携の流れを持続可能なものにするため、学校と有機的につながった協働体制（コンソーシアム）を構築していく。
　地域や社会の将来を担う人材の育成として、行政機関、地域住民、産業界、大学等と連携・協働したフィールドワークによる調査研究や企業コラボ学習、インターンシップなどによる地域課題解決にむけた学習を推進するコンソーシアムとしたい。学校運営協議会や総合的な探究の時間における生徒フィールドワークの協力者から、さらに生徒の課題研究テーマに応じて、新規開拓も行う。結果として高校を核とした有機的なつながりとすることで、地域活性の一端を担うことを視野に入れる。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤

し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたいことから、コンソーシアムの構成員からも、高校生の取組に対する社会的評価も期待している。

（3）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
滋賀県立大学	上田　洋平	地域共生センター（地域文化学）
龍谷大学農学部	調整中	食料農業システム学科　食の経済
びわこ成蹊スポーツ大学	調整中	総合型地域スポーツクラブの研究
守山市商工会議所	調整中	1300 件超の参加事業所からの実例
公益社団法人守山青年会議所	調整中	若手実業家と未来を共創
守山市総合政策部企画政策課	中島　義訓	課長　まちづくり推進
守山市教育委員会学校教育課	調整中	小中高連携によるキャリ教育推進
守山市立守山北中学校	髙田　毅	
守山市立河西小学校　他	調整中	
株式会社みらいもりやま２１	調整中	市街地活性化事業、空き店舗対策
笠原地区自治会	確認中	学校所在の地元自治会
社会福祉法人慈恵会	調整中	学校所在の地元社会福祉団体
DAVID LAYER(株)ＣＯＬＯＲ	伴野　友彦	守山市で起業（新庄スーツ）、ＯＢ
ピエリ守山	調整中	地元ショッピングモール等の企業
JA ファーマーズマーケット	調整中	地元の特産品、農産物販売等企業
滋賀県商工観光労働部　他	調整中	行政機関

（4）配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
インパクトラボ	上田　隼也　（代表理事）
成安造形大学 未来社会デザイン共創機構	田口　真太郎（助教）

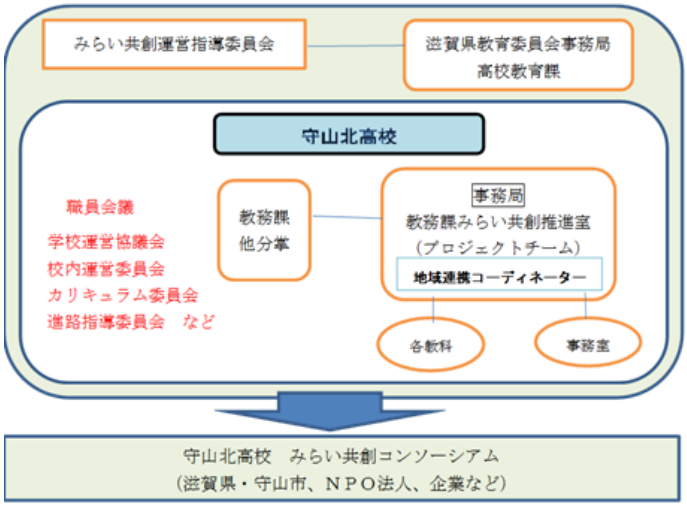
▼当該者の主な実績

上田氏は、立命館大学生命科学部卒業後、2019 年一般社団法人インパクトラボを創業。学校法人立命館で、SDGs 推進本部イノベーション・オーガナイザーとして、社会起業家支援プラットフォーム立ち上げに参画。さらに、立命館守山中学校・高等学校にて総合的な探究の時間の授業を担当。田口氏は、滋賀県立大学大学院環境科学研究科修了後、近江八幡市の㈱まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事。文化的景観や伝建地区、無形文化財の活用を統括。2015 年からは地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援に取り組み、高校生や大学生の地域探究学習をサポート。

▼コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

２人のコーディネーターであわせて月 11 日、守山北高等学校で勤務し、教務課内に設置するみらい共創推進室に所属し、プロジェクトリーダーおよび担当教員と協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築にあたる。上田氏の学校法人で社会起業家支援に参画、総合的な探究の時間の授業を担当した実績から、教育や起業について、田口氏の近江八幡市の㈱まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事、地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援の取組で

高校生や大学生の地域探究学習をサポートした実績から、行政やまちづくり視点での活動を期待している。両者の強みを生かして、高校教育、アントレプレナーシップ、地域共創という新学科の目標を達成したい。



またコーディネーターは、県教育委員会高校教育課魅力ある高校づくり推進室や守山北高校プロジェクトリーダーと協働し、主に事業全体の企画立案やコーディネートを行う。

担当教員と連携しながら、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討に関連して、地域の各種主体と連携した授業や活動などを企画・実施する。本事業にかかわる行政や民間事業者、地域組織など多様な主体との調整や事業促進を、対面や電話、オンラインでのやり取りで行う。また実施事業を学校ウェブサイトや SNS などを活用した情報発信を行い、学校と地域の関係構築も行う。高校と地域住民の接点を作り、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進する役割も担う。

事業開始当初は、学校と地域の関係構築と事業の推進、次に本事業に関するコンソーシアム構築に向け、各主体との調整や立ち上げに関わり、運営を支援していく。

（５）学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

県教育委員会では、急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者から成る滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、令和２年度から２年間にわたって議論を積み重ねてきた。そこで出された答申は、令和３年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和４年３月「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」として策定、公表した。

令和４年８月には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、守山北高等学校については、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校とし、生徒、保護者にも公表した。

令和４年 11 月には、「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」策定に際し、市町のまちづくり主管課、教育委員会、地域の中学校長、保護者とそれぞれの代表に出席いただき、滋賀の県立高等学校の魅力化の方向性についての意見聴取（地域別協議会）を実施した。その中の意見を受けて、令和５年３月には「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を提示した。守山北高等学校については、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重点校として、新学科設置を視野に入れ魅力化を推進する。

守山北高等学校はコミュニティ・スクールであり、学校運営協議会のなかでも、高等学校の魅力化やスクール・ポリシーについて検討する中で、地域や学識経験者・保護者に説明し、それぞれの目線で意見をいただくことができた。

今後も管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、毎月発行する保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学

校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。

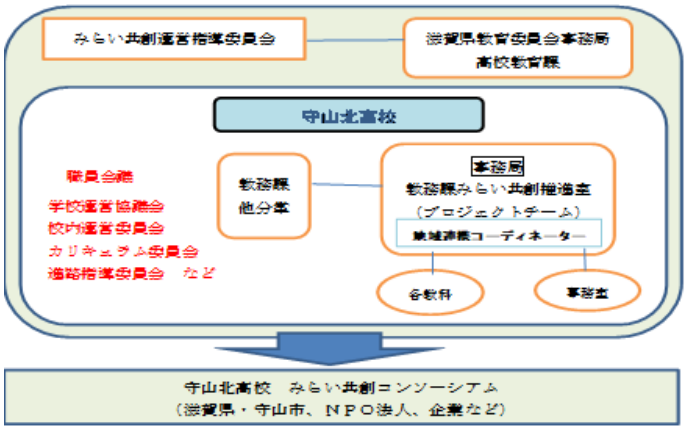
また、守山北高等学校では令和５年度ＰＴＡ総会やＰＴＡ新聞、学校通信などの機会を捉え新学科設置に向けた情報発信や、実施事業を学校ウェブサイトや SNS などを活用した情報発信を行い、守山市が高校生を対象に実施する「守山市の将来を支える若い世代の起業家教育推進事業」にも参加し、他の守山市内の高校生とも議論を重ね、その成果発表を行うことで、守山北高等学校の生徒・保護者・地域等へ新学科設置の周知に努め、高校の所在地の守山市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌「リビング滋賀」に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたい。年度末には、研究成果報告会（守山市、市内中学校・高校、コンソーシアム関係者等）を実施する予定である。

令和６年度には、全県下の中学生・保護者・地域住民を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うとともに、守山市を中心に、地域連携の取組、学校改革についての説明会を、地元小中学校、地元商工会議所、地元自治会を基本とした形で実施し、生徒・保護者・地域に対する説明を行う。また学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信をしていく。

２－１―５　実施計画

（１）３ヶ年の実施計画の概要

令和５年度、校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課みらい共創推進室（プロジェクトチーム）を組織する。そのうえで、委嘱した運営指導委員、校長、教頭、事務長、教務主任を中心に研究にかかわる組織ならびに運営指導委員会、コンソーシアムを、右記の通り構成する。



管理機関の担当者と校長は、月１回以上は取組状況を共有しながら、諸課題の解決に向けた定期的協議を行う。また生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動を複数回見学し、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行い、今年度は学校設定科目「地域理解」「みらい共創」「キャリア形成」のシラバスの充実をはかる。例えば、「食・健康」をテーマに課題設定したグループでは、「学校給食と地域特産物」「食物アレルギー」「子ども食堂と現代社会」や、「ビワイチ、わた SHIGA 輝く国スポ・障スポという本県施策と地域」や「健康とは何か」という研究主題を、フィールドワークも踏まえながら、ウェルビーイングの視点をもって研究し、そこから見える地域のみらいを考えたい。校内事務局では、地域連携コーディネーターと協働して、学校設定教科・科目の内容と育成したい資質・能力の関係について、運営指導委員会での評価・検討も受けながら、改善を重ねていきたい。

管理機関においては、「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第５号）」改正を行い、新学科設置を正式決定する。また「地域連携魅力化重点会議」「運営指導委員会」を開催し、課題の整理や他校への情報発信、連携促進に努める。

令和６年度は、新学科設置の周知活動として、県教育委員会ホームページはもちろん、毎月発行する保護者向け情報誌「教育しが」や、「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行う。また８月には高等学校が主体なり、11 月には県教育委員会が主催し学校説明会を実施する。並行して、地域連携コーディネーターと協働して学校設定科目について、普通科生徒の教育課程を一部変更するなど、指導と評価を一体的に行い、教

育課程について、総合的な探究の時間を含めカリキュラムマネジメントを図り、改善を図るとともに、コンソーシアム構築の充実を図る。卒業生には、「地域における課題に関わりたいと思うか」、「社会課題について、家族や友人など回りの人と積極的に議論しているか」等のアンケートを実施し、新学科１期生との比較データとしていきたい。

令和７年度入学生が１期生となる。地域連携コーディネーターと協働して練り上げた学校設定科目や総合的な探究の時間、その他各教科の教育活動等をマネジメントしながら実施し、生徒アンケートや関係者の評価を受けながらカリキュラムについてさらに改善したり、構築したコンソーシアムの充実化を図りながら、指定事業終了後の体制づくりについても、守山市やコンソーシアムの関係団体等と確認を行う。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、コンソーシアムの構成メンバーを再検討したり、学校運営協議会組織とも関連付けたりしながら、より実効性のある活動ができる組織としていく。

（２）令和５年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
４月		
５月	・事業計画の検討 ・学校設定教科・科目の検討 ・「総合的な探究の時間」の検討 ・ＤＸ推進体制の検討	・運営指導委員およびコンソーシアム構成員への事業説明と意見聴取
６月	・事業計画の検討 ・学校設定教科・科目、「総合的な探究の時間」の検討（カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・ＤＸ推進体制の検討	・第１回運営指導委員会 （事業説明・学校設定教科意見聴取）
７月	・学校設定教科・科目、「総合的な探究の時間」の検討（カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・ＤＸ推進体制の検討	・第１回コンソーシアム代表者会議 （事業説明・学校設定教科意見聴取）
８月	・学校設定教科・科目、「総合的な探究の時間」の検討（カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・ＤＸ推進体制の検討	・地域中学校との連携（事業説明等）

9月	・学校設定教科・科目の検討・試行 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・起業家精神教育事業実施 （革新的な教育活動講師（４人）） ・ＤＸ推進体制の整備	
１０月	・学校設定科目「地域理解」・「みらい共創」のモデル授業（キャリア形成）実施 （カリキュラムアドバイザー２回・革新的な教育活動の講師（４人）） ・個に応じたＩＣＴ活用の研究 ・地域中学校の部活動調査	・第２回運営指導委員会 （９・10 月のモデル授業等の検証） ・第２回コンソーシアム代表者会議 （モデル授業の評価・協力依頼） ・学校運営協議会 ・地域中学校との連携
１１月	・事業計画修正等 ・学校設定科目「地域理解」・「みらい共創」のモデル授業(地域課題) （カリキュラムアドバイザー２回・革新的な教育活動講師（４人）） ・地域課題探究テーマの決定 ・個に応じたＩＣＴ活用の研究 ・地域中学校の部活動調査	・地域中学校との連携 ・モデル授業・探究学習への協力
１２月	・地域課題フィールドワーク、企業コラボ学習予備調査 （カリキュラムアドバイザー） ・個に応じたＩＣＴ活用の実践研究 ・地域中学校の部活動調査	・事業中間報告会 ・探究学習への協力 ・地域中学校との連携
1月	・学校設定科目「地域理解」・「みらい共創」のモデル授業(地域課題) （カリキュラムアドバイザー・革新的教育活動講師（４人）） ・探究学習フィールドワーク実施 ・個に応じたＩＣＴ活用の実践研究	・モデル授業・探究学習への協力 ・第３回運営指導委員会（事業報告会） ・地域連携重点魅力化連絡会議 （県教育委員会主管）
2月	・地域課題探究の発表会（「みらい共創」研究授業） （カリキュラムアドバイザー） ・個に応じたＩＣＴ活用の検証	・学校運営協議会 ・第３回コンソーシアム代表者会議 （構成員からの評価・意見聴取） （課題の共有、次年度の協力依頼）
3月	・モデル授業・研究授業の検証 ・探究成果のＷｅｂ掲載 ・オンライン部活動のモデル実施 ・次年度計画策定	・研究成果報告会 （守山市、市内中学・高校、コンソーシアム関係機関等）

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

管理機関による「地域連携重点魅力化連絡会議」を年２回開催する。ただし令和５年度については令和６年１月下旬に開催する。働き方改革の観点から、オンラインによる開催を積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。その際に守山北高等学校から事業の進捗状況や成果と課題について報告を行い、他の地域連携に取り組む県内高等学校への情報提供とともに評価も行う。

守山北高等学校において、年３回（おおよそ６月、10 月、１月）、運営指導委員会を実施していくなかで、本構想において実現する成果目標の設定を行う。現時点においては就職希望者のうち県内に就職する生徒の割合を 95%以上とすることや、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合 80%以上とすること、生徒アンケートにおいて「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」を 80%以上、「地元に貢献したいと思う生徒の割合」80%以上、「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85%以上とすることなどを想定している。

また、公益財団法人日本財団「18 歳意識調査第 46 回国や社会に対する意識」（令和４年度）によると、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」とする肯定的回答は 30.1%、「社会課題について、家族や友人など回りの人と積極的に議論している」は 34.2%となっており、生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識の向上は喫緊の課題であり、事業を実施することにより、いずれも 60%以上とすることも想定している。

守山北高等学校は、地域連携を重点として高校の魅力化を推進し、地域で活躍する人材を育成する高校として、生徒が地域に赴き、地域の人々と協働して何かに取り組む回数や地域の方々や卒業生を学校に招く回数をあわせて年間 20 回をめざし、地域に開かれた学校づくりを推進する。また自治体に対する政策等の提案を年間３回、市内の高等学校による合同発表会や研究報告会等への参加回数を最終年次は６回としたい。

管理機関としては、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を４年後・７年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究する。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、コンソーシアムの構成メンバーを適時再調整しながら、学校運営協議会組織とも関連付け、より実効性のある活動ができる組織としていく。

２－１―６　成果の普及のための仕組み

管理機関では、令和４年度から県予算の「県立高等学校魅力化推進事業」を実施し、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置において、コーディネート人材の必要性が見えてきたところである。守山北高等学校において開催する年３回の運営指導委員会を通じた研究の深まりにより、「魅力化プラン」の中で、地域連携重点による魅力化推進を指定した普通科 13 校による「地域連携重点魅力化連絡会議」の中で、地域社会に関する学科の設置推進に向けた具体的な提案により、地域連携の課題研究と解決の方向性の提案、さらに他校の小学科検討推進を期待している。

また、生涯学習課が主管する「県立学校コミュニティ・スクール推進事業研修会」における事例発表を行うことにより、コミュニティ・スクールの円滑かつ効果的な導入や取組の充実が図られ、県立学校の地域連携・協働の推進につなげたい。

さらに県総合教育センターにおける中堅教諭等資質向上研修において、「これからの滋賀の県立高等学校のあり方について」と題し、学校改革の視点として守山北高等学校の取組について講義することにより、中堅教諭の学校の魅力化・改革推進に対する資質向上、学校改革のボトムアップの力につなげ、他の県立高等学校改革や将来の管理職育成にいかしたい。

さらに県ホームページへの掲載や、県内全ての小中学生と保護者に配布される情報誌「教育しが」で取組を紹介し、広く成果を発信するほか、守山北高等学校では、オープンスクールを年３回実施するとともに、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信する。また守山市の公報や学校独自の広報誌（学校通信）を発行するなど、地域住民や地元中学校等に向け情報発信を行っていく。

２－１―７　国の指定終了後の取組継続のための仕組み

①管理機関

・国の指定終了後も、「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

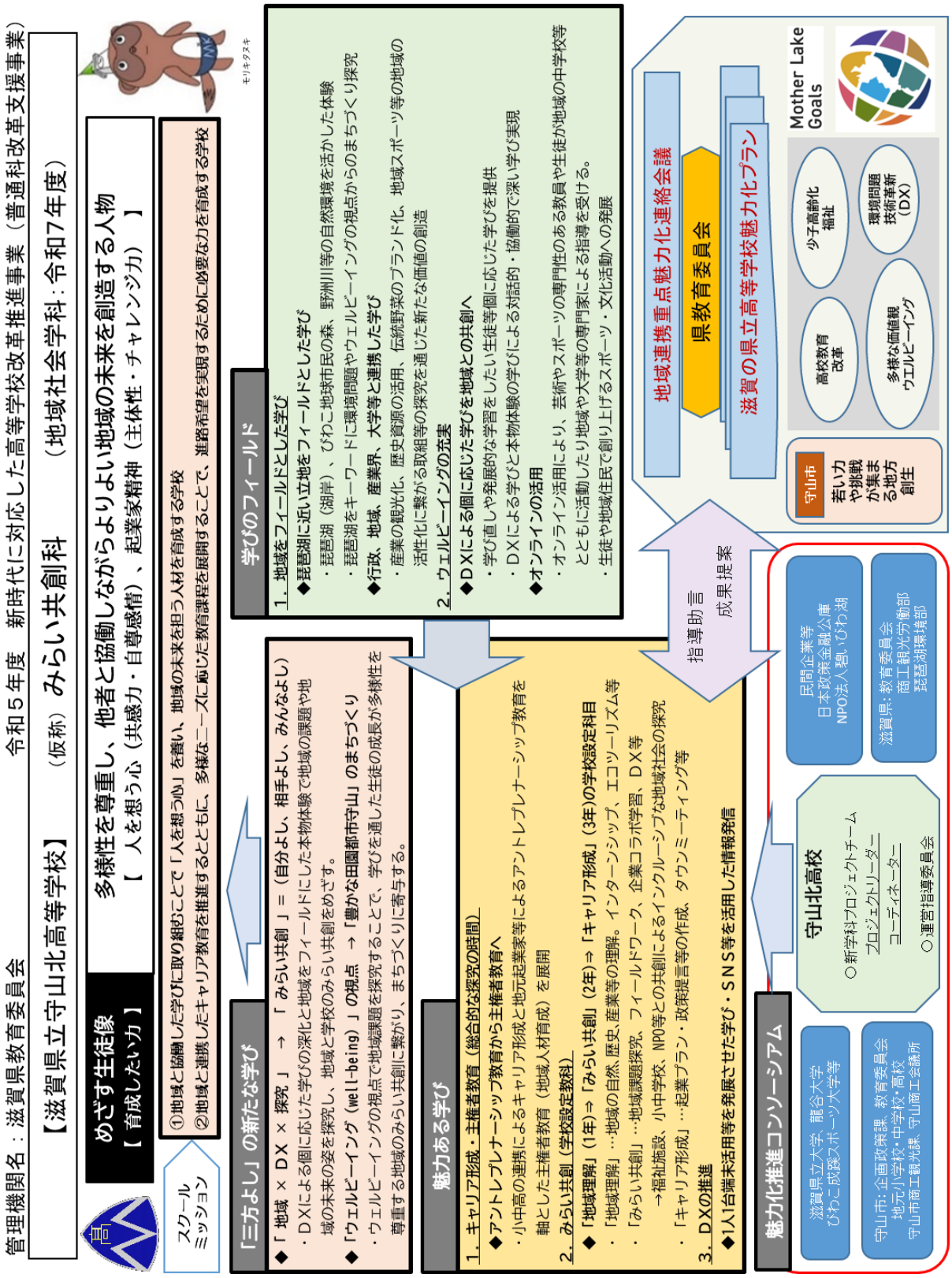
・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、管理機関である県教育委員会は守山市と事業指定３年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。

・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した、「魅力化プラン」の事業成果の検証を行うとともに、教育委員会内の体制整備を行い、また必要な予算を獲得し、守山北高等学校が、県予算で自走していけるよう必要な支援、コンソーシアムの継続を行う。

②守山北高等学校・守山市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、守山市全体でも、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

■新学科構想ビジュアル図



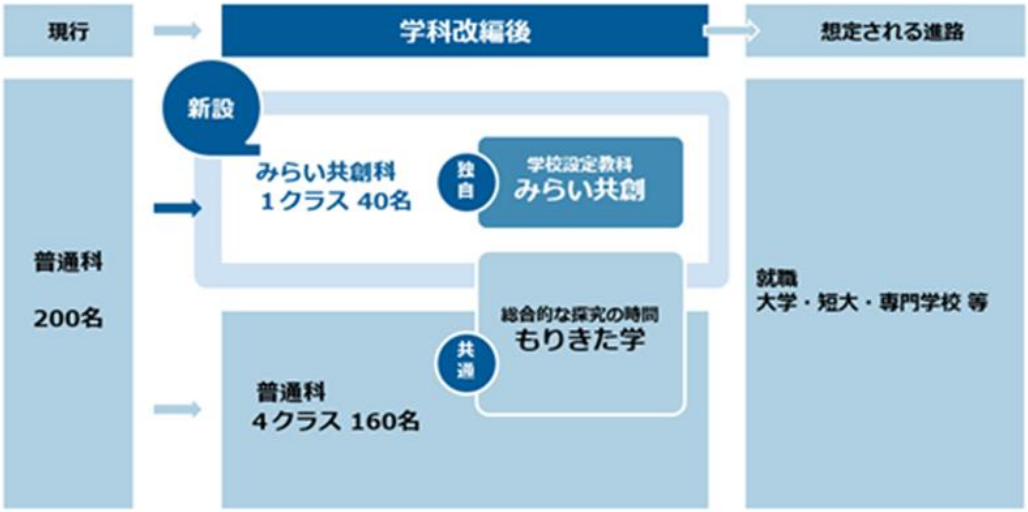
２－２　事業の実施日程（事業結果説明書より）

事業項目	実施日程（令和５年６月１日～令和６年３月３１日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
新学科推進委員会			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
外部講師による講座			●						●			
フィールドワーク										●		
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会						●			●			●
先進校視察				●	●		●		●			
コーディネーター												
コーディネーター（上田氏）			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（田口氏）			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
オープンスクールの実施					●	●						
地域中学校への訪問												●
成果発表・成果普及												
中堅教諭等資質向上研修								●				
地域連携重点魅力化連絡会議										●		
公開授業										●		
研究成果報告会												●
成果検証												
先行実施授業等における 生徒の事後アンケート等			●						●	●		●
カリキュラム検討に係る 生徒アンケート									●			
成果目標アンケート										●		
中学校等卒業予定者の進路志望調査										●		

２－３　事業の実施概要（事業結果説明書より）

（1）　カリキュラムの検討内容

本校は、令和７年度に地域社会学科「みらい共創科」を１クラス設置する。今年度から、スクール・ミッションを踏まえたカリキュラムの検討を進め、魅力ある学校づくりを開始した。



①　スクール・ミッション

・未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校

・地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校

・地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を養成する学校

②　本校の現状／学校全体の魅力化

■本校の現状（課題）

守山市内には、本校の他に県立中高一貫教育校、私立大学の系列附属高校があり、近隣地域には職業系総合学科高校、農業高校、美術科併置や体育科併置普通科高校、スポーツ強豪校、協働学習の教育課程に特色ある普通科高校と多様な特色ある高校が存在する。その中で本校は、学びの特色のない普通科高校の印象が強く、その上公共交通機関の利便性も悪いことが中学生にとって魅力を感じられない高等学校となってしまったところがある。しかし高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、守山市が掲げるアントレプレナーシップとの相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できると考えている。

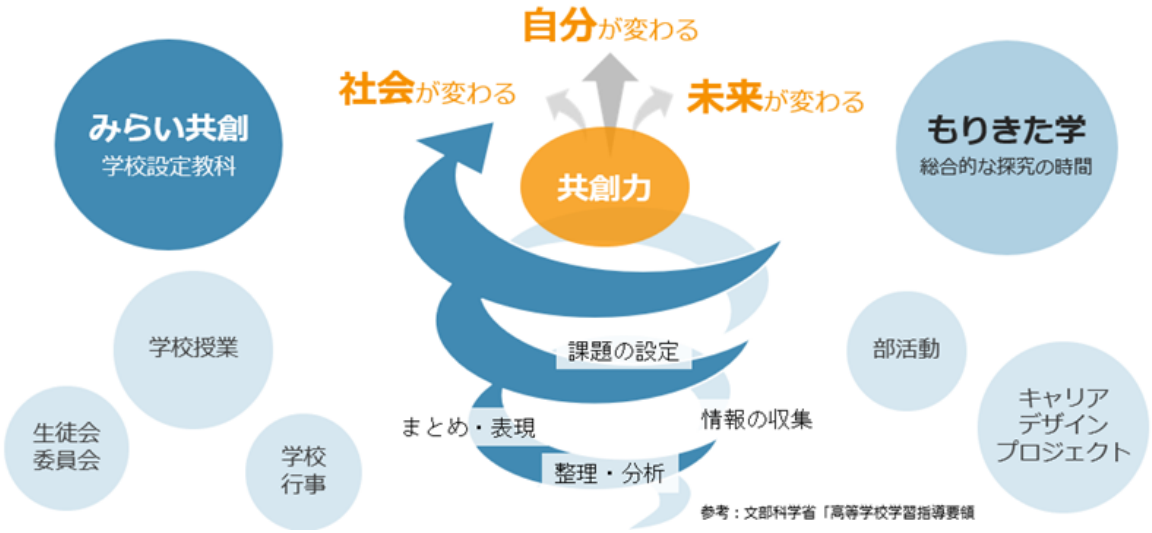
▼入学者数の推移

入試年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
募集定員	200	200	160	200	200
入学者数	200	183	153	149	142
充足率	100%	91.5%	95.6%	74.5%	71.0%
一般選抜倍率	1.00	0.76	0.89	0.62	0.52

■学校全体の魅力化

「未来を共創し、未来を構想するプログラム」をキャッチコピーとして、学校の授業や行事、部活動、キャリアデザインプログラム（キャリア学習）に加え、「もりきた学（総合的な探究の時間）」と「みらい共創（学校設定教科）」によって探究的な学びに相乗効果をもたらす。これらを通して、新学科だけではなく学校全体を見据えたカリキュラム・マネジメントが必要である。

▼イメージ図



③　実施教育課程

新学科「みらい共創科」のカリキュラムを検討するにあたり、カリキュラム検討委員会を設置し、分掌会議や教科会議（月１回程度開催）を通して、教職員の意見や考えを取り入れながら、新学科カリキュラムのブラッシュアップを行った。

新学科「みらい共創科」は、学校設定科目「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修することとする。特に「みらい共創ⅡＢ」については、夏季休業中の集中講座として実践型インターンシップ（もりきた版デュアルシステム）を実施する予定である（詳細は後述）。

▼新学科と普通科のカリキュラム案

みらい共創科カリキュラム案(新学科1クラス)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1年 全員	現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ			数学A		化学基礎		体育			保健	英語コミュニケーションⅠ					家庭基礎		情報Ⅰ		みらい共創Ⅰ		総探	LHR

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
2年 文科型	論理国語		文学国語		古典探究		公共		日本史探究		数学Ⅱ				生物基礎		体育		保健	英語コミュニケーションⅡ			論理・表現Ⅰ		芸術Ⅰ		みらい共創ⅡA		みらい共創ⅡB	総探	LHR
2年 理科型	論理国語		文学国語		数学B		公共		化学		数学Ⅱ				生物基礎 物理基礎		体育		保健	英語コミュニケーションⅡ			論理・表現Ⅰ		芸術Ⅰ		みらい共創ⅡA		みらい共創ⅡB	総探	LHR

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
3年 文科型	論理国語		文学国語		古典探究		日本史探究			政治・経済		芸術Ⅱ		地理総合		地学基礎		英語研究		体育		英語コミュニケーションⅢ			論理・表現Ⅱ		みらい共創Ⅲ		総探	LHR
3年 理科型	論理国語		文学国語		数学研究		生物					化学						英語研究												
3年 理科型	論理国語		数学C		数学Ⅲ		物理											数学演習												

普通科カリキュラム

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1年 全員	現代の国語		言語文化		地理総合		数学Ⅰ			数学A		化学基礎		体育			保健	芸術Ⅰ		英語コミュニケーションⅠ					家庭総合		情報Ⅰ		総探	LHR

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
2年 文科型	論理国語		文学国語		古典探究		公共		歴史総合		芸術Ⅱ		数学Ⅱ				生物基礎		体育		保健	英語コミュニケーションⅡ					家庭総合		総探	LHR
2年 理科型	論理国語		文学国語		数学B						化学						物理基礎 生物基礎													

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
3年 文科型	論理国語		文学国語		古典探究		日本史探究			選択①		芸術Ⅲ		政治・経済		地学基礎		選択②		体育			英語コミュニケーションⅢ				論理・表現Ⅰ		総探	LHR
3年 理科型	論理国語		文学国語		数学研究		生物					化学						英語研究												
3年 理科型	論理国語		数学C		数学Ⅲ		物理											数学演習												

選択①②(それぞれ2科目選択)

進学希望	国語研究	社会研究	数学研究	英語研究	数学B	健康演奏法	保育基礎	
専門就職	基礎数	スポーツ	IT活用	科学と人間生活	実用社会			

④　３年間のカリキュラム

■学校設定科目「みらい共創Ⅰ」（１年）

【教科目標】“「共創」の基礎理解と探究スキルの習得”

・ウェルビーイングの基礎理解と社会・地域課題の発見方法の習得
・多様な人たちとの共創に必要なソーシャルスキルの習得
・地域課題に取り組むアントレプレナーシップの基礎と実践

【具体的な学習内容】“探究スキルの習得から実践”

・コ・クリエーション
  ▶ ソーシャルスキルやグループワーク等におけるアイデアの発散と収束の手法を、体験的に学ぶ。
・アントレプレナー演習
  ▶ 行政等と連携し、地域課題について調査研究し、企画提案を行う。
・プレゼンテーション
  ▶ クラス内で学びを共有し、行政等からもフィードバックをもらう。
・モリキタフォーラム
  ▶ 合同講評会、全校生徒への成果発表

※各学習項目において、外部講師による出前講義やフィールドワーク等を実施する。

■学校設定科目「みらい共創Ⅱ」（２年）

【教科目標】“地域や企業との連携プロジェクト”

・地域の事業者や行政等と協働したインターンシップによるキャリア教育
  ▶ 現場での課題発見と解決策の提案
・現場で学んだことを言語化するスキルの習得

【具体的な学習内容】“探究スキルの実践と学びの往復”

・インターンシップ事前学習
  ▶ インターンシップ先の業界分析や企業研究、現状と課題の整理
・マイプロジェクトの検討
  ▶ 企業や業界が抱える課題に対して、自身が取り組むプロジェクトの企画立案
・実践型インターンシップ
  ▶ 学校と現場の学びを往復する「もりきた版デュアルシステム」の導入
    （企業群／教育群／行政・福祉群）
  ▶ １単位分を時間割外に設定（夏季休業中の集中講座）し、個別面談やミニレポート（実習日誌）の作成を通して、自己評価能力・言語化能力を向上
・課題解決の提案と検証
  ▶ 現場での課題発見と解決策の提案作成
  ▶ プレゼン資料の作成
・活動のまとめとプレゼンテーション
  ▶ プレゼンテーションや検証結果に対する現場からのフィードバック（外部評価）
・モリキタフォーラム
  ▶ 合同講評会、全校生徒への成果発表

■学校設定科目「みらい共創Ⅲ」（３年）

【教科目標】“社会実装を目指したプロジェクトの実施”

・地域の事業者や行政と協働したプロジェクトの実施
・文化祭での、起業の視点による企画実践

・プロジェクトの成果を地域や社会に還元する活動
・後輩たちのメンターとなる活動
【具体的な学習内容】
・マイプロジェクト計画と資料作成
▶ ２年間の学びのまとめとしての成果物を作成（総合型選抜等にも活用）
・ピアラーニングと活動の整理
▶ １・２年生が共同で行う過去の活動内容の振り返りに対するメンタリング活動
・地域への発信に向けた準備／アウトリーチ活動
▶ 地域発信Ⅰ：体験入学や市内中学校等への学校説明会で成果発表
▶ 地域発信Ⅱ：各種コンテストに参加
▶ 地域発信Ⅲ：タウンミーティングや市長との意見交換会等に参加
・モリキタフォーラム
▶ 合同講評会、全校生徒への成果発表

■総合的な探究の時間「もりきた学Ⅰ」（１年全員）
【教科目標】“基礎的な探究スキルの習得”
・挨拶や礼儀作法のようなマナー等のソーシャルスキルの習得
・地域を調査し、発表するスキル（PC を活用したプレゼンスキル等）を習得
・文献調査とフィールドワークで地域理解を深め、キャリアデザインにつなげる。
【具体的な学習内容】
・探究スキルに関する基礎学習
▶ グループワークの方法やコミュニケーションスキル等の習得
・DX
▶ リテラシー等のビジネススキルとデータ収集・プレゼン資料作成技能の習得
・地域理解
▶ 地域課題に関する事前調査
▶ フィールドワーク等を通して、自身と社会との関係を再構築
・プレゼンテーション
▶ 学年全体でのプレゼンテーションと相互フィードバック
・モリキタフォーラム
▶ 合同講評会、全校生徒への成果発表

■総合的な探究の時間「もりきた学Ⅱ」（２年全員）
【教科目標】“応用的な探究活動の実施”
・SDGs や MLGs 等の社会課題についての理解と、文献調査のスキル習得
・守山市と他地域とを比較検討し、その共通点や相違点を考察
・地域の課題解決策の提案
【具体的な学習内容】
・社会課題探究
▶ SDGs 等に関する社会課題の文献調査
・リサーチ
▶ 守山市以外の地域を取り上げ、SDGs の視点から地域課題の比較を行う。
・地域課題解決の提案策定
▶ フィールドワークと文献調査結果をまとめ、課題解決策を提案
・プレゼンテーション

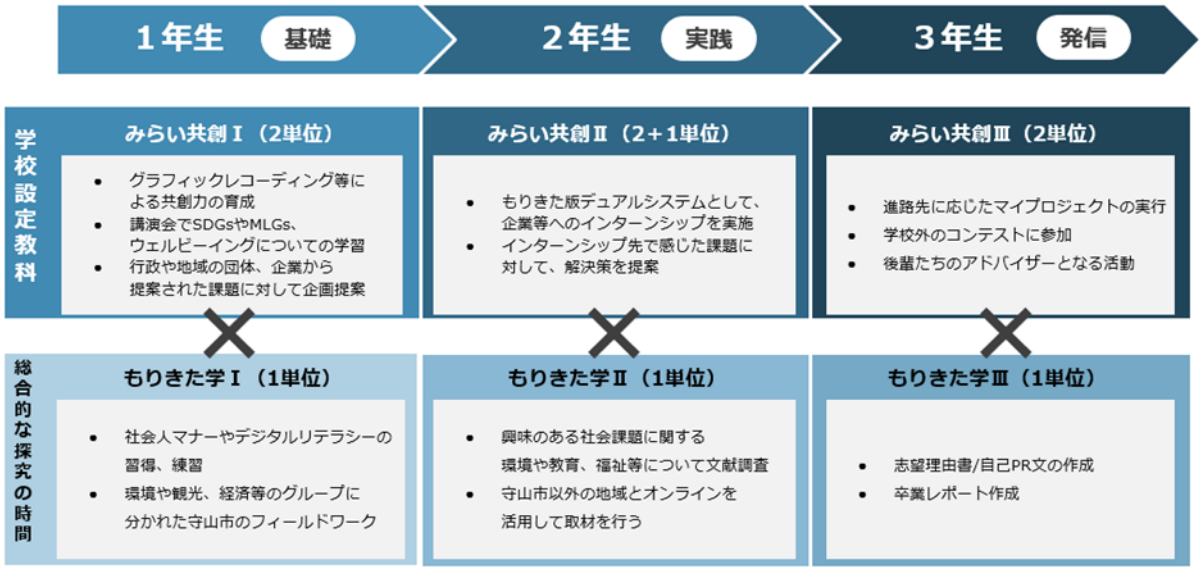
▶ 学年全体でのプレゼンテーションと相互フィードバック
・モリキタフォーラム
▶ 合同講評会、全校生徒への成果発表

■総合的な探究の時間「もりきた学Ⅲ」（３年全員）

【教科目標】“独自の研究プロジェクト”
・志望理由書／自己 PR 文作成による、学びのまとめ
・卒業レポート作成による、言語能力の向上
・発表会等を通して、後輩の手本となる。

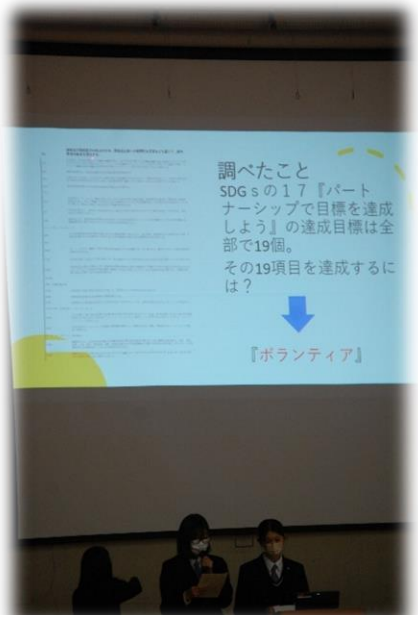
【具体的な学習内容】
・志望理由書／自己 PR 文の作成
▶ ２年間の学びと自身の取組のまとめ
・自己探究
▶ 卒業レポートの作成（学問的な書き方講座、文献の引用／参照方法）
▶ 自分の興味関心に応じて探究テーマを設定し、ウェルビーイングに留意した個人レポートを執筆する。
・モリキタフォーラム
▶ 合同講評会、代表者による全校生徒への成果発表

▼学びのイメージ



▼学年発表会（プレ「モリキタフォーラム」）の様子（令和５年度）

１年２組５班「琵琶湖の水質は汚いのか」



１年１組２班「高校生にできるボランティア」

本年度１年生の「総合的な探究の時間」で実施した「SDGs に取り組む地域」というプログラムで、各クラスでの成果発表会を行った。その後、それぞれのクラスの優秀班が学年集会の場面で成果発表を行い、2023 年度のプレ「モリキタフォーラム」とした。発表を行った生徒は全体の場面での発表の経験がなく、非常に緊張した様子であったが、原稿を見ずにプレゼンテーションを行う生徒がいたり、非常に分かりやすいスライドを作成した班があったりと、同級生の活躍する姿に刺激を受けた生徒も多かったように感じる。これらの経験を通して、来年度の取組の質が向上していくことを期待する。ただ、発表後に質疑応答の時間が設けられなかったのは、次年度に向けての課題である。

⑤　新学科「みらい共創科」のポイント

「地域をフィールドとした学び」と「人を想う心」を柱に、多様性を尊重し、他者と協働しながらより良い未来を創造する力を養う。そのためのポイントを３つに分ける。

まず１つ目は、「もりきた版デュアルシステム」の導入である。企業群／教育群／行政・福祉群等から希望制でインターンシップを実施する。各業界の研究を行った上で、生徒自身が企業や団体等にアポイントメントをとったり、事前オリエンテーションを行ったりする事前学習から、実際の実習と事後の個別面談やミニレポート（実習日誌）等を作成するまでの過程を通して、自己評価能力・言語化能力を向上させるとともに、小さな成功体験を積み重ねることによって、生徒の自己肯定感や有用感の向上につなげたい。また、生徒のキャリアデザインの観点からも、生徒のニーズに応じた進学や就職のサポートを行い、自由な進路選択を実現するためのプログラムとしたい。

２つ目は、「学校設定科目と探究との相乗効果」である。「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（学校設定科目）」と「もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（総合的な探究の時間）」との相乗効果により、学校全体で生徒の学びの底上げを行う。探究学習のサイクル（課題設定・情報収集／分析・フィールドワーク・プレゼンテーション／フィードバック）を、各学年で１周行うことにより、探究のスキルだけでなく、普段の教科学習における「学び方」を学ぶことにつながり、探究学習にとどまらない学びの形態を再構築する。

３つ目は、「DX による学びの実践」である。タブレット端末を活用した授業やグループワークを軸とした対話的で深い学びによって、主体性や表現力の向上を目指す。また、学び直しや進学に対応した学び等、個別最適な学びを実現する。さらに、研究者や実践者、企業人等とつながることのできる「DX の学びの拠点」となることを目指す。

▼「みらい共創科」の重点ポイント

1	もりきた版 デュアルシステム	守山市の企業や大学等と連携した実践型インターンシップにより 生徒のニーズに応えた進学・就職をサポートする。 自由な進路選択を実現する。
2	探究との相乗効果	みらい共創科で新設する「学校設定教科(みらい共創)」と「総合的な探究の時間(もりきた学)」との相乗効果により学校全体で生徒の学びの底上げを行う。
3	DXによる 学びの実践	PCやタブレットを活用した授業やグループワークを軸とした 対話的な学びで表現力の向上を目指す。研究者・実践者・企業人らと繋がることのできるDXの学びの拠点となる。

⑥　先行実施授業

■出前授業

日　　時：令和５年６月 21 日（水）５・６限
教　　科：総合的な探究の時間（２年）
学習内容：他者になりきる

■講演会

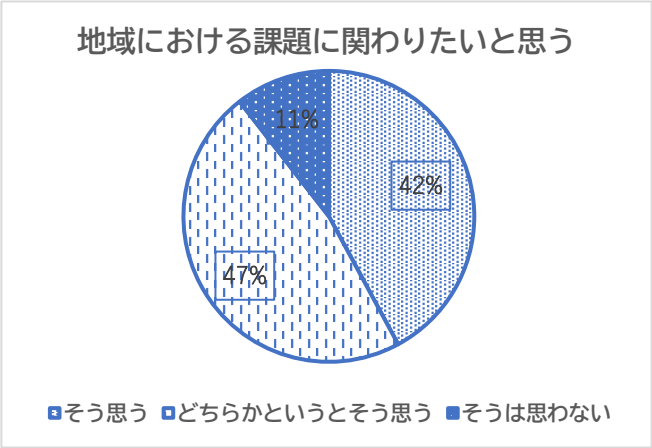
日　　時：令和５年 12 月８日（金）１・２限
教　　科：総合的な探究の時間（３年）
講　　師：伴野友彦氏【DAVID LAYER】株式会社 COLOR 代表取締役
　　伴野彰彦氏【DAVID LAYER】株式会社 COLOR 取締役
学習内容：夢をもつ大切さと楽しむこと

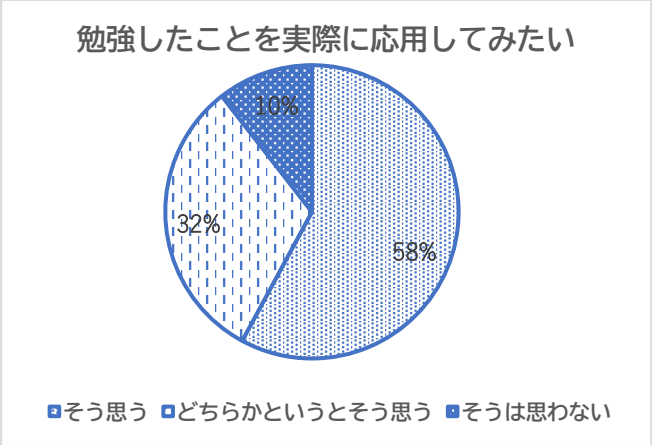
■モデル授業

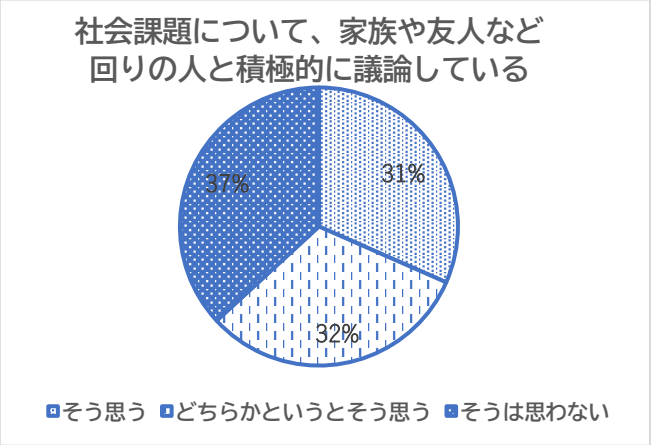
日　　時：令和６年１月 24 日（水）３限
教　　科：総合的な探究の時間（１年）
授業の目的：▶「みらい共創科」の新しい実習授業「みらい共創」と、総合的な探究学習「もりきた学」の模擬授業
▶ 授業内容の妥当性の確認と、今後の授業設計のための参考情報の収集
▶ 新学科の PR 用写真・動画の収録
学習内容：ワークショップの手法

▼上記モデル授業における生徒の振り返りアンケート

実施日：令和６年１月 26 日（金）
対　象：１年生 25 名







■フィールドワーク

日　　時：令和６年１月 24 日（水）５・６限
教　　科：総合的な探究の時間（１年）
学習内容：SDGs に取り組む地域

⑦　先進校の視察

■目　的

・各校での特徴的な実践事例やカリキュラムについての情報収集
・学校が抱える課題へのアプローチ方法
・事業の取組に関する意見交換・共有

■視察先

・令和５年７月 19 日　京都市立開建高等学校
　令和５年４月に開校したルミノベーション科（地域社会学科）における地域をフィールドに実践する探究活動を視察した。

・令和５年８月 17 日　大阪府立布施北高等学校
　全国的にも先駆けてデュアルシステムを導入した布施北高校の取組状況を視察した。

・令和５年 10 月 13 日　愛知県立惟信高等学校
　普通科・グローカル探究科（地域社会学科）で共通の「総合的な探究の時間」による学びの相乗効果を目指したカリキュラムの検討状況を視察した。

・令和５年 12 月 13 日　愛知県立美和高等学校
　地域の魅力探究・連携機関や大学との協働・自らの知識や技術を地域社会に還元することをテーマとした教育課程の検討状況を視察した。

■まとめ

視察したどの学校も、それぞれの地域や学校が有する地盤・特色等を踏まえた教育活動を行っていることから、カリキュラム検討の方法や地域連携の在り方、学校内の組織体制、事業の進め方等に重きを置いて情報を収集した。これらを本校での取組に活かすことに加え、毎月開催している職員会議において情報を共有した。

⑧　探究学習用の環境設備「MORIKITA BASE（MKB）」の整備

■目的・活用

・「みらい共創」と「探究活動」を加速させる拠点を目指す。
　▶「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（学校設定科目）」と「もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（総合的な探究の時間）」の授業やグループワーク等の教育活動を行う学びの空間
　▶ 市内の小中学生や地域住民、PTA 等も活用できる開かれた空間
　▶ DX といった先進技術に関する「学びの拠点」としての活用

守山北高校３階会議室

イメージ図

課題・次年度計画への反映方針

カリキュラムの土台はでき上がってきたものの、それらをどう現場ベースに落とし込むかも課題である。

令和６年度は、「みらい共創（学校設定教科）」や「もりきた学（総合的な探究の時間）」の先行実施と、そのための学校行事の開催時期等の見直しを行うことを考えており、あわせて、公開授業の定期的な開催による教職員への周知や、生徒へのアンケート等も適宜実施しながらカリキュラムの充実等を図っていきたい。また、ポートフォリオによる見える化とルーブリックを活用

した学校設定科目「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の評価方法にもついても検討が必要である。
また、新たなカリキュラムの実施にあたっては、グループワークや成果発表、オンラインでの取材や講演会といった生徒の学習活動の拠点となる場が必要であり、次年度以降、探究学習用「MORIKITA BASE（MKB）」として、会議室の改修による環境整備を進めていく。「MORIKITA BASE（MKB）」の活用に際しては、地域に開かれた空間となるよう、地域の方々やPTAだけでなく、行政や企業等にもPRするとともに、各イベント等の開催に際しても連携を図っていく必要がある。
DXの推進に関して、今年度は「Classi」を導入した。学び直しから進学への対応等、個別最適な学びを実現するために、朝学習を実施したり、長期休業中の課題を配信したりした。しかし、外部機関の基礎力診断テストでは思うような成果は得られず、朝学習においてもタブレット端末を忘れてくる生徒がいたり、前向きに課題に取り組めない生徒もいたりと、年度の終盤は朝学習自体が一部形骸化していたように感じる。次年度は、生徒とも目的を共有化した上で、地道に丁寧な指導ができるよう取り組んでいきたい。例えば、週に１回学び直しの時間を設定するなど、その方法についても検討していきたい。
一方、それぞれの授業や「総合的な探究の時間」の中で、タブレット端末を使用した表現力の向上を図る対話的な学びがカリキュラム上は実施できなかった。次年度では、タブレット端末を使用した共同編集の手法やビジネスマナーとリンクしたデジタルスキルの向上を目指した授業を先行実施する予定である。

（２）　管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和４年度から概ね10年から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について全県的視野で基本的な考えを示す「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」を令和４年３月に策定した。令和５年３月には、この「基本方針」に基づき、全県的視野から各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を作成し、各県立高等学校の魅力化の取組を推進している。
この「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。
守山北高等学校は、地域の未来を担う人材育成を目指して地域の課題解決に向けた学びや、外部人材の活用や地域を教育資源としたフィールドワーク等による体験的な学びに取り組む地域連携重点校として、普通科の特色化に向けたカリキュラム等の検討を行っており、かつ関係機関や市町等の協力体制など取り組みやすい条件が整っていること等から、新学科設置に向けた研究を進めた。
事業の実施にあたっては、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長１名、参事１名、主担当として主査１名、主任主事１名をその任に充て、学校の支援を行ってきた。適宜、守山北高等学校に出向き、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、３回開催した運営指導委員会では、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、外部有識者による指導・助言・評価を行うことで、以後の事業運営に役立ててきた。令和６年度も高校教育課内の体制を継続し、学校の取組を支援していきたい。
令和６年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状況は例年と比較して芳しくなかった。守山市内４中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析する必要がある。新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和６年度以降の周知活動に努める。

■協議や先行実施授業等への参加状況

活動日程	活動内容
R5. 6/14	・今後の取組について協議
R5. 6/28	・地域探究について近隣大学と協議
R5. 7/21	・運営指導委員を委嘱
R5. 7/21	・彦根市立小中学校のアクティブ・ラーニング教室を視察
R5. 8/ 3	・校内の検討状況の共有 ・今後の取組について協議
R5. 8/24	・びわこ成蹊スポーツ大学を訪問 ▶ 大学と連携したスポーツ教育について協議
R5. 9/15	・第１回運営指導委員会 ▶ 授業参観、今後の方向性や事業に関する指導・助言
R5.10/ 4	・校内の検討状況の確認 ・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R5.10/25	・「総合的な探究の時間」を参観 ▶ キャリア教育（人事部体験学習・職業体験ガイダンス）
R5.11/18	・もりやまシードチャレンジ（守山市の次世代起業家育成プログラム） ▶ 守山市内の高校生の発表を参観
R5.11/29	・県議会議員による現地視察、協議
R5.11/29	・守山市教育委員会訪問 ▶ 学校改革について周知ならびに協議
R5.12/19	・第２回運営指導委員会 ▶ 事業に関する指導・助言
R6. 1/12	・滋賀大学教育学部大野教授を訪問 ▶ 評価指標について指導・助言
R6. 1/23	・地域連携重点魅力化連絡会議 ▶ 地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及
R6. 1/24	・守山北高等学校の地域探究に関するモデル授業を参観 ▶ SDGs に取り組む地域
R6. 1/29	・守山北高等学校の校内教職員研修会に参加 ▶ 新学科での学びのアイデア出し
R6. 2/29	・滋賀大学教育学部大野教授を訪問 ▶ 評価指標について指導・助言
R6. 3/14	・守山北高等学校研究成果報告会 ▶ 成果発表 ・第３回運営指導委員会 ▶ 今年度の取組に関する総括的な指導・助言

課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校に出向いて、コーディネーター等も交えながら取組を推進していくための協議を十分に行えず、モデル授業等の取組が想定していたほど進まなかった。

令和６年度は、学校における取組状況やコンソーシアムの構築・管理運営について情報を共有しつつ、管理機関として、適宜、校内検討会議やモデル授業等に参加しながら事業管理を行う。カリキュラム等の検討と並行してコンソーシアム構築の検討を進め、あわせて新学科で想定してい

る学びを先行試行しながら、令和７年度設置に向けて準備を進めていく。

また、令和６年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状況は例年と比較して芳しくなかった。守山市内４中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和６年度以降の周知活動に努める。

（３）　高等学校における事業の実施体制や管理方法

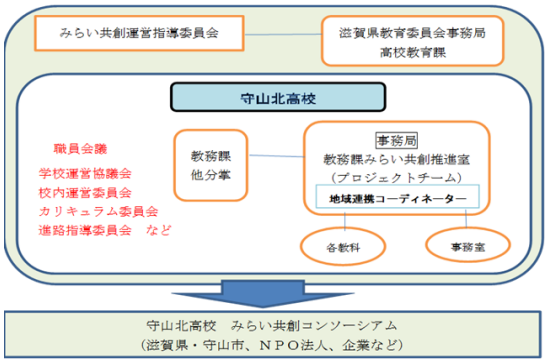
①　カリキュラム検討のための組織体制および取組

■プロジェクトチーム

本校では、教務課内に新学科推進のための事務局としてプロジェクトチームを設置し、管理職やコーディネーターを交えて定期的な会議（週１回以上の頻度）を行った。カリキュラムの検討を中心に据え、学校行事や現行の「総合的な探究の時間」の在り方等に加えて、環境設備や広報デザイン等、学校全体の魅力化をどのように図れるかについて重点的に議論を進めた。

また、毎月の運営委員会・職員会議で、教職員に対して新学科推進の進捗状況や情報の共有を行うとともに、適宜教職員向けのアンケートを実施しながら、それらの意見を集約・共有しカリキュラム等のブラッシュアップを行った。

▼組織図



■拡大推進室会議

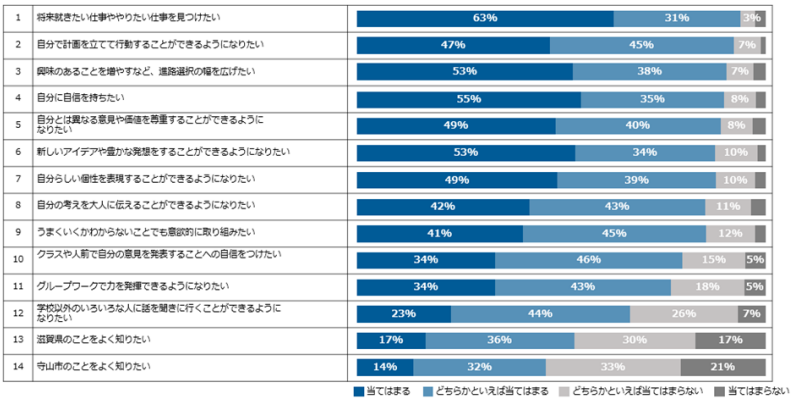
２学期（９月）からは、各学年や分掌から新学科推進係を１名選出し、拡大の推進室会議を２回開催した。各学年・分掌会議で出てきた意見や考えを共有するとともに、プロジェクトチームにおける検討状況も共有する等、教職員の意識向上・新学科推進の機運醸成を図った。

■生徒アンケートの実施（12 月実施）

カリキュラムの検討にあたり、現在在籍している生徒にアンケートを実施し、学校に求めることや自身が積極的に取り組みたいこと、興味のあること等について情報を収集した。

アンケート結果を分析すると、「将来の仕事を見つけたい」と考える生徒の割合が高く、「自分らしさ（個性や自信、アイデア）を磨きたい」と考える生徒の割合もやや高いことが分かった。一方で、「滋賀県や守山市のことを知りたい」といった、地域理解を期待する生徒は半数にとどまった。このことからも、「地域を理解する」という面は、生徒の学習意欲向上へのインセンティブにあまりつながっていないことが分かった。

▼生徒へのアンケートの結果（ｎ＝347）



■生徒アンケートの実施（３月実施）

今年度１年生で実施したプログラムの振り返りとして、生徒アンケートを実施した。自分自身の取組を振り返り、言語化させるとともに、自身が成長を感じる部分についてアンケートを実施した。全体的に肯定的な意見が多数であったが、キャリア形成をイメージした「起業家精神」の項目では、数値が比較的低いことが分かった。今回のアンケート項目では、自身の目標や希望進路に関わる考えが“深まった”という部分が引き出せないようになっているため、アンケート項目についても再検討の必要があると感じた。今回の数値も一つの指標として、来年度のカリキュラム検討や、教材の開発に活用していきたい。

▼生徒へのアンケートの結果（ｎ＝111）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
当てはまる	35%	41%	34%	22%	38%	43%	29%	27%	21%	35%	18%	24%	35%	46%
どちらかといえば当てはまる	55%	47%	42%	50%	53%	50%	55%	48%	52%	45%	27%	37%	46%	45%
どちらかといえば当てはまらない	8%	11%	17%	20%	7%	5%	14%	23%	18%	17%	23%	21%	10%	6%
当てはまらない	2%	2%	6%	8%	2%	1%	2%	3%	9%	3%	32%	18%	9%	3%

総回答数　111名

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
自立する力		伝える力		協働する力		創造する力		自己肯定感		起業家精神		地域理解	
計画を立てて行動することができた	学校外のいろんな人に話を聞きに行くことができた	自分の考えを大人に伝えることができた	クラスや人前で自分の意見を発表することへの自信がついた	グループワークで力を発揮できた	自分とは異なる意見や価値を尊重することができた	新しいアイデアや豊かな発想をすることができた	自分らしい個性を表現することができた	自分に自信を持てるようになった	うまくいくか分からないことでも意欲的に取り組めた	将来つきたい仕事やりたい仕事を見つけた	興味のあることを増やすなど進路選択の幅を広げられた	守山市のことをよく知れた	身の回りにある社会課題を知れた

■関係機関へのヒアリング

「みらい共創科」では、フィールドワークやインターンシップといった実践的な学びに積極的に取り組む。そこで、新学科設置に伴う様々な取組について、各業界の関係者にヒアリングを行い、特にインターンシップに関わる部分を中心に意見交換を行ったところ、企業側が生徒に求める力として、体力・コミュニケーション能力・マネジメント力・社会人マナー等のソーシャルスキルへの期待の声が多かった。また、インターンシップについては、日程や内容を柔軟に対応できそうだという前向きな意見が多く、授業への協力がいただけそうである。来年度は、試験的に希望者を募り、インターンシップを実施したいと考えている。

▼ヒアリング協力企業／団体等

群	企業／団体名	訪問日時
企業	JNC ファイバーズ（株）	R5.12/14
	ワコール流通（株）	R5.12/14
	ダイハツディーゼル（株）	R5.12/15
	一正蒲鉾（株）	R5.12/15
	日本マタイ（株）	R5.12/15
	グンゼ（株）	R5.12/20
	比叡ゆば本舗（株）	R5.12/20
	レイマック（株）	R5.12/20
	三和精機（株）	R5.12/20

行政／福祉	守山市役所人事課	R5.12/20
	守山市役所商工観光課	R5.12/20
	ゆいの里	R6. 1/11
教育	保育士フェスタ（市主催）	R6. 1/21
	滋賀県立大学	R6. 2/ 2
	成安造形大学	R6. 4月予定
	龍谷大学	R6. 4月予定
	びわこ成蹊スポーツ大学	R6. 4月予定

▼ヒアリングの様子

市役所主催の意見交換会

日本マタイ（株）

ダイハツディーゼル（株）

課題・次年度計画への反映方針

■One Team の学校にするために

来年度に向けて、本校教職員の意識をどこまで高められるかが課題である。そのために、以下の点について重点的に取り組んでいきたいと考えている。

・生徒の成長した姿や活躍している姿、心境の変化等を、素早く教職員と共有する。
・授業の方法論ではなく、生徒に身に付けさせたい力や目指す姿の部分を丁寧に説明していく。
・OJT 等の研修や拡大推進室会議のように、地道に輪を拡大していく。
・学校の課題を整理するとともに、適切な問いを設定しながら対話を深める。

■教職員の負担感をどう払拭できるか

本校では、「総合的な探究の時間」や学校設定教科の担当・人員配置が課題である。令和６年度は、具体的なカリキュラムの検討・修正と同時に、教職員の意識向上が急務であるが、教職員の中では、日々の多忙な業務にプラスアルファとなることに対する負担感が強く、それをどのように軽減できるかが課題である。

■校内体制の整備

限られた人員の中で、数年後の将来を見据えた分掌配置や組織体制の構築は急務である。プロジェクトチームの在り方を見直すとともに、カリキュラム検討委員会は継続しつつ、引き続き、議論の場を設定していきたい。

（４） 運営指導委員会の体制および取組

運営指導委員会では、活発な議論が行われ、学校が求めるカリキュラム検討やコンソーシアム構築等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただけた。事前に資料を配付することで、日程が合わず当日欠席の運営指導委員からも指導・助言をいただき、運営指導委員会当日に紹介することができた。運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和６年度も引き続き、年３回は運営指導委員会を開催していく。

■運営指導委員会の体制

氏名	所属
大野　裕己	滋賀大学教育学部　教授
武井　哲郎	立命館大学経済学部　准教授
森中　高史	守山市　市長
桶土井　雅章	株式会社日本政策金融公庫　大津支店長
根木山　恒平	ＮＰＯ法人碧いびわ湖　常務理事

■運営指導委員会の取組

	開催日	内容
第１回	R5. 9/15	・授業参観 ・今後の方向性や事業に関する指導・助言 ▶ 探究活動に必要な生徒のモチベーションを引き出す仕掛けづくりについて ▶ 「学校設定科目」と「総合的な探究の時間」とのつながりについて ▶ 高校生の主体的な要望等を取り入れた探究活動やインターンシップについて　など
第２回	R5.12/19	・事業に関する指導・助言 ▶ 「学校設定科目」と「総合的な探究の時間」のカリキュラムの更なる充実について ▶ 学校全体のリニューアルについて ▶ コンソーシアムについて　など
第３回	R6. 3/14	・今年度の取組に関する総括的な指導・助言 ▶ 守山北高等学校研究成果報告会について ▶ 次年度の取組について　など

課題・次年度計画への反映方針

年３回開催して、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てるよう努めてきた。一方、学校と十分打ち合わせの時間を取れないこともあり、今後学校が求める指導・助言等を、より十分いただけるように準備を進める必要がある。

運営指導委員会の開催にあたっては、学校の進捗状況等をしっかり確認しながら進めていく。

（５）　コンソーシアムの体制および取組

コンソーシアム構成員は、地域に根差したウェルビーイングの観点から、滋賀県立大学地域共生センターをはじめ大学や福祉・農業・まちづくり団体を、アントレプレナーシップ・キャリア教育の視点から、商工関係団体・施設、地元起業家等を構成員に迎え入れ、地域や関係機関それぞれが主体的にできることや意見を出し合う場としたコンソーシアムを構築し、みらい共創推進室が中心となりコンソーシアムとやり取りを行う予定であった。

課題・次年度計画への反映方針

今年度は、カリキュラムの検討を中心に進めてきたが、コンソーシアムの構築には至らなかった。ただ、学校運営協議会では新学科設置への方向性を示すことができ、また生徒フィールドワークの協力先からの理解も得られ始め、新規開拓につながっている。高校を核とした有機的なつ

ながりとすることで、地域活性の一端を担うことを視野に入れ、正式なコンソーシアム構築に努めたい。

当初の予定通り、「高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい」ことから、コンソーシアムの構成員からも、高校生の取組に対する社会的評価を期待したいと考える。

（6） コーディネーターの配置および活動内容

令和５年度は、本事業に関連したコーディネーターとして、上田氏と田口氏が勤務にあたった。２名は校務分掌において、教務課内「みらい共創推進室」に所属し、プロジェクトリーダーおよび担当教員と協働してカリキュラム開発等にあたった。

上田氏は、主にカリキュラムの検討を担当し、田口氏は、主に広報デザインを担当として領域を分けるが、お互いに情報交換しながら一体的に事業を推進することに留意してきた。

■カリキュラムの検討及び教材の開発

２人のコーディネーターの多角的な知見によって、生徒に身に付けさせたいスキルや資質に重きを置きつつカリキュラム検討を進めることができ、その作成が大きく進んだ。あわせて、令和６年度の先行実施授業に向けた教材・スライド等の開発や、プリント・冊子等についても検討を進めているところである。

また、講演会の講師の人選や、関係機関等へのヒアリング先の選定、および日程調整まで、幅広く業務を担当し、新学科のスムーズな検討推進・運営ができた。

カリキュラム検討にあたっては、生徒へのアンケートを実施（先述）し、その結果の集計分析によってカリキュラム検討のブラッシュアップができた。

■職員研修の実施

職員研修の企画・運営に取り組んだ。詳細は、以下の通りである。

【職員研修Ⅰ】

日時：令和６年１月 29 日（月）16：00～17：00

目的：▶ 新設する「みらい共創科」における授業のイメージ共有
▶ 新しくなる守山北高校で、生徒たちがワクワクするような学びを、どのように展開できるかのアイデア出し

内容：▶ 新しい守山北高校で展開できる魅力的な学びとは？
▶ 「みらい共創科」を象徴する以下の３つのポイントに焦点を当ててワークショップを行った。

・探究学習の深化：生徒の自主性と創造性を促進する探究学習の方法とその効果について
・アクティブラーニング:デジタルデバイスの積極的な活用、企業や行政との連携を含む対話的学習の展開方法について
・キャリアデザイン：生徒一人ひとりの個性とキャリアを磨くための教育方法とプログラムの検討

始めに研修会の目的と流れの説明し、「みらい共創科」の概要と教育方針を紹介した。その後、各グループにテーマに関する質問や課題を提示した。短い時間で一定の成果を上げるために、グループ内で「進行役、進行補助、編集者、発表者」と役割を分担して進めた（教職員にとっては、生徒のグループワークを指導する際の経験になる。コーディネーターは、全体補助として適宜サポート）。模造紙とポストイットを使用して、アイデアや意見を可視化しながら議論を行い、最後

に各グループが議論の結果を発表し、全体でのフィードバックと今後の授業設計への応用について討論した。

▼職員研修Ⅰの様子

【職員研修Ⅱ】

日時：令和６年２月 19 日（月）15：30～16：30

目的：▶ 新学科推進に伴う様々な取組について、全教職員が共有する。

▶ 意見交換を通して、改善点や課題を発見する。

内容：１年間の総括と来年度の展望

始めに、本研修会の目的と流れを説明し、「みらい共創科」の概要と１年間の取組の成果を発表した。コーディネーターの上田氏から、主に「みらい共創科」の概要と１年間の取組について、スライドを用いてプレゼンがなされ、田口氏からは、主に広報デザインについて重点的にプレゼンを行った。その後、教職員は個人でグッドポイントと改善点をポストイットに書き、意見の集約を行った。職員研修では、教職員の新学科に対する理解を深めるには、コーディネーターの役割への理解の促進や、教職員の探究学習等に関する知識や技能の向上を図っていく必要があることが認識できた。

▼職員研修Ⅱの様子

【職員研修Ⅲ】

日時：令和６年３月 12 日（火）16：00～17：00

目的：▶ 新設する「みらい共創科」の広報についての意見交換

▶ 学校の課題を整理し、教職員間で「問い」を共有する。

内容：▶ 中学生に向けたプレゼン内容の検討

▶ 課題を整理して対話するために、３つのポイントに焦点を当ててワークショップを行った。

①守山北高校でしか育成できない生きる力とは？

②その力を育成するために、我々がそれぞれの立場で取り組めることは何か？

③この状況をチャンスと捉えて、前向きに取り組むための具体的なアイデアやコラボレーションは何か？

始めに研修会の目的と流れの説明し、「みらい共創科」の中学生向けのプレゼン内容（案）を紹介した。その後、あらかじめ用意していたワークシートに取り組んだ（問いは上記の①～③）。その後、年齢や学年・分掌をバランス良く分けたグループを構成し、意見交換を行い、最後には全体発表で意見の共有を行った。

▼職員研修Ⅲの様子

■広報デザイン

新学科推進に伴う学校全体の魅力化を、どのように広報できるかについて議論を進め、広報戦略の見直しを行った。コーディネーターは、守山市役所の広報や県教育委員会と密に連携を取りながら、写真業者の選定から広報のデザインまで中心的に取り組んだ。

【主な広報戦略（予定）】

・近隣の中学校に対しての学校説明会の実施（生徒による成果発表を含む）

・タブロイド紙のような形式の学校案内パンフレットを作成し、中学校に説明・配布する。

▶ 学校案内パンフレットには、授業に協力していただける市内企業や行政機関を明記

・守山市の広報誌等を活用した情報提供

▶ 授業の様子だけでなく、市長との対談記事等を記載

・学校ホームページの更新

▶ 地域協働の取組や授業の様子の動画等を随時掲載し、学校のことを知ってもらう。

▼タブロイド紙の原案

撮影の様子

学校案内イメージ（成安造形大学）

■コーディネーターの勤務記録

	上田コーディネーター		田口コーディネーター	
	時間数	主な取組事項	時間数	主な取組事項
4月	－	－	－	－
5月	－	－	－	－
6月	4.5	・新学科推進の方向性の検討	1.5	・新学科推進の方向性の検討
7月	23.5	・カリキュラムの検討	6.5	・カリキュラムの検討
8月	14.0	・カリキュラムの検討	7.0	・カリキュラムの検討
9月	11.5	・カリキュラムの検討	11.0	・広報戦略の見直し
10月	15.0	・カリキュラムの検討	4.0	・広報デザインの作成
11月	15.5	・アンケートの実施 ・教材の開発	5.0	・広報デザインの作成
12月	47.5	・ヒアリングの実施 ・プレゼン資料の作成	26.0	・広報デザインの作成

1月	39.5	・モデル授業・教材の開発	35.5	・モデル授業の開発 ・広報デザインの作成
2月	54.5	・プレゼン資料の作成	53.0	・広報デザインの作成
3月	42.5	・プレゼン資料の作成	80.5	・広報デザインの作成

課題・次年度計画への反映方針

令和６年度は、教材開発・研究と広報デザインの２つの柱を中心に取り組みたい。教材開発については、コーディネーターと担当教員とで連携をとりながら、探究学習用の冊子（マニュアル本）を作成し、独自教材の研究に取り組むとともに、教職員への職員研修を実施し、授業を通して生徒に身に付けさせたい力の共有や授業の進め方等について議論を進めていきたい。また、広報デザインについては、タブロイド紙の原案が完成し次第、教職員間で共有化するとともに、各中学校や守山市、地域への周知を目指し、直接足を運びながら地道に広報活動を進めたい。

一方、コーディネーターが中心になって検討を進めているので、事業終了後の教職員の負担の増加やカリキュラムの再現性・継続性に不安がある。また、先述したように、本校の大きな課題である生徒の定員充足につながっていくのか、様々な取組についての検証・分析を１年ごとにしっかりと行う必要がある。

また、令和６年度は、どれだけ本校の取組を知ってもらえるか、興味を持ってもらえるかに注力する必要があり、そのためには中学生はもちろん、中学校の先生方や保護者の方、さらには地域の方々にも周知していきたい。本年度の２月以降、タブロイド紙のデザインと合わせた形で、本校 HP の更新作業や新学科の紹介動画の作成にあたっているが、教職員からの意見や運営指導委員の方の意見をどのように活用し、デザイン化すべきか検討を進めている過程である。来年度のスタートに合わせられるようにスケジュールを組んで計画的に進めたい。

（7） 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

■守山北高等学校

令和５年 10 月 31 日と令和６年２月 15 日に開催した学校運営協議会において、本事業について議論を交わした。そこでは、新学科での３年間の学びで身に付けてほしいことを見据えた教育計画の必要性や新学科と普通科との差別化について、広報戦略の重要性等、様々な視点から多くの御意見をいただいた。

課題・次年度計画への反映方針

運営指導委員会、コンソーシアムに関する会議、学校運営協議会、アントレプレナーシップ事業に関わる会議（県の指定事業）というように、新学科に関わる議論をする機会はあるが、それぞれの会議の目的をしっかりと計画立てておく必要がある。本年度は、それぞれの会議でそれぞれのメンバーが発言して意見を述べる場のような形に留まっていた。

また、中学校への具体的な説明会については、リリースをいつ、どこで、どのようにするのか検討中である。広報についても計画立てて実施するとともに、関係機関との連携も必須である。

■管理機関

管理機関として、守山市教育委員会には、守山北高等学校では新学科「みらい共創科」のカリキュラム研究等を行っていることを説明した。あわせて、令和７年度設置予定であることから、特に現中学２年生を対象に市内中学校等への周知や、必要に応じて県教育委員会や守山北高等学校から中学校長会進路指導主事会に出向いて新学科の説明をさせていただくこと等をお願いした。令和５年度末には、新学科に関する広報チラシを作成し、近隣中学校を中心に周知活動に努める。

新学科「みらい共創科」の設置は令和７年度を予定しており、本格的な広報活動は令和６年度より実施する。管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。また、守山市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたいと考えている。

また、守山市を中心とした中学生・保護者・地域住民を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して、新学科について説明を行うことを考えている。学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信していく。

令和６年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状況は例年と比較して芳しくなかった。守山市内４中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析する必要がある。新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和６年度以降の周知活動に努める。

課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校での新学科設置に向けた検討状況は、守山市教育委員会や県議会等に適宜説明してきた。令和６年２月６日に「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第５号）」改正を行ったところであり、本格的な周知活動は、令和６年度から実施する。

令和６年度は、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたいと考えている。また、守山市広報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたいと考えている。さらに、守山市内４中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和６年度以降の周知活動に努める。

（８）　管理機関における事業全体の成果検証、評価

令和４年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高等学校 29 校のうち地域連携重点により魅力化を図ることを推進する 13 校で、「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和５年度から開催することとした。今年度は、令和６年１月 23 日に１回開催し、連絡会議の場で守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果検証を行った。連絡会議は定期的に開催することを予定しており、令和６年度も引き続き開催する。

あわせて、年３回の運営指導委員会によって事業の進捗状況や成果を確認し、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てた。運営指導委員会では、学校が求めるカリキュラム検討や学校全体のリニューアル、コンソーシアム構築等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただけた。運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和６年度も引き続き、年３回は運営指導委員会を開催していく。

守山北高校のコーディネーターは、他の仕事との兼ね合いもあり、守山北高校の学校改革に当初注力しにくいところがあった。新学科のカリキュラムや、その実践のための教室整備等の検討は進んだが、コンソーシアム構築の検討や実際のモデル授業の取組は予定より滞っている。令和６年度は、カリキュラム等の検討と並行してコンソーシアム構築の検討を進め、あわせて新学科で想定している学びを先行試行し、令和７年度設置に向けて準備を進めていく必要がある。

課題・次年度計画への反映方針

「地域連携重点魅力化連絡会議」や運営指導委員会の場で、取組の成果について検証・評価いただいてきた。一方、運営指導委員会については、学校と十分打ち合わせの時間を取れないこともあり、今後学校が求める指導・助言等を、より十分いただけるように準備を進める必要がある。守山北高校のコーディネーターは、守山北高校の学校改革の他にも仕事を抱えており、守山北高校のコーディネーター業務に注力しにくいところがあった。新学科のカリキュラムや、その実践のための教室整備等の検討は進んだが、コンソーシアム構築の検討や実際のモデル授業の取組は十分進まなかった。

令和６年度は、運営指導委員会の開催にあたって、学校の進捗状況等をしっかり確認しながら進めていく。また、「守山北高等学校研究成果報告会」や、その他成果発表会等の機会を活用して成果検証評価を行い、以後の事業運営に役立てる。学校における取組状況やコンソーシアムの構築・管理運営について情報を共有しつつ、管理機関として、適宜、校内検討会議やモデル授業等に参加しながら事業管理を行うとともに、カリキュラム等の検討と並行してコンソーシアム構築の検討を進め、あわせて新学科で想定している学びを先行試行し、令和７年度設置に向けて準備を進めていく。

（９）　管理機関による支援体制

守山北高等学校の新学科「みらい共創科」は、地域でのフィールドワークやインターンシップを軸にした探究活動と、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションを行う活動を中心に、企業や大学、地域等とつながった学びを展開する。また、遠隔で企業や大学、地域等の外部専門家から指導助言等を受けたり、他校生徒との意見交流等を行う学びに取り組んだりすることを考えており、これらの学びができる教室や備品等を整備する必要がある。

教室や備品等については、学校の施設改修費や令和６年度県事業「普通科改革推進事業」において予算化を図った。

守山北高校では、令和６年度は教職員研修等を通して教職員の探究学習のスキル向上を図る必要がある。あわせて、令和８年度から実施するインターンシップに向けた体制作りを、今後２年間かけて行うとともに、コンソーシアムの指導により事業終了後もその体制の継続・充足を図っていく必要がある。管理機関として、これらの学校の取組を支援していく。

（10）　成果普及のための取組

■守山北高等学校

【成果発表の公開授業】

先述した「他者になりきる」をテーマとした２年生「総合的な探究の時間」の成果発表会を、県下の教職員や関係者等に周知し、公開授業として実施した。生徒は、成果物をポスターにまとめ、ポスターセッション型で授業を行った。

ポスターセッションの様子①

ポスターセッションの様子②

また、先述した１年生でのモデル授業に、市役所の広報の方々にも御参加いただき、本校の取組を宣伝できた。令和６年３月発刊の守山市広報誌に掲載される予定である。

また、オープンスクールを年２回実施したり、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信したり、守山市の広報（４月発行予定）を活用したりするなど、地域住民や地元中学校などに向け情報発信を行った。

また、滋賀県総合教育センター主催の「中堅教諭等資質向上研修」が 11 月 21 日に実施され、県の「魅力化プラン」の中で実施している改革例として、地域連携重点校である守山北高等学校で、令和７年度の新学科設置に向けて検討を進めていることを紹介した。守山北高等学校は、研修受講者と同世代の教諭がプロジェクトリーダーとして学校改革に取り組んでいる。同世代が学校の中心となって活躍していることで研修受講者に刺激を与え、中堅教諭等の学校の魅力化・改革推進に対する資質向上、学校改革のボトムアップの力につなげ、他の県立高等学校改革に活かすとともに、守山北高等学校の成果の普及を図った。

さらに、「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月 23 日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。連絡会議は定期的に開催することを予定しており、令和６年度も引き続き開催する。

３月 14 日には守山市民ホールで「守山北高等学校研究成果報告会」を開催し、今年度の教育活動等の報告を行い、守山北高等学校の新学科について、地域の行政機関、中学校等に向けてメッセージを発信した。

・R5．6/21：「総合的な探究の時間」の成果発表会（他者になりきる）
・R5.11/21：県「中堅教諭等資質向上研修」にて取組内容の共有
・R6．1/23：地域連携重点魅力化連絡会議において地域連携における課題共有と成果普及
・R6．1/24：モデル授業を市役所の広報の方々が参加
　　→令和６年４月発刊の守山市広報誌に掲載予定
・R6．3/14：守山北高等学校研究成果報告会

課題・次年度計画への反映方針

今年度は、新学科のカリキュラム等を中心に検討を進めてきたが、その成果普及は十分できなかった。令和６年度は、生徒による成果発表を取り入れた学校説明会を実施したいと考えている。連携・協働した授業から成果発表に関する評価・助言までを一連の流れとしてプログラム化し、カリキュラム等のブラッシュアップを図ることを考えている。

また、令和５年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。令和６年度の「学びの祭典」において、アントレプレナーシップに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科設置を県内の中学生等にアピールしていく。

■管理機関

滋賀県総合教育センター主催の「中堅教諭等資質向上研修」が 11 月 21 日に実施され、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の参事１名と主査１名が講師として、「これからの滋賀の県立高等学校のあり方について」をテーマに講義した。この研修では、県の「魅力化プラン」の中で実施している改革例として、地域連携重点校である守山北高等学校で、令和７年度の新学科設置に向

けて検討を進めていることを紹介した。守山北高等学校は、研修受講者と同世代の教諭がプロジェクトリーダーとして学校改革に取り組んでいる。同世代が学校の中心となって活躍していることで研修受講者に刺激を与え、中堅教諭等の学校の魅力化・改革推進に対する資質向上、学校改革のボトムアップの力につなげ、他の県立高等学校改革に活かすとともに、守山北高等学校の成果の普及を図った。

また、「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月 23 日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。連絡会議は定期的に開催することを予定しており、令和６年度も引き続き開催する。

課題・次年度計画への反映方針

今年度実施した「地域連携重点魅力化連絡会議」では、本事業の指定を受けた学校の取組状況等を発表していただくことで、本事業の効果的な実施と、各校での地域連携の取組や地域社会に関する学科の検討の一層の推進を図った。地域連携の取組を進めるには、コーディネーターの配置や教職員の負担軽減等、予算・人員配置が焦点になりがちだが、それ以外のところも県教育委員会として各校の取組を支援する方策を考えたい。

また、令和６年度は、守山北高等学校が行うオープンスクールとは別に、県教育委員会として、守山市を中心とした中学生・保護者・地域住民を対象とした「学校説明会」を主催し、新学科について説明を行うことで守山北高等学校の取組の成果を普及する。

（11）　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

■管理機関

・国の指定終了後も「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、管理機関である県教育委員会は守山市と事業指定３年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。また、県教育委員会事務局生涯学習課の令和６年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。12 月 15 日に開催された令和５年度第２回エコシステム研究会（高校コーディネーターとの協働による高校改革に向けたエコシステム研究会）に参加し、他府県でのコーディネーターの採用・配置に関する状況を学んだ。他府県の取組を参考にして、コーディネーターの継続的雇用の方策を研究していく。

・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。

・令和３年度から令和５年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和６年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化

させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「みらい共創科」の学びの継続・充実のための予算確保や、守山市や地域の企業等から費用を含めた支援も含め検討していく。

・守山北高等学校が自走していけるよう必要な支援やコンソーシアムを継続する。

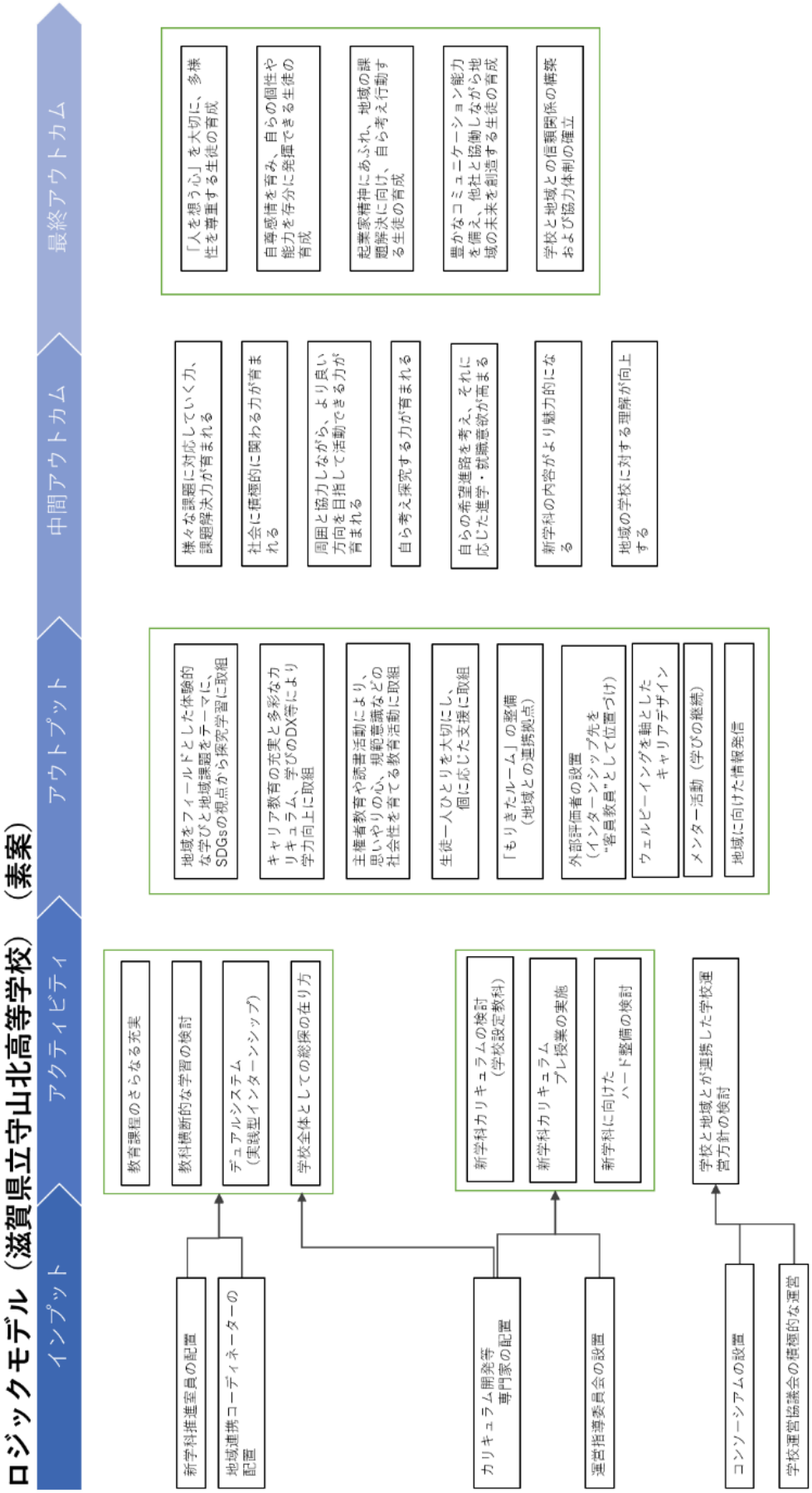
■守山北高等学校・守山市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、守山市全体でも、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

（12）　他の事業との関係

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、令和４年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICT を活用した、小規模の学校間での遠隔授業の日常的な導入に向けた研究に取り組んだ。地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

■ロジックモデル


ロジックモデル（滋賀県立守山北高等学校）（素案）
インプット
アクティビティ
アウトプット
中間アウトカム
最終アウトカム
新学科推進室員の配置
地域連携コーディネーターの配置
教育課程のさらなる充実
教科横断的な学習の検討
デュアルシステム（実践型インターンシップ）
学校全体としての総探の在り方
カリキュラム開発等専門家の配置
運営指導委員会の設置
新学科カリキュラムの検討（学校設定教科）
新学科カリキュラムプレ授業の実施
新学科に向けたハード整備の検討
コンソーシアムの設置
学校運営協議会の積極的な運営
学校と地域とが連携した学校運営方針の検討
地域をフィールドとした体験的な学びと地域課題をテーマに、SDGsの視点から探究学習に取組
キャリア教育の充実と多彩なカリキュラム、学びのDX等により学力向上に取組
主権者教育や読書活動により、思いやりの心、規範意識などの社会性を育てる教育活動に取組
生徒一人ひとりを大切にし、個に応じた支援に取組
「もりきたルーム」の整備（地域との連携拠点）
外部評価者の設置（インターンシップ先を"教員教員"として位置づけ）
ウェルビーイングを軸としたキャリアデザイン
メンター活動（学びの継続）
地域に向けた情報発信
様々な課題に対応していく力、課題解決力が育まれる
社会に積極的に関わる力が育まれる
周囲と協力しながら、より良い方向を目指して活動できる力が育まれる
自ら考え探究する力が育まれる
自らの希望進路を考え、それに応じた進学・就職意欲が高まる
新学科の内容がより魅力的になる
地域の学校に対する理解が向上する
「人を想う心」を大切に、多様性を尊重する生徒の育成
自尊感情を育み、自らの個性や能力を存分に発揮できる生徒の育成
起業家精神にあふれ、地域の課題解決に向け、自ら考え行動する生徒の育成
豊かなコミュニケーション能力を備え、他社と協働しながら地域の未来を創造する生徒の育成
学校と地域との信頼関係の構築および協力体制の確立

第３章　研究開発の内容

３－１　運営指導委員会

■第１回運営指導委員会

＜会議の日時等＞

開催日時　令和５年９月 15 日（金）10：00～11：30（守山北高等学校　大会議室）

出 席 者【運営指導委員】

大野裕己委員　桶土井雅章委員　武井哲郎委員　根木山恒平委員　森中高史委員

【守山北高校　みらい共創推進室】

松村友二校長　柳垣弘樹教頭　林敬治事務長　富髙靖二教諭　髙田法悟教諭

木下一教諭　　田口真太郎コーディネーター

内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況について

（２）事業に関する指導助言等

＜協議要旨＞

〇資料説明（柳垣弘樹教頭）

別紙参照

＜主な意見＞

・「生徒たちが持つ潜在的な力を引き出す」という視点は、新しい仕掛けづくりにつながっていく。

・少し体験する程度の短いインターンシップでは意味がないので、長期に関わってもらってもらえるものが良い。例えば、高校生の主体的な要望等を取り入れたインターンシップができれば、インナーンシップ先にとってもいい取組になるのではないか。

・守山北高校の周辺には、福祉施設や保育園等が多い。「福祉」や「子ども」の視点からの地域探究も良い取組になるのではないか。

・守山北高校が駅から遠いという通学の不便さを逆手にとって、例えば、駅から学校まで電動キックボードを安全に使った通学ルートを考える取組も面白いのではないか。

・１年次のうちに生徒が持つ興味関心をどう大きくして２年次のインターンシップにつなげていくのかが大事になる。１年次に「チャレンジしようとする力」を引き出すことが肝要ではないか。

・入学生を見て、どういう学びが展開できるかを理解しながら生徒の潜在的な良さを精査することも大事ではないか。取組を進めていく中で、生徒の変化を集団的に確認することに意識して進めていくこともいいのではないか。

・まずは、学校設定科目の検討が中心になるが、学校全体の学びである「総合的な探究の時間」へどうつなげるかは次のステップになる。

・大企業や行政機関でのインターンシップだけでなく、中小企業も選択の１つに加えてもいいのではないか。例えば、守山北高校の OB が経営している店でのインターンシップは、生徒のモチベーションを高めることにもなるのではないか。

・守山北高校では、これまで部活動で好循環が生まれていた。部活動をよくしたいという思いが教職員の中にあるなら、部活動の中にもポテンシャルがあるのではないか。

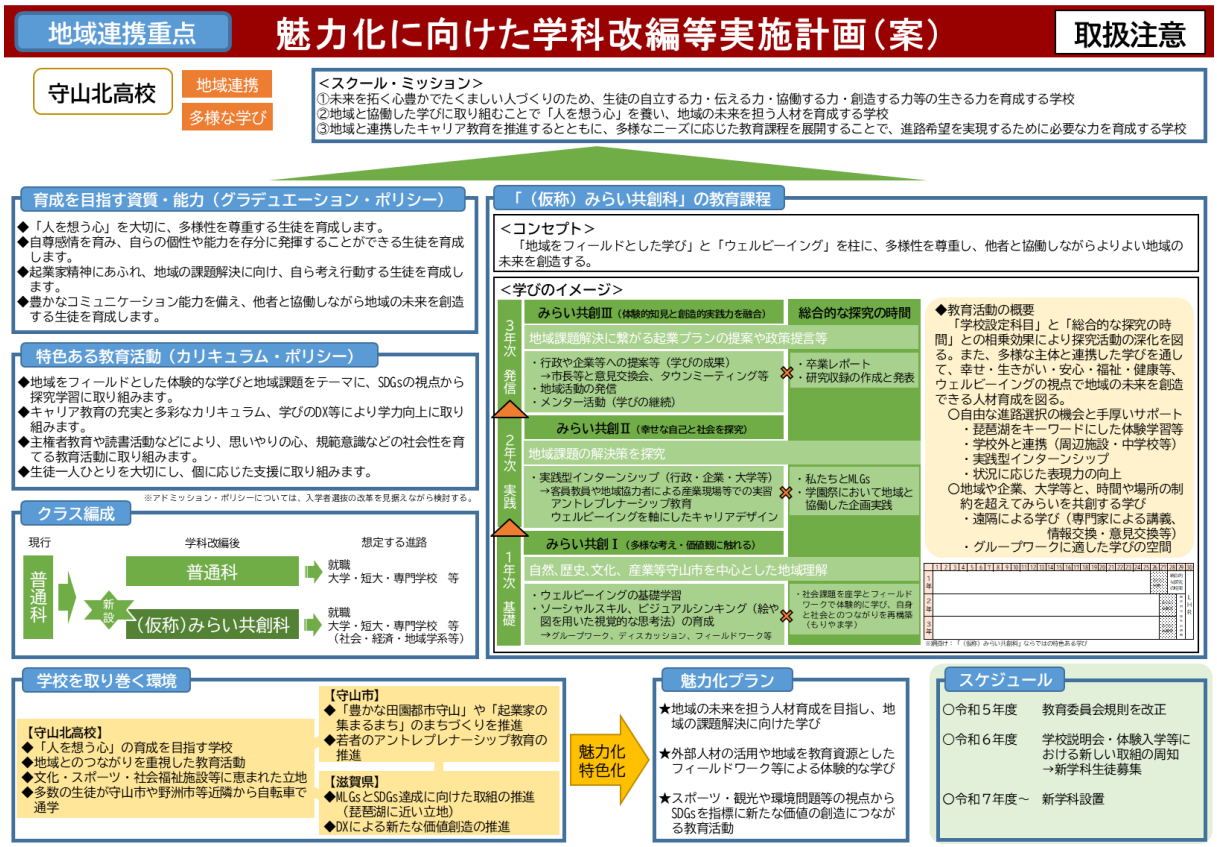
・堅実に仕事をしながら、仕事以外のところで人生を豊かにするという考え方もある。それをデザインできるのが守山北高校だというのもありではないか。音楽活動や美術活動等の生徒の主体性を、学園祭等を活用して引き出してあげるのもいいのではないか。

＜会議資料＞

・令和５年度　守山北高等学校　実施計画書（普通科改革支援事業）
・令和５年度　守山北高等学校　新学科構想ビジュアル図
・令和５年度　守山北高等学校　学校案内パンフレット　【下記資料】
・滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画（案）　【下記資料】

▼学校案内パンフレット

▼滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画（案）



■第２回運営指導委員会

＜会議の日時等＞

開催日時　令和５年 12 月 19 日（火）14：00～15：29（守山北高等学校　大会議室）

出 席 者【運営指導委員】

大野裕己委員　桶土井雅章委員　根木山恒平委員　森中高史委員

【守山北高校　みらい共創推進室】

松村友二校長　柳垣弘樹教頭　林敬治事務長　富髙靖二教諭　髙田法悟教諭

木下一教諭　　上田隼也コーディネーター

内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況について

（２）事業に関する指導助言等

＜協議要旨＞

○資料説明（上田隼也コーディネーター）

別紙参照

＜主な意見＞

○「みらい共創Ⅰ」・「もりきた学Ⅰ」について

・中学校までの学びで、少しは地域のことを学んでいる。１年１学期のうちに、適切に社会意識を掘り起こすことも考える余地はあるのではないか。

・「みらい共創科」の 40 人は３年間クラス替えがないので、１年次での仲間づくりは重要になる。

・３年間クラス替えがないなら、例えば、グループを学期ごとに変えるとか、テーマごとに

変える等の配慮も必要ではないか。
・１年次のうちは、自分が何に興味があるのか等、丁寧に幅広く学んだ方が良い。
・生き辛さ等で苦しんでいる生徒たちへのフォローは、特に１年次が大事になる。１人の専門家でのフォローには限界があるので、「もりきた学Ⅰ」の１学期に、生徒同士でカウンセリングし合うスキル等を学ぶといいのではないか。

○「みらい共創Ⅱ」・「もりきた学Ⅱ」について
・生徒の「発表してみたい」という内発を組み込むことについては、工夫の余地がある。
・インターンシップ後の「振り返り」は、すごく大事になる。
・２年次におけるインターンシップの経験や発見した課題等について、何かを実践して、改善した、役に立った、貢献した等という達成感を与えられるプログラムになれば良い。
・高校生の進路決定には、保護者の影響が大きく関わる。２年次でのイベント参加には保護者も参加可能にする等、保護者の巻き込みも意識すると進路のミスマッチが防げるのではないか。
・インターンシップ実施の前に「どんな小さなことでもいいので企業の改善点を３つ見つけよう」等のように指示を出せば、生徒はそういう目線でもインターンシップに臨む。企業は、そういった新鮮な意見を欲している。
・「もりきた学」では、地域の方にたくさん来てもらって、５分ずつでもいいので、生徒と地域の方が１対１で対話する取組があっていいのではないか。
・探究活動は「立ち上げる」ことと同じぐらい「続ける」ことが難しい。教職員が「背負い過ぎ」なカリキュラムになっていないか確認をお願いしたい。
・探究課題を毎年アップデートしていくために、どう地域との連携を進めていくのかについて留意が必要になる。
・１年次のうちに外部機関との連絡の取り方等の基本的なことを教え自立して動けるようにして、教職員がトラブル対応で奔走することにならないようにしないと教職員の負担が増える。
・教職員の負担問題では、教育的効果も含めて生徒の学びの可視化も大事になる。学びの成果や学びの考え方を、教職員が伝えなくても、生徒たちの学びの履歴から、これから学ぶ生徒たちに伝わる工夫の余地はある。

○「みらい共創Ⅲ」・「もりきた学Ⅲ」について
・「みらい共創科」では、自己 PR を活用した大学入試を想定しているのか。中学生や保護者は、高校を選ぶときに卒業後の進路のことを含めて検討する。

○学校全体のリニューアル・コンソーシアム等について
・生徒の地域に対する関心が深まってからのオプションとして、地域探究の自主活動や部活動等の新しい枠組みの工夫もありではないか。
・「もりきたベース」とは、どんな教室を考えているのか。中高生は居場所を求めているので、生徒たちが放課後等に気軽に集まれる場所にできたら良いのではないか。予算については、民間から寄付をもらう方法を考えた方がいいのではないか。
・予算をかけないで学習環境を向上させるためには、ディスカッション時に机の配置を工夫したり、イスだけの配置にしたり、休憩時には小さい音のバックミュージックをかける等もいいのではないか。また、環境を変えて、例えば、市立図書館の会議室を使わせてもらうのもいいのではないか。
・何事もタイミングは重要で、連携先には「今から、○○をはじめる」というタイミングに

あわせて入ってもらった方がいい。２期目以降の途中からだと、「上手くいかなかったから」というイメージになってしまう。

・「みらい共創科」の３年間クラス替えなしというのはメリットも多く、そこを PR することが大切ではないか。

・発明的なものは、簡単に出てくるものではない。他府県も含めて情報を得ながら、できることから身の丈で取り組んでいくことで、いろんな工夫は生まれてくる。

・守山北高校は守山市外の中学生も入学しているので、コンソーシアムの構成員にもう少し守山市外の学校関係者が含まれてもいいのではないか。

＜会議資料＞

・学校設定教科「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」　【下記資料】

・総合的な探究の時間「もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」　【下記資料】

・みらい共創科設置に向けた素案　【下記資料】

・滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画（案）　【下記資料】

▼学校設定教科「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

学校設定教科

「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

みらい共創Ⅰ（2 単位：50 分×70 時間想定）　＊木曜日 6~7 時限想定（みらい共創科 1 年 40 名×1 クラス）

教科の目標	"「共創」の基礎理解と技術習得" ・ウェルビーイングの基礎理解と社会・地域問題の発見方法の習得 ・多様な人たちとの共創に必要なソーシャルスキルの習得 ・地域の課題に取り組むアントレプレナーシップの基礎と実践	＜指導体制＞ 教科間協働で、教員２名体制 学習内容により、TT 体制または分割授業

月進行	学習項目名	配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
1Q（4-5 月）	コケリエーションスキル（共創力）	12	多様なアイスブレイクがメイン。集団理解のためのワークショップなどでグループワークを行い、心理的安全空間づくりを行う。	ソーシャルスキル（他人と協調・共同するための指南であり、理解から尊重対応及び及ぼしたい自己的な考えを伝えるための技術）の習得、心理的安全な空間づくり。	・ミニレポート ・自己評価
1Q（6-7 月）		12	グラフィックレコーディング（イラストや絵でお話の基礎スキルを学び、グループワークにおけるクリエイティビティを高める。 ★外部講師（宮長教員）による構況会・ワークショップの実施。 （例）成安造形大学と連携	アイデアの発散と収束の手法を体験的に学び、グループワークにおけるスキルを習得。	・相互評価 ・ミニポスター ・ポートフォリオ
2Q（9-10 月）	アントレプレナー演習	基礎編 14	座学で SDGs や MLGs、ウェルビーイングについて学ぶ。自己の関味関心と関連する社会問題を発見し、深堀りする。 ★外部講師（宮長教員）による特別授業の実施（想定） （例）滋賀県庁、市役所、地元商業者、NPO 法人等	・SDGs や MLGs といった社会的な課題に関する知識を習得し、自身の視点を拡げる。 ・ウェルビーイングについて学び、自身や相手、地域社会も幸せになる視点を習得。	・レポート ・ディスカッションシート
2Q（10-12 月）		応用編 18	地域の団体等と連携し、複雑から提案された共通課題に対して、クラスかでグループに分かれて課題解決に向けたリサーチ（フィールドワーク含む）を通じ、企画提案を作成する。 ★市役所、社会福祉施設、NPO と連携してテーマの決定	地域の課題に取り組むアントレプレナーシップの基礎理解を深める	・レポート ・ポートフォリオ
3Q（1-2 月）		プレゼン編 12	プレゼン用の資料やスライドを作成し、クラス内でプレゼンテーションを行う。	・プレゼンテーション技能を実践し、口頭発表のスキルを習得。 ・関係者からもフィードバックをいただき、より実践的な学びを獲得する。	・プレゼン資料 ・口頭発表 ・相互評価 ・外部評価 ・ポートフォリオ
3Q（3 月）	★合同講評会	2	クラスの最後グループによる、全校生徒へ成果発表		

みらい共創ⅡA（2 単位：50 分×70 時間想定）＋**みらい共創ⅡB**（インターン 1 単位：50 分×35 時間想定）＊木曜日 6~7 時限想定（みらい共創科 2 年 40 名×1 クラス）

教科の目標	"地域や企業との連携プロジェクト" ・地域の事業者や行政と協働したインターンシップの実施 ・現場で課題発見と解決策の提案 ・現場で学んだことを言語化するスキル	＜指導体制＞ 教科間協働で、教員２名体制 学習内容により、TT 体制または分割授業

科目	月進行	学習項目名		配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
A	1Q（4-5 月）	インターンシップに向けたリサーチ	業界研究	12	インターンシップ先の業界に関して、ウェブや文献、ヒアリングなどで調査し、課題や現状を整理し、発表する。 ★連携企業や民間等を招いた特別講義の実施。 ★各業界へのリモート取材、フィールドワーク	・業界研究を通じて、社会の現状を把握する ・社会が業界生にどのようなことを期待するのか、社会の思いを把握する	・レポート ・ミニポスター ・口頭発表
A	1Q（6-7 月）		企業調査の検討	14	企業や業界の抱える課題に対して、高校生の自分にできることを考える活動を通じて、企業や地域社会にとっても良い活動であり、自身も取り組みたいと思えるプロジェクトを企画立案。 ★インターンシップへのフィールドワーク（複数実施） ★みらいフォーラム（学科内成果報告会）の実施	・ウェルビーイングの視点から、自分が取り組むプロジェクトを企画する ・コンセプトマップ（現状や課題・理想・解決策）でプロジェクトを整理する ・生徒がインターン先との事前調整を行う	・レポート ・プロジェクト案（発表レジュメ） ・口頭発表 ・ポートフォリオ
B	＋α（6-9 月）	実践型インターンシップ		35	企業・教育・福祉・行政の 4 分野から希望制で振分け。日程調整、事前研修からインターン実習、振り返りセッションを行う"守北版デュアルシステム"。夏季休業中に現場でのインターンシップ（3~5 日間程度）を実施する。	・現場での課題発見 ・自身のプロジェクトへの活元 ・ソーシャルスキルの実践	・実習日誌 ・実習日誌 ・自己評価 ・外部評価
A	2Q（9-10 月）	活動のまとめ／分析	課題解決の提案と検証	28	現場での課題発見とその解決策の提案作成。実際の現場での問題解決のワークショップ、解決策（高校生として何ができるか）の提案を検討しプレゼン資料を作成。 ★外部アドバイザーの招聘（外部講師等）	・ウェルビーイングの視点から、現場での体験を踏まえた具体的な解決策（アイデア）の提案。	・プロジェクト案 ・プレゼン資料 ・レポート
A	3Q（11-1 月）		プレゼンテーション	14	インターンシップと課題解決の実践結果を取りまとめ、複合用プレゼンテーションを作成し、発表実施。インターン先の担当者にも参加していただき、フィードバックを受ける。	・プレゼンテーション技術を実践し、口頭発表のスキルを向上。 ・関係者からもフィードバックをいただき、より実践的な学びを獲得する。	・口頭発表 ・外部評価 ・ポートフォリオ
A	3Q（3 月）	★合同講評会		2	優秀グループによる、全校生徒へ成果発表		

みらい共創Ⅲ（2 単位：50 分×70 時間想定）　＊木曜日 6~7 時限想定（みらい共創科 3 年 40 名×1 クラス）

教科の目標	"社会実装をめざしたプロジェクト実施" ・地域の事業者や行政と協働したプロジェクトの実施 ・プロジェクトの成果を地域や社会に発元する活動 ・後輩たちのメンターとなる活動	＜指導体制＞ 教科間協働で、教員２名体制 学習内容により、TT 体制または分割授業

月進行	学習項目名	配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
1Q（4 月-7 月）	マイプロジェクトの計画と資料作成	24	・海路先の試験（総合型選抜中心）に向けたマイプロジェクトの計画・準備を行い、成果物の整理・まとめを行う。完成した成果物や過程を用いて、成果発表会を行う。 ・学外コンテストへの参加。 ・中学校への学校型説明会等での「みらい共創科」をアピールする資料の作成。（一部） ★みらいフォーラム（学科内成果報告会）の実施	・自身の取り組みと学校での学びをつなげて、それらを言語化しプレゼンする力。 ・各進路先に向けた準備と実践。	・レポート ・成果物 ・口頭発表 ・ポートフォリオ
2～3Q（9-1 月）	○各グループ／生徒に応じた活動を展開　＊グループまたは個人ごとの成果を調査書等に掲載				
	・地域への還元活動 ・研究収録作成や活動のまとめ ・ピアラーニングと活動の整理	44	Ⅰ学外コンテストの準備、資料作成等 Ⅱ文化祭での地域と協働した企画実践や成果展示等の作成等 Ⅲプロジェクトの成果を地域や社会に向けて発表・還元 例 1）体験入学（オープンスクール）等での活動報告と PR 例 2）タウンミーティングの実施。地域のリーダーである市長に向けた政策提案を行い、アウトリーチ活動を実践 Ⅰマイプロジェクトの独自研究（1 学期のつづき） Ⅱ資格の取得 Ⅰ後輩たちへのメンタリングを実践する。1・2 年の発表などの審査員や指導者として活躍する	・学校内外へ発信する力 ・プレゼンスキル、ソーシャルスキルの高大成 ・各進路先に向けた準備と実践。 ・ピアラーニングの手法を習得する	・成果物 ・レポート ・口頭発表 ・自己評価 ・外部評価 ・ポートフォリオ
3Q（3 月）	★合同講評会	2	代表者のみの発表。	他学年からのフィードバックを受け取り、自身のプロジェクトや活動の振り返りを深める。	

▼総合的な探究の時間「もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

総合的な探究の時間

「もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

もりきた学Ⅰ【総合的な探究の時間】：(1 単位：50 分×35 時間設定)　★火曜日 6 時限設定　(1年：みらい共創科 40 名×1 クラス・普通科 40 名×4 クラス)

教科の目標	"基礎的な探究スキルの習得" ・挨拶や礼儀作法などのマナーなどのソーシャルスキルの習得 ・地域を調査し、発表するスキル(PC を活用したプレゼンスキル) ・文献調査とフィールドワークで地域理解を深め、キャリアデザインにつなげる			＜指導体制＞ 担任／副担任の TT 体制。内容によっては分割での授業	
月進行	学習項目名		配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
1Q (4-5 月)	探究ガイダンス		5	探究についてのガイダンス。本校スローガン「ほらっここに人を想うものがある」の意義についてそれぞれが考え、その内容を発表する	・それぞれが考える「人を想う心」について発表レジュメにまとめる ・小グループ内での発表	・発表レジュメ ・自己評価 ・相互評価
1Q (6-7 月)	DX	デジタルリテラシーとビジネススキル	5	フィールドワークで実践できる挨拶や礼儀作法、ビジネスマナーに関する講習を受ける。また、和布 PC を活用した情報収集とレポートやプレゼン作成技能を習得する。 ★金融系の企業によるビジネスマナー講習	・社会人に必要な礼儀作法やビジネスマナーの習得 ・PC を活用した情報収集とレポートやプレゼン作成技能の習得。	・レポート ・作成データ等
2Q (9 月)		共同編集でプレゼン作成	4	teams 等のクラウドサービスを活用し、グループによる共同編集を行う。また、データ収集と整理・図表作成や、プレゼンテーション作成技能を習得する。 ★情報科と連携(word,excel,pp など)	・データ収集と整理・図表作成や、プレゼンテーション作成技能を習得する。	・作成データ等
2～3Q (9-1 月)	地域を知る	聞き／FW 編	10	守山市を知る講演会を実施。守山市の特徴を事前に調査し、10 テーマ(福祉・観光・産業など)に分かれて、守山市周辺でフィールドワークを実施。(特別時間割 or 長期休業) ★外部講師による講演会（例：市長、市役所関係等	・地域を調査し、その特徴や課題を理解する ・フィールドワークでソーシャルスキルを実践する	・プレゼン資料 ・相互評価 ・発表
		プレゼン編	6	事前学習で調査したことやフィールドワークでの体験をパワーポイントにまとめ、クラス全体で発表を行う。	・プレゼンテーション作成技能を実践する ・発表(役割分担の中で発表に関わる事も含む)	・ポートフォリオ ・振返レポート (400 字程度)
3Q (2 月)	活動のまとめ		3	ポートフォリオを用いて、活動の振り返りや自身の学び、考えの変化等を整理してレポートにまとめる。	・自身の学びや変化を文章化して整理し、次学年に学びをつなげる。	
3Q (3 月)	★合同講評会		2	後者グループによる全体発表		

もりきた学Ⅱ【総合的な探究の時間】：(1 単位：50 分×35 時間設定)　★火曜日 6 時限設定　(2年：みらい共創科 40 名×1 クラス・普通科 40 名×4 クラス)

教科の目標	"応用的な探究活動の実践" ・SDGs や MLGs などの社会課題についての理解と文献調査のスキル習得 ・守山市と他地域の比較検討し、その共通点や相違点を考察 ・地域の課題解決の探求			＜指導体制＞ 担任／副担任の TT 体制。内容によっては分割での授業		
月進行	学習項目名		配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
1Q (4-6 月)	社会課題探究	文献調査編	8	個人の関心に応じて、5 テーマ(環境・福祉・教育・経済等)のクラスに分かれて、グループを編成。さらに選択した社会課題(テーマ)ごとにグループに分かれて文献調査(議論リスト)に取り組む。調査内容をまとめてテーマグループ内で発表する。 ★SDGs や MLGs に関連する講演会(県企画講師)	・SDGs や MLGs の観点から、社会課題に関する知識理解を深める。 ・文献調査のスキルを習得する ・調査内容をまとめて文章化能力の向上を目指す。	・発表レジュメ ・グループ内発表 ・相互評価
1～2Q (6-11 月)		リサーチ／ヒアリング編	12	グループを再編成し、選んだテーマをさらに深堀する。守山市以外の地域を取り上げ、SDGs の視点から地域課題の比較を行う。その際、PC などのデジタルデバイスを積極的に活用する。 グループごとに調査結果をポスターにまとめて掲示し、全員でフィードバックを行う。 ★リモート取材を実施	・地域課題について、SDGs の視点から比較・分析・考察する。 ・リモート取材やメール等で取材を行い、ソーシャルスキルを実践する。 ・プレゼンテーション作成技能を実践する	・レポート ・ポスター ・相互評価
3Q (12-1 月)		解決策の策定編	8	フィールドワークと文献調査等を踏まえ、自分たちが活動することで解決できる社会課題の解決策を企画し、1 年次よりもレベルアップした発表準備を行う。	・具体的な解決策の提案と社会参画 ・自らの言動や考えに変化がある	・プレゼン資料 ・相互評価
3Q (1 月)		プレゼン編	2	グループでまとめた企画提案の発表と相互フィードバックを行う。	・プレゼンテーション作成技能を実践する ・発表(役割分担の中で発表に関わる事も含む)	・発表 ・ポートフォリオ ・レポート
3Q (2 月)	活動のまとめ		3	ポートフォリオを用いて、活動の振り返りや自身の学び、考えの変化等を整理してレポートにまとめる。	・自身の学びや変化を文章化して整理し、次学年に学びをつなげる。	(800 字程度)
3Q (3 月)	★合同講評会		2	後者グループによる全体発表会		

もりきた学Ⅲ【総合的な探究の時間】：(1 単位：50 分×35 時間設定)　★火曜日 6 時限設定　(3年：みらい共創科 40 名×1 クラス・普通科 40 名×4 クラス)

教科の目標	"独自の研究プロジェクト" ・志望理由書／自己 PR 文の作成を通じて、学びのまとめ ・卒業レポート作成を通じて、言語能力の向上 ・発表会を通じて、後輩の手本となる			＜指導体制＞ 担任／副担任の TT 体制。内容によっては分割での授業 卒業レポートの部分では、多くの先生方に関わっていただく予定		
月進行	学習項目名		配当時間	学習内容	目標・到達点など	主な評価資料
1Q (4-5 月)	自己探究	志望理由書編	8	自らの進路に応じた志望理由書／自己 PR 文の作成。ポートフォリオを活用しながら、2 年間の自身の学びを整理し、文章化していく。 ★書き方講座の実施	・3年間の学びのまとめを言語化する ・文書作成能力の向上 ・自己表現能力の向上	・成果物
1Q／2Q (6-11 月)		卒レポ作成編	14	自分の興味関心に応じた探究テーマを決定し、文献調査や個人でのフィールドワークを通じて学びを深め、卒業レポートとして 2,000 字で執筆する。	・これまでの学びを基に、自分の興味関心を深掘する ・学術的な書き方の基礎、文献の引用・参照方法を習得。	・成果物
2Q (11-12 月)		研究収録編	4	清書を Word にまとめて提出し、クラスの研究収録を作成する	・デジタルスキルの実践 ・発表(読み聞かせ、相互評価等)	・成果物 ・発表 ・自己評価 ・相互評価
3Q (1 月)		プレゼン編	4	発表会／代表者の選定。		
		振り返りとまとめ	3	ポートフォリオの整理 探究活動の振り返りアンケートの実施。	・自身の学びや変化を文章化して整理しまとめる。	・ポートフォリオ
3Q (3 月)	★合同講評会		2	代表者が全体に対して、卒レポの内容を下級生に対してプレゼンテーションする。		

▼みらい共創科設置に向けた素案

令和5年度
新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）

滋賀県立守山北高等学校
みらい共創科設置に向けた素案ver.10

2023/12/19 (火)

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

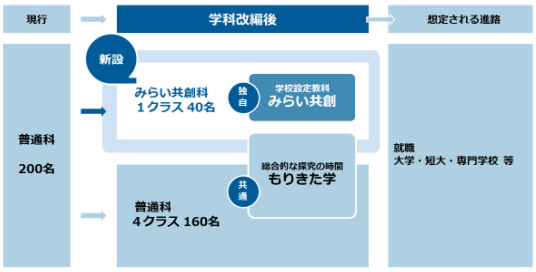
1　守山北高等学校スクールミッション

1. 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
2. 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
3. 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに教育課程の展開することで、進路希望を実現するために必要な力を養成する学校

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

2　クラス編成

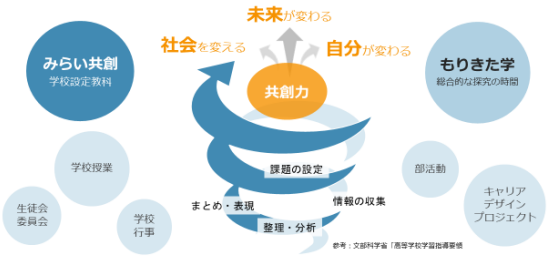


Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

3　未来を共創し、未来を構想するプログラム

学校の授業や行事、部活動に加えて「もりきた学」と
「みらい共創」によって探究的な学びに相乗効果をもたらす



参考：文部科学省「高等学校学習指導要領

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

4　みらい共創科のポイント

「地域をフィールドとした学び」と「人を想う心」を柱に、多様性を尊重し、他者と協働しながらより良い未来を創造する

1	もりきた版デュアルシステム	守山市の企業や大学等と連携した実践型インターンシップにより生徒のニーズに応えた進学・就職をサポートする。自由な進路選択を実現する。
2	探究との相乗効果	みらい共創科で新設する「学校設定教科(みらい共創)」と「総合的な探究の時間(もりきた学)」との相乗効果により学校全体で生徒の学びの底上げを行う。
3	DXによる学びの実践	PCやタブレットを活用した授業やグループワークを軸とした対話的な学びで表現力の向上を目指す。研究者・実践者・企業人らと繋がることのできるDXの学びの拠点となる。

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

5　３カ年の学びのイメージ

	１年生（基礎）	２年生（実践）	３年生（発信）
学校設定教科	みらい共創Ⅰ（2単位） ・グラフィックレコーディング等による共創力の育成 ・講演会でSDGsやMLGs、ウェルビーイングについての学習 ・行政や地域の団体、企業から提案された課題に対して企画提案	みらい共創Ⅱ（2＋1単位） ・もりきた版デュアルシステムとして、企業等へのインターンシップを実施 ・インターンシップ先で感じた課題に対して、解決策を提案	みらい共創Ⅲ（2単位） ・進路先に応じたマイプロジェクトの実行 ・学校外のコンテストに参加 ・後輩たちのアドバイザーとなる活動
総合的な探究の時間	もりきた学Ⅰ（1単位） ・社会人マナーやデジタルリテラシーの習得、練習 ・環境や観光、経済等のグループに分かれた守山市のフィールドワーク	もりきた学Ⅱ（1単位） ・興味のある社会課題に関する環境や教育、福祉等について文献調査 ・守山市以外の地域とオンラインを活用して取材を行う	もりきた学Ⅲ（1単位） ・志望理由書/自己PR文の作成 ・卒業レポート作成

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

6　MORIKITA BASE（MKB）–もりきたベース–

みらい共創・探究活動を加速させる拠点を目指す

守山北高校３階会議室

イメージ図

・みらい共創・もりきた学の授業やグループワークを行う
・市内の小中学生や地域住民、PTAが使うことができる開かれた空間
・DXといった先進技術に関する学びの拠点としての活用

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

7　生徒へのアンケートの結果(n＝347)

将来の仕事を見つけたいと考える生徒の割合が高く、自分らしさ（個性や自信、アイデア）を磨きたいと考える生徒の割合がやや高い。一方で、地域理解を期待する生徒は半数にとどまった。

		当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
1	将来就きたい仕事ややりたい仕事を見つけたい	63%	31%	3%	
2	自分で計画を立てて行動することができるようになりたい	47%	45%	7%	
3	興味のあることを積やすなど、進路選択の幅を広げたい	53%	38%	7%	
4	自分に自信を持ちたい	55%	35%	8%	
5	自分とは異なる意見や価値を尊重することができるようになりたい	49%	40%	8%	
6	新しいアイデアや豊かな発想をすることができるようになりたい	53%	34%	10%	
7	自分らしい個性を表現することができるようになりたい	49%	39%	10%	
8	自分の考えを大人に伝えることができるようになりたい	42%	43%	11%	
9	うまくいくかわからないことでも意欲的に取り組みたい	41%	45%	12%	
10	クラスや人前で自分の意見を発表することへの抵抗をつけたい	34%	46%	15%	5%
11	グループワークで力を発揮できるようになりたい	34%	43%	18%	5%
12	学校以外のいろいろな人に話を聞きに行くことができるようになりたい	23%	44%	26%	7%
13	滋賀県のことをよく知りたい	17%	36%	30%	17%
14	守山市のことをよく知りたい	14%	32%	33%	21%

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

8　企業へのアンケート・ヒアリングの結果

インターンシップの協力に前向きな意見を得た

ダイハツディーゼル(株)

日本マタイ(株)

ヒアリング協力企業	訪問日
JNCファイバーズ(株)	12/14(木)
ワコール流通(株)	12/14(木)
ダイハツディーゼル(株)	12/15(金)
一正蒲鉾(株)	12/15(金)
日本マタイ(株)	12/15(金)
グンゼ(株)	12/20(水)
(株)比叡ゆば本舗 ゆば八	12/20(水)
(株)レイマック	12/20(水)
三和精機(株)	12/20(水)
守山市役所	12/20(水)

・企業が求める力として、体力、コミュニケーション、マネジメント、社会人としてマナーへの期待の声があった
・インターンについては日程や内容を柔軟に対応可能との声が多かった
・福祉施設、行政機関、大学等にも順次ヒアリング予定

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

9　広報スケジュール

新学科「みらい共創科」の設置を積極的に発信する

撮影の様子

学校案内イメージ（成安造形大学）

・2024年1月から模擬授業やフィールドワークの様子を撮影
・タブロイド紙と動画による広報を想定
・職員研修や企業・行政関係者とのワークショップの実施予定

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

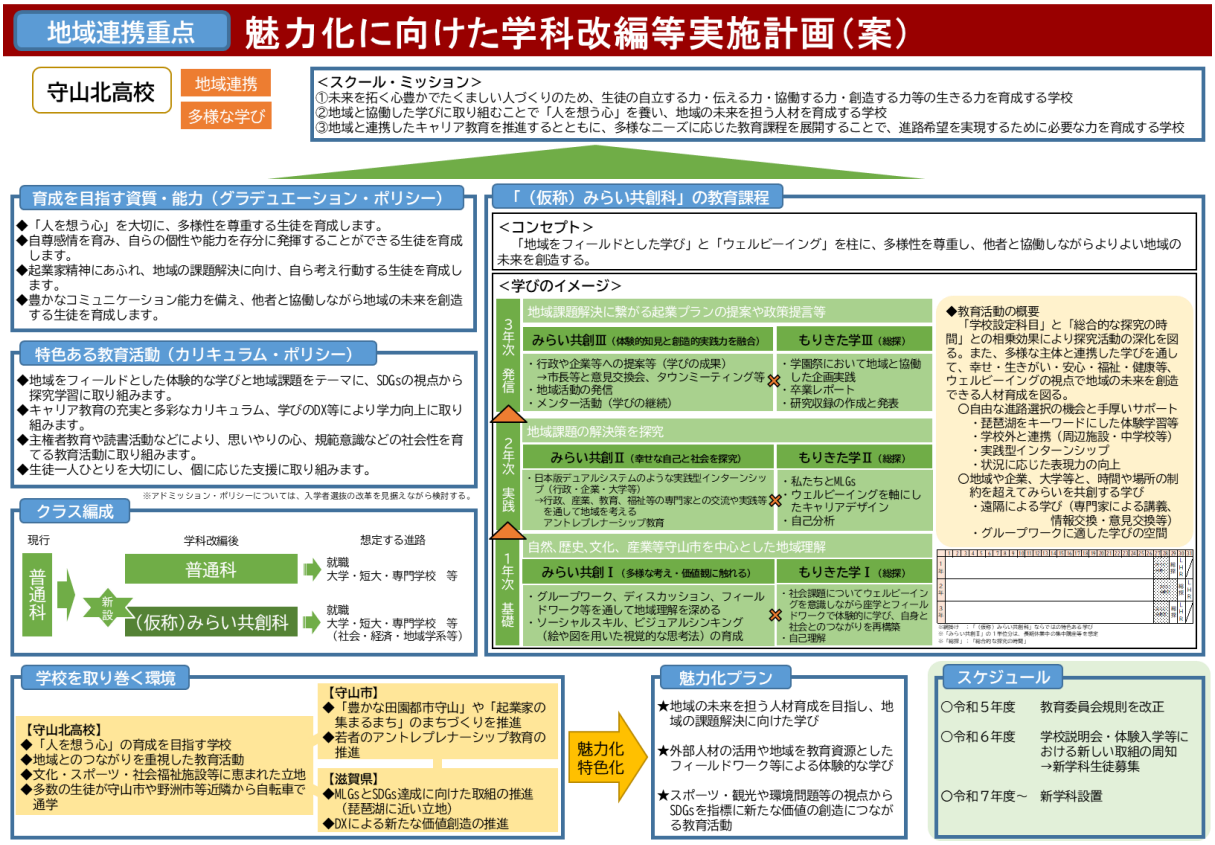
10　その他

① シラバスについてのご意見
② みらい共創科設置による学校のリニューアルについて
③ 実務的なコンソーシアムの設置について
④ 授業以外の学校の魅力化についてご意見
⑤ 広報等での協力について

■次回の運営指導委員会
・みらい共創科の進捗報告
・１・2年生の活動紹介を想定

Copyright©2023　滋賀県立守山北高等学校

▼滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画（案）



■第３回運営指導委員会

＜会議の日時等＞

開催日時　令和６年３月 14 日（木）15：20～16：30（守山市民ホール　会議室）

出 席 者【運営指導委員】

大野裕己委員　桶土井雅章委員　武井哲郎委員　根木山恒平委員

【守山北高校　みらい共創推進室】

松村友二校長　柳垣弘樹教頭　林敬治事務長　髙田法悟教諭　木下一教諭

上田隼也コーディネーター　田口真太郎コーディネーター

内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況について

（２）事業に関する指導助言等

＜協議要旨＞

○資料説明（髙田法悟教諭）

別紙参照

＜主な意見＞

○研究成果報告会における生徒発表を受けての御意見・御感想

・全体的にまとまっていて、とても分かりやすい印象だった。

・探究活動というと、生徒は「アンケート」という方法を思いつきやすいが、アンケート調査は設計が難しく、探究テーマがデリケートな問題であった場合等はアンケートの実施自体が難しい。アンケート調査よりも、今回の研究成果報告会でのようなインタビュー形式で進めていく方が、教員の負担軽減や生徒自身の理解を深めるために良いのではないか。

・発表用スライドのデザインの面では、文字数を減らす方向で考えるだけでなく、やり取りの中身を分厚く紹介する方法を取っても良いと思う。それを通して、発言の内容を深めたりできるのではないか。
・今回の研究成果報告会のように、生徒の感じたそのままを受け止められるような学校であれば、例えば中学校での偏差値競争の中で「自分はできない」と思い込んでいるような子たちが、地域とのつながりを持つ中で「ここにいていい」と思えるような学校になれるのではないか。
・キャリアデザインということでは、発表することで自分の考えが豊かに出てきたと思う。自分の学んだことを常に見返すことができるようにすれば、それまでの行動を通して次のステージに入っていきやすいと思う。
・人の話を正しく理解し、自分の考えを正しく発信するのは、大人でも難しい。そういった「対話力」を磨くのに、質疑応答は有効だと思う。対話の機会を増やすことで、生徒は成長できるのではないか。

○広報パンフレットの紹介・意見交流

（田口真太郎コーディネーターより、タブロイド紙のポイントなど説明）
・タブロイド紙の内容は、意図をはっきりされていてよいと思う。スクールライフの紙面については、主語を生徒にして、生徒目線の記事になってもよいのではないか。中学生がイメージをしやすい内容の方が、訴求力が高いように思う。
・「守山北高校が、どうやって私立に目が向いている子の選択肢に入るか？」ということもあるのではないか。公立はどうしても「古い」というイメージがつきがちなので、「MORIKITA BASE」のような教室をつくるのなら、イメージ図でもよいので載せておくと訴求力が上がると思う。
・「居場所感」というのを打ち出していくのもよいと思う。安心できるコミュニティというのは生徒にとって大切で、そういった「居場所」から自分の未来の姿を探していくステップになるのではないか。
・タブロイド紙の進路先の表示が、「自分がどんな進路も選択できる」というのが分かって良い。例えば、美術大学など専門大学への実績があれば、「いろんな進路を選べる」ということのアピールの一つとして掲載してもよいかもしれない。
・守山北高校は、地元から来ている子も多いと思うが、少し離れた立地ということもあり、今までの環境と離れたい、リセットしたいというような子も通っている。そのような背景の中で、「新しい自分を作っていける」ということを打ち出しても、生徒の成長のためにも良いのではないか。

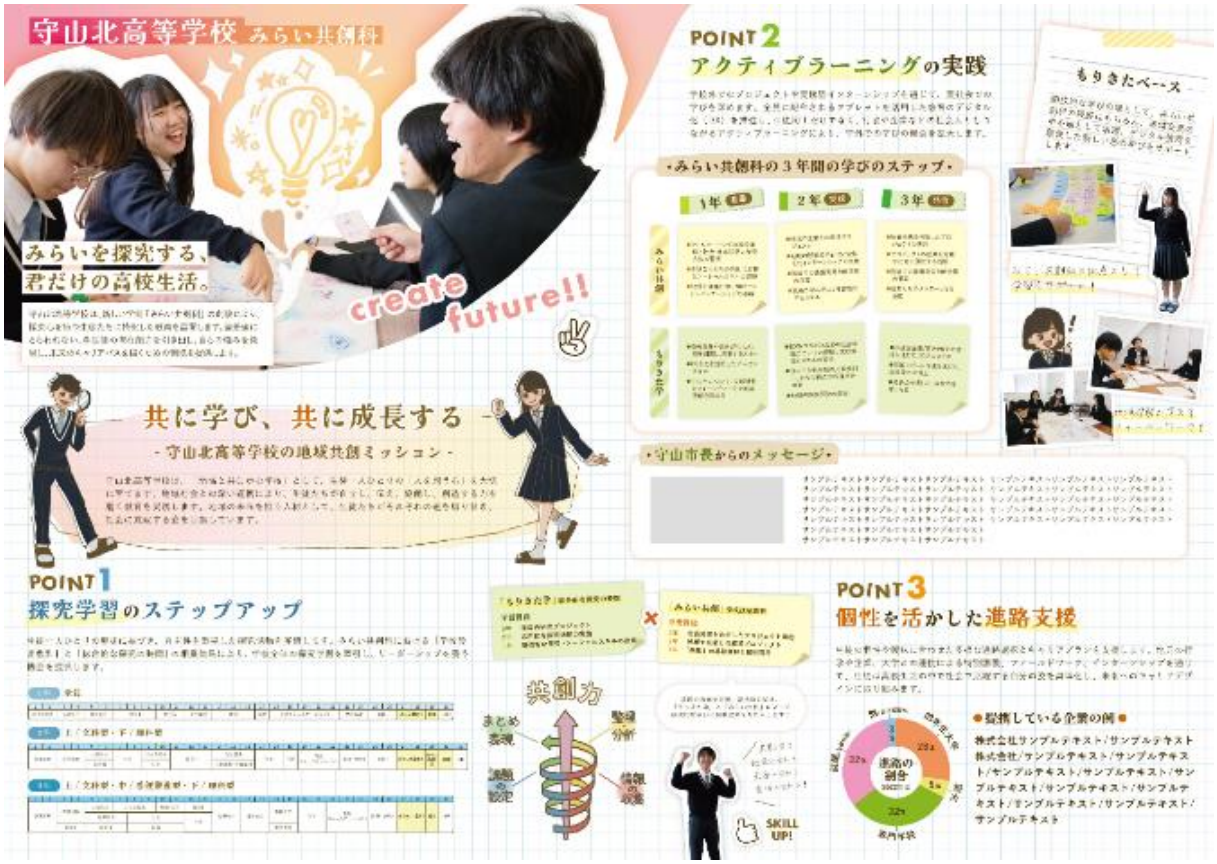
○来年度の動きについて

（来年度の先行授業実施およびコンソーシアムについて、髙田法悟教諭から説明）
・例えば、文化祭準備の中にコーディネーターに入ってもらったりするなどして、やり方を変えてみても良いのではないか。
・近年、通信制高校に進学する生徒が増えている中で、通信制高校との差別化、全日制や対面で何かすることの良さを出していくのもいいと思う。インターンシップ等でどういったことを生徒に刻めるかということも明示できた方が良いのではないか。
・文化祭で何か企画として実施したり、学校説明会のような場で生徒に発表してもらうなどしたりして、学校の「あったかさ」というものが伝わる広報を考えても良いのではないか。

＜会議資料＞

・タブロイド紙（案）
・令和６年度「もりきた学（総合的な探究の時間）」年間計画（案）
・滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画　【下記資料】

▼タブロイド紙（案）


守山北高等学校 みらい共創科
みらいを探究する、君だけの高校生活。
create future!!
共に学び、共に成長する
- 守山北高等学校の地域共創ミッション -
POINT 1
探究学習のステップアップ
共創力
まとめ表現
整理分析
課題設定
情報収集
SKILL UP!
POINT 2
アクティブラーニングの実践
みらい共創科の3年間の学びのステップ
1年
2年
3年
守山市長からのメッセージ
もりきたベース
POINT 3
個性を活かした進路支援
連携している企業の例
株式会社サンプルテキスト/サンプルテキスト株式会社/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト/サンプルテキスト

のぞき見! みらい共創
もりきたスクールライフ
ここではただの授業を超えた、もりきたの新しい魅力をご紹介します。
もりきたでの学びが、あなたの未来を切り開く第一歩になるはず!
DAVID LAYERでのフィールドワーク
守山市長とオンライン対談!?
守山市役所でのフィールドワーク
教員も積極的に学んでいます!
みんなで発想する話し合い
INFORMATION
滋賀県立守山北高等学校
〒524-0004 滋賀県守山市吉身町1263
077-585-0131
077-585-5584
moriki-h@pref.shiga.ed.jp
http://www.moriki-h.shiga-ec.ed.jp/
WEBサイトへの二次元コードはコチラ!
[アクセス]

▼令和６年度「もりきた学（総合的な探究の時間）」年間計画（案）

令和6年度　もりきた学Ⅰ（総合的な探究の時間）年間計画　１年（案）

日課	月	日（水）	学校行事	学習活動	活動内容	授業場所	主担当教員
	4	10					
1		17		探究ガイダンス①	ガイダンス・アイスブレイク	HR	
2		24		探究ガイダンス②	人を想う心について (校長講演) → 制服着こなしセミナー	体育館	
3	5	1		探究ガイダンス③	人を想う心について(レジュメ作り)	HR	
4		8		探究ガイダンス④	人を想う心について(グループ発表)	HR	
		15	中間考査				
		22	インターネット講演会				
5		29		デジタルリテラシー	PCを活用して資料を集める	HR	
	6	5	体育祭LHR				
		12	体育祭LHR				
6		19	講演会	ビジネスマナー	守山商工会議所？	体育館	
		26	期末テスト				
7	7	3	特別時間割	コクリエーション①	みらい共創モデル授業（ワークショップ中心）	HR	
8		10	特別時間割	コクリエーション②	みらい共創モデル授業（ワークショップ中心）	HR	
		17	三者面談				
9	9	4		SDGs講演会	中井健太 氏 (合同会社andstep代表社員)	体育館	
		11	文化祭LHR				
		18	文化祭LHR				
		25	文化祭LHR				
	10	2	文化祭LHR				
		9	中間テスト				
		16	文化祭LHR				
10		23		地域で学ぶ①	森中 高史 市長 ｏｒ守山市役所講演会	体育館	
11		30		地域で学ぶ②	地域課題に関するテーマを決める	HR	
	11	6	アクティブラーニング			HR	
12		13		地域で学ぶ③	グループ決め、10グループに分かれる	HR	
13		20		地域で学ぶ④	情報収集	HR	
		27	期末テスト				
14	12	4	特別時間割	地域で学ぶ⑤	情報収集	HR	
15		11	特別時間割	地域で学ぶ⑥	フィールドワーク		
		18					
16	1	8		地域で学ぶ⑦	スライド・原稿作り	HR	
17		15		地域で学ぶ⑧	スライド・原稿作り	HR	
18		22		地域で学ぶ⑨	スライド・原稿作り	HR	
19		29		地域で学ぶ⑩	スライド・原稿作り	HR	
	2	5					
20		12		地域で学ぶ⑪	発表会	HR	
21		19		地域で学ぶ⑫	ポートフォリオ作り・レポート作り	HR	
		26	学年末テスト				
22	3	5		地域で学ぶ⑬	ポートフォリオ・レポート作り	HR	
		12					
		19					

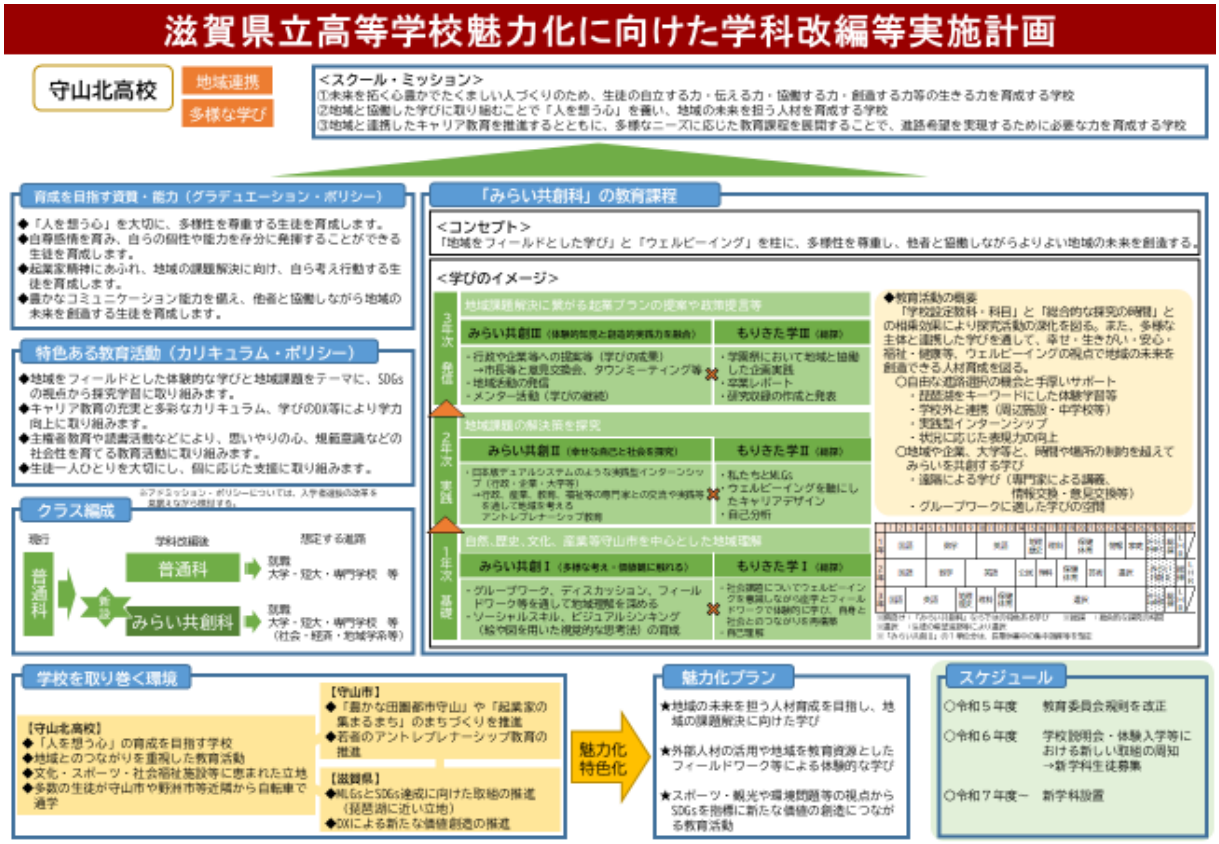
令和6年度　もりきた学Ⅱ（総合的な探究の時間）年間計画　２年（案）

日課	月	日（水）	学校行事	学習活動	活動内容	授業場所	主担当教員
1	4	10		文献調査①	オリエンテーション、テーマ決め	HR	
2		17		文献調査②	レジュメまとめ・書籍	HR	
3		24		文献調査③	レジュメまとめ・書籍	HR	
4	5	1		文献調査④	レジュメまとめ・インターネット情報収集	HR	
5		8		文献調査⑤	発表会	HR	
		15	中間考査				
		22	体育祭LHR				
		29	人権講演会				
	6	5	体育祭LHR				
		12	体育祭LHR				
6		19		文献調査⑥	沖縄県と滋賀県の違いについて	HR	
		26	期末テスト				
7	7	3	特別時間割	文献調査⑦	リモート取材の練習	HR	
8		10	特別時間割	文献調査⑧	リモート取材の本番	HR	
		17	三者面談		＊インターン先見学(就職希望者)、みらい共創モデル授業	放課後	
9	9	4		SDGs講演会	沖縄県SDGs担当者？	リモート	
		11	文化祭LHR				
		18	文化祭LHR				
		25	文化祭LHR				
	10	2	文化祭LHR				
		9	中間テスト				
		16	文化祭LHR				
		23	アクティブラーニング				
10		30		社会課題探究①	テーマを決める → キャリアデザインⅣ(ようこそ先輩)	HR	
	11	6	人権講演会				
11		13		社会課題探究②	ポスター作り	HR	
12		20		社会課題探究③	ポスター作り	HR	
		27	期末テスト				
13	12	4	特別時間割	社会課題探究④	ポスター作り	HR	
14		11	特別時間割	社会課題探究⑤	ポスター発表（相互評価）	体育館	
		18			＊修学旅行@沖縄県		
15	1	8		社会課題探究⑥	レポート作り①	HR	
16		15		社会課題探究⑦	レポート作り②	HR	
		22	ようこそ先輩				
17		29		社会課題探究⑧	レポート作り③	HR	
	2	5					
		12	進学説明会				
18		19		社会課題探究⑨	レポート作り④	HR	
		26	学年末テスト				
	3	5					
		12					
		19					

令和6年度　もりきた学Ⅲ（総合的な探究の時間）年間計画　３年（案）

日課	月	日（水）	学校行事	学習活動	活動内容	授業場所	主担当教員
1	4	10		志望理由書①	マイナビを活用	HR	
2		17		志望理由書②		HR	
3		24		志望理由書③		HR	
4	5	1		志望理由書④		HR	
5		8		志望理由書⑤	＊5/10(金)志望理由書締切	HR	
		15	中間考査				
6		22		卒レポ①	卒レポ先行研究（先輩の卒レポを読む）	HR	
7		29		卒レポ②	卒レポテーマ決め	HR	
8	6	5		卒レポ③	卒レポ作成	HR	
		12	体育祭LHR				
		19	人権講演会				
		26	期末テスト				
	7	3					
		10					
		17	三者面談		＊校外コンテストへの応募(希望者)、みらい共創モデル授業		
9	9	4		卒レポ④	卒レポ作成	HR	
10		11		卒レポ⑤	卒レポ作成	HR	
11		18		卒レポ⑥	卒レポ作成	HR	
12		25		卒レポ⑦	卒レポ作成	HR	
	10	2					
		9	中間テスト				
		16	文化祭LHR				
13		23		卒レポ⑧	卒レポ作成	HR	
14		30		卒レポ⑨	卒レポ作成	HR	
15	11	6		卒レポ⑩	卒レポ作成	HR	
16		13		卒レポ⑪	卒レポ作成	HR	
17		20		卒レポ⑫	卒レポ作成	HR	
		27	期末テスト				
18	12	4	特別時間割	卒レポ⑬	卒レポワードまとめ	HR	
19		11	特別時間割	卒レポ⑭	卒レポワードまとめ	HR	
		18					
	1	8					
		15					
		22					
		29					
	2	5					
		12					
		19					
		26					
	3	5					
		12					
		19					

▼滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画



▼運営指導委員会の様子

３－２　教科主任会議

開催日時　令和５年９月 12 日（火）
議　　題　新学科カリキュラム検討について

＜主な意見＞

○７限の導入について

・対外的な PR になるが、教職員や生徒の負担が大きくなる。
・担当者の配置が難しい。
・全学年６限に統一するべきではないか。部活動の時間確保が困難になる。導入するなら新学科のみでよいのではないか。

〇新学科のカリキュラムたたき台について

・１クラスに就職希望者と進学希望者が混在すると指導が難しくないか。
・文理分けのカリキュラムは可能なのか。
・卒業後の進路イメージを想定してカリキュラムを編成すべき。
・主要科目がバランスよく配置されることが望ましい。
・進学に対応した科目を入れるべきではないか。
・３年理系で数学の演習時間が足りないのではないか。
・１年次で「芸術Ⅰ」はほしい。地域への発信等（音楽会等）にも活用できる。
・「家庭総合」は１・２年次で実施したい。福祉や消費者教育等の学習内容は、総探や学校設定教科「みらい共創」との連携が可能。２年次の「公共」とも連携ができるのではないか。

〇その他

・市内中学校へのPRは必須。市内の中学生に「みらい共創科は特進クラスです」とPRする必要があるのではないか。
・大学等への進学がイメージできる広報が必要ではないか。

３－３　拡大推進室会議

■第１回拡大推進室会議

＜会議の日時等＞

開催日時　令和５年９月19日（火）
出 席 者　コーディネーター（CN）：上田隼也氏
　　田口真太郎氏
　　推進室　：柳垣弘樹教頭　富高靖二教諭　木下一教諭　髙田法悟教諭
　　進路指導課　：宮原巧教諭
　　教育環境課　：北居雅教諭
　　生徒指導課　：森響樹教諭
　　１学年　：川瀬陽日教諭
　　２学年　：中村聡一郎教諭
　　３学年　：塩見祐生教諭

＜会議の概要＞

〇カリキュラムについて

学校設定教科（みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

◇教務課
・２時間連続授業のメリットは大きい。ただ、講演会等の行事はどう配置するか。
・外部講師による評価は難しいのではないか。
・新学科は外部（大学／市役所等）と連携できることを売りにする。
・インターンシップ先に保育園等も入れてはどうか。
・授業は、誰が担当するのか（担当者は教科の持ち時間の軽減が必要）。
※経験のある人を担任にするべき。

◇生徒指導課
・授業の内容に関する詳細な打ち合わせが必要。
・よく分かっている係の者が新１年の担任になる方がよい。

◇教育環境課
・概ね賛成。Ⅰ⇒Ⅱ⇒Ⅲの流れでよい。

◇進路指導課
・地域課題解決や地域振興等、フィールドワーク型の学習を展開する。
※バイキングレストラン「おうみんち」や地球市民の森、竹林等と連携
◇３年学年団
・総合型選抜対策（パワポ作成やプレゼン練習）も視野に入れて、そのための資料集めを１・２年次で行う。
※ネタがなくて総合型選抜の受験をあきらめる生徒がいる。

総合的な探究の時間（もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）
◇教務課
・総探と「みらい共創」の学習内容で、似通うところをどのように差別化を図るか。
・これらの授業は、誰がもつのか。
・３年に限らず、１・２年次でも文化祭で地域と関われないか。
◇生徒指導課
・新学科は普通教科の授業数が少なくなるが、大学進学に対応できるのか。
◇教育環境課
・概ね賛成。
◇進路指導課
・調べ学習やインタビュー等の探究の手法から成果発信までの実践的態度を身に付ける。
※メールの送り方、電話のかけ方、手紙の書き方等のスキル
◇３年学年団
・卒業レポートに関する探究を、１・２年次のうちから始める。
※早い段階から調査やアンケート等の手法を学び、３年次の卒業レポートにつなげる。
◇２年学年団
・学習内容をどうするか。また、誰が担当するのか。

〇設備関連
◇教務課
・探究学習教室は絶対に必要。リアルな等身大とリモートできるのはメリットが大きい。大きな PR にもなる。
・PTA や地域の文化講座等も可能かどうか。
・広さを確保できるのは大会議室か。
◇教育環境課
・使い方次第だが、マルチに対応できそうなのは大会議室ではないか。
◇進路指導課
・地域の方のアクセスを考えると、フォーラムハウスを活用するのが望ましい。

〇広報戦略
◇教務課
・市内中学校との連携が必須。PR は中学生だけでなく、中学校の先生にも行うべき。
◇生徒指導課
・具体的な学習内容が見えないと魅力を感じない。
・インターンシップの連携先を学校案内パンフレットに載せるのは早すぎないか。
・HP の更新も含めて、地道な広報活動が必要。

◇教育環境課
・生徒や保護者だけでなく、地域や企業向けの広報も大事ではないか。
◇進路指導課
・守山市の広報誌や新聞等、紙メディアの影響は大きい。地域に土着性のある広報紙等は、アナログで信頼性がある。守山駅周辺にポスター展示しても効果はある。
◇３年学年団
・中学校に説明訪問する（生徒が訪問してもよい）。生徒の資料作成・研究発表スキル向上につながる。
・SNS の活用
◇２年学年団
・生徒募集の際に、指定校や就職先を提示する。
◇１年学年団
・中学生は何を求めているかを把握して広報する。
◇CN より
・新学科設置だけでは、広報としては弱い。守山北高校全体の刷新感は必要。
・新学科設置に関する守山市長との対談記事も広報になる。
・守山北高校は、過疎地で生徒充足に課題がある学校ではない。既存の広報戦略の見直しだけでも、効果は期待できる。

■第２回拡大推進室会議
＜会議の日時等＞

開催日時	令和５年 11 月 22 日（水）	
出 席 者	コーディネーター（CN）	：上田隼也氏
		田口真太郎氏
	推進室	：富高靖二教諭　髙田法悟教諭
	進路指導課	：坂本典子教諭
	教育環境課	：北居雅教諭
	生徒指導課	：仲間万佑子教諭
	１学年	：川瀬陽日教諭
	２学年	：林拓矢教諭
	３学年	：塩見祐生教諭

＜会議の概要＞
〇カリキュラムについて
学校設定教科（みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）
◇教育環境課
・合同講評会の時期、規模はどうか。３月には入試、成績処理等で指導が困難ではないか。
◇生徒指導課
・７限授業にして、生徒が来たいと思えるかどうか。
・内容をシンプルにして、６限までまとめてはどうか。
・成果発表会は、普通科生徒も参加するのか。
◇３年学年団
・学年を越えた活動があるとよい。
※２年生が１年生に指導、中間報告会に参加させる等。

総合的な探究の時間（もりきた学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

◇教務課

・修学旅行は年によって場所や時期が異なる可能性があるが、それには対応できるか。

・情報科の授業との連携は可能ではないか。

・３年次の卒業レポートについては、１・２年で学んだことをテーマにできるとよい。そのために、ポートフォリオをもっと整理・活用してはどうか。

◇進路指導課

・探究学習に際しては、電話のかけ方、手紙・メールの書き方等の指導が必要になる。

◇生徒指導課

・口頭発表の機会が多いのではないか。１回の発表に向けて活動の方がいいのではないか。

◇２年学年団

・３年次に、社会に出るためのマナーを学ぶような内容がほしい。

・担任／副担任の TT 体制は、担任の負担が大きい。

・新学科の生徒にとっては、３年次の学びの内容が薄いように思える。

〇その他、御意見等

◇教育環境課

・学びの全体マップが必要。

◇生徒指導課

・「みらい共創」と「もりきた学」の両立は厳しい。もっとシンプルにスタートしてはどうか。

・募集定員は埋まるのか。

◇２年学年団

・教師用の指導マニュアルのようなものが必要ではないか。また教師用の事前研修も必要ではないか。

〇ＣＮより

今回のシラバスは、「もりきた学（総探）」を軸にしている。全生徒が「もりきた学」を学び、みらい共創科の生徒は、地域とより深く連携して深めていくイメージを持っている（探究の特化型クラス）。だから「もりきた学」では、探究学習における PDCA サイクル（課題設定・情報収集・整理分析・発表フィードバック）を２周（１周でないのがポイント）することで、探究学習のスキルを身に付け向上させるように考えた。内容も案ということで、少し盛りだくさんになっている。生徒の現状（模擬授業）や先生方の御意見も参考にして修正を図りたい。

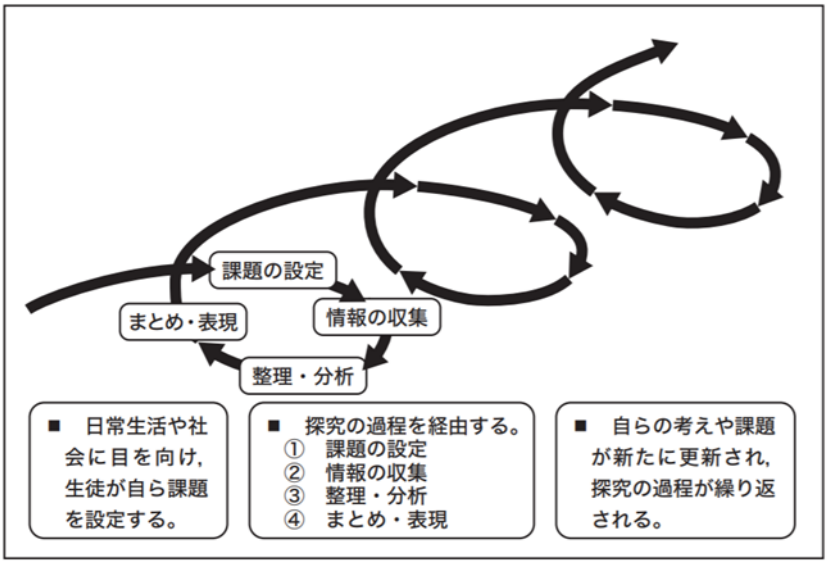
普通科との差別化については、守北ではリアルが学べる部分。発表やグループワーク、レポート等を通じて自己肯定感を高める。ここは他の教科ではできない、「総合的な探究の時間」で確保できる。そして、進路先の選択肢は多く、自由に選択できる。

「みらい共創」については、インターン実習がメインになる。就職対応というよりは、全員が現場を経験してから、進学なり就職なり選択できるのは大きいと考えている。３年生については、受験等が早く終わった生徒に対して資格取得等も考えられる。

また、生徒や保護者、連携する企業等向けにアンケートを実施し、学校側に求めていることを整理し、学習内容についても優先度をつけてシンプルな形で修正したい。

広報デザインについては、学校案内に差し込むパンフレットのようなものと、各中学校に掲示できそうなポスターを作成予定。12 月に生徒会の生徒にモデルになってもらって写真撮影を行う。案ができたら、学校内にもプレゼンできるようにしたい。

探究における生徒の学習の姿



３－４　学校運営協議会

■令和５年 10 月 31 日（火）実施

出 席 者　【外部委員】
服部宣彦氏　阿部百合子氏　田中義規氏　荒川富也氏　津田徹氏
根木山恒平氏
【学校関係者】
松村友二校長　柳垣弘樹教頭　林敬冶事務長　富高靖二教諭　宮原巧教諭
髙田法悟教諭
【県教育委員会】
石田由美社会教育主事

内　　容　文部科学省の指定事業について

＜主な意見＞

・大まかな内容は進んでいてよかった。あとは広報戦略が課題。どれだけ中学生にインパクトを与えられるか（保護者には進路保障、出口の PR が不可欠。保護者目線は卒業後にある。）「未来デザインプログラム」的なカッコイイ名称は、中学生にインパクトがある。
・PR する際、「探究の特化クラス」「総合的な学習の時間」「学校設定教科」の部分は、看板の色が違うだけで内容は同じではないか。
・中学校の校長にも話を聞いてみてはどうか（学校に求めること等）。
・普通科と新学科の差別化をどう図れるか。
・普通科でありながら、大企業の事業所に就職できることはもっと PR できる。
・小中学校とは違う「もりきたベース」のような環境は、確実に魅力になる。
・インターン先の連携機関を学校側でおさえる必要がある。どれだけ学校とインターン先の企業等が信頼関係を築けるか。これが地域密着型だとベストだが・・・
・「守山北高校なら様々な体験ができて、こんな力が身に付く」ということが大事ではないか。
・新学科の１期生が３年間でどう成長するかを見据えて計画し、地域の教材もぜひ使う。
・探究学習は「課題設定」が大事で難しい。中学校までは先生がある程度レールを敷いていたが、新学科ではどうか。生徒たちはネット等で情報を収集する能力はすごく高い。

■令和６年２月15日（木）実施

出 席 者　【外部委員】
服部宣彦氏　阿部百合子氏　田中義規氏　荒川富也氏　津田徹氏　髙田利規氏
【学校関係者】
松村友二校長　柳垣弘樹教頭　林敬治事務長　富高靖二教諭　宮原巧教諭
髙田法悟教諭
【県教育委員会】
石田由美社会教育主事

内　　容　文部科学省の指定事業について

＜主な意見＞

・広報が大事。SNS での発信が大切ではないか。インスタグラムは求心性ある。生徒が面白そうと感じるように広報する必要がある。
・「もりきた学」のような地域連携の特色をしっかり打ち出していくことが重要。
・新しいことを詰め込みすぎると、教員の負担が大きくなりすぎる。今あるものを見える化していくことも必要ではないか。
・卒業後の進路は、進学から就職まで自由に選択できることをアピールしてはどうか。
・新学科のカリキュラムは、普通科のそれと比べると普通教科の時間数が少ない。そこをどう補うか。
・新学科は、３年間クラス替えがない。人間関係でつまずかないように、子どもたちのフォローをしっかりする必要がある。
・自分で課題を見つけて研究し、様々な体験をしていくことが、本来の学校に求められている学び。

３－５　先進校視察

■京都市立開建高等学校　令和５年７月19日（水）

出席者　【開建高等学校】　中村和夫副校長
【守山北高等学校】　富高靖二教諭　髙田法悟教諭

〇概要

＜Ｒ５年４月開校　京都市立開建高校ルミノベーション科（１学年全体）＞
・80 名を１クラス（担任３人制）とし、３クラス（240 名）でクラス展開している。
・コンセプトは、生徒主体の学校「やってみたいをやってみる」
・L-pod という教室（学びの空間）を設置している。
※可動式の机、教室の仕切り壁は可動式ホワイトボード
・地域に開かれた学校を目指し、食堂や図書館を開放している。
※昇降口とは別に地域玄関を設置

〇カリキュラム

・「協創（総合的な探究の時間）」を週２時間（３学年とも）実施している。
・学校設定教科「ルミノベーション」を週２時間（１学年のみ）実施している。
・「協創」は木曜６・７限、「ルミノベーション」は金曜５・６限
※高校生では、なかなか興味関心、自由な発想は難しい。たくさんのホンモノ体験をさせることで、そこを引き出すようにしている。学びを校内で留めない。
・成果発表等は外部評価を必ずもらうようにしている。

＜１年生：協創Ⅰ（２単位）＞
・１年次の９月から、市内の企業・行政・中学校等にインタビュー（取材）を実施している。
※インタビューしたいところの希望をとり、１グループ５～７名で実施している。
・企業や行政が取り組んでいる「社会をよくする取組、企業の理念」を実体験する。
※そのための事前・事後学習は重要。
※企業にとっても、新入社員の研修の一環として快く受け入れてくれる。
・240 名を振り分けるために、行政機関や中学校等にもお願いしている。
＜１年生：ルミノベーション（２単位）＞
・探究のシンキングスキルを学ぶ。
・コアスキルカードを活用する（学校独自のシンキングツール）。
・物事の見方を学び、協創力の向上を図る。
＜２年生：協創Ⅱ（２単位）＞
・テーマ別にユニットを組んで探究学習を行う。
※生徒たちで地域の課題を設定し、探究学習に取り組む。
※学校側が制限をかけすぎず、生徒に自由に取り組ませることを心がける。
・研修旅行を実施している。
※探究学習の実践（フィールドワーク）で、修学旅行に代わるものとして、生徒たちが企画し実行する。
＜３年生：協創Ⅲ（２単位）＞
・２年間の総探の「まとめ」を行う（大学志望の生徒）か、２年生までの総探の続きを個人で行う（就職や専門学校志望の生徒）。

〇学校全体の取組
・未来共創会議の開催
※生徒と教員の間の会議（校則について等）
・スポーツフェスタの企画運営（球技大会）
・NEW HORIZON DAY
※通常の放課後活動　（例）生徒が企画した活動、生涯スポーツ、ボランティア活動等
・防災ボランティアリーダー（塔南高校時代から続く伝統）
※生徒会が中心に、地域の防災等について探究する。
※地域と連携をとりながら、様々なイベントの企画運営に携わる。
・徹底した授業改善（対話型授業の展開）
※一斉講義型授業の改善→思わず考えてしまう授業、問いの設定

〇学校内の組織体制
・校務分掌「コ・クリエイトセンター」を設置（教員７名配置）
※業務内容：総探の開発・企画・運営、校内の企画・広報担当
・OJT の活用（チーム力）
※若い世代の交流（意見の吸い上げ）、中堅世代以上の改革（授業改善の旗振り役）

〇その他
・学校全体の取組にするには
①総探の充実（学校独自の色を一番出しやすい）。学校全体の取組になる。
②学年間の連携
③探究学習で生徒と問答できる教員の育成

・守山北高校独自の生徒観とは？
→素直でルールを守ることができる。指示を聞いて動くことができる。
→教師が全て管理するのでなく、生徒の持つパワーを信じて失敗させてあげる。

〇新学科への反映

・「総合的な探究の時間」に関する改革の必要性

本校のカリキュラムで検討している「フィールドワーク」等の体験型学習を積極的に展開し、行政や企業等とも連携したプログラムを実施している。またシンキングスキルを学ぶ手段としてコアスキルカードを独自に開発しているため、「総合的な探究の時間」が単発の取組にならず、普通教科においても探究学習のスキルが生かされている仕組みづくりがなされている。このように生徒が学び方を学ぶことができる「総合的な探究の時間」になっている点を本校でのカリキュラム検討に活用したい。また、各授業が継続的に再現できるよう、生徒が主体的に取り組んでいることも特色であった。

・広報の在り方

開建高校が作成しているパンフレットでは、実際に授業に関わっている団体・企業等や生徒の活動の様子が掲載されており、学校での学びが視覚的に中学生や地域に明示されていた。本校でもインターンシップやフィールドワーク等で連携していただける団体や企業等との密な連携を進められるように努めていきたい。

■大阪府立布施北高等学校　令和５年８月 17 日（木）

出席者　【布施北高等学校】　村田知子校長　川本祥也先生（主幹教諭）
　　【守山北高等学校】　髙田法悟教諭

〇概要

＜平成 16～18 年度に文部科学省の研究指定＞
・「専門高校等における日本版デュアルシステム」推進事業
※全国で普通科初のデュアルシステム導入校
・３年間の研究指定後、「コース（１学級）」として存続
・平成 29 年度から大阪府のエンパワメントスクールの指定校
※デュアル総合学科の設置（全学年）
※募集定員 70 名（２学級）を３学級展開

＜デュアルシステム導入の背景＞
・定員未充足が深刻な状況
・文部科学省の指定事業（H16）

＜デュアルシステム導入初期＞
・目的：社会人基礎力の向上を目指す。
・当初は、インターンシップ先を紹介してもらうため教員が商工会に足を運び続けてきた。現在は、実習を受け入れてくれる協力事業所数は 200 以上にのぼる。

〇カリキュラム

・WT（wake-up-time）：毎朝 10 分間の朝学習
・モジュール授業　　：国数英に関する習熟度別授業（毎日 30 分間）

〇学校設定教科

＜１年次　４単位＞
・「産業社会と人間（２単位）」

※デュアル実習の事前学習（２年次のコース選択）とインターンシップ（全員が９月に２日間実施）
・「総合的な探究の時間（２単位）」
※テーマ：自分／他者／社会を知る
コミュニケーション、自己分析、グループワーク、プレゼン等の基礎力を育成

＜２年次　８単位＞
・「デュアル実習（８単位）」or「選択科目（４単位）＋総探（４単位）」の選択制
※Ａコース：「デュアル実習（実習６単位＋座学２単位）」
Ｂコース：「選択科目（４単位）」＋「総探（４単位）」
選択科目：３学期の資格取得に向けての学習
総探　　：修学旅行のプレゼン、職業研究、大学研究等

＜３年次　８単位＞
・「デュアル実習（８単位）」or「選択科目（４単位）＋総探（４単位）」の選択制
※Ａコース：「デュアル実習（実習６単位＋座学２単位）」
Ｂコース：「選択科目（４単位）」＋「総探（４単位）」
選択科目：３学期の資格取得に向けての学習
総探　　：テーマ別研究（例：学校改善計画を校長に提案等）

＜カリキュラムの特徴＞
・１年次（産社）に、２年次以降のコース（Ａ・Ｂ）を選択する。
・エンパワメントとは別の共通の選択科目で進学対応の授業を実施している。

〇デュアルシステム

＜１年次＞
・５月に担任と面談する。
※４分野（①製造　②販売・サービス　③保育・教育　④介護・福祉）から希望をとる。
・６月以降、生徒の実習先を決定し、９月にインターンシップを２日間実施する。
・実習日は教員が巡回する。

＜２年次＞　デュアル実習（８単位）選択者→デュアル実習（６単位）＋デュアル基礎（２単位）
・デュアル実習（６単位）について
※２年生は火曜日に、３年生は水曜日に１日実習を行う。
※毎週ではなく、月２回程度で年間 18 回（２年次は前期９回、後期９回）実施している。
※実習のない日は、キャリア教育を行う。
（例）発表、グループワーク、講演会等
［実習の流れ］
①実習先の希望調査→実習先決定
②学校／企業／保護者の協定書作成
③生徒自身がアポとり
④生徒が放課後に事前打ち合わせ＆オリエンテーション
⑤決定通知作成
⑥実習スタート
・デュアル基礎（２単位）について
※デュアル実習の事前・事後学習、振り返り、個別面談
※目標設定や実習日誌の書き方指導

＜実習の評価方法（成績）＞
・半分以上が取り組み点（出欠、取り組みの様子）

※授業担当者は実習先を巡回し、生徒の目標達成状況等を確認する。

〇学校内の組織体制

・指導体制：エンパワメントタイムは、教員２名のＴＴ体制
・分掌　　：教務課とは別に総合学科部（10 名）を設置
　※実習関係の割り振り、実習先との連携（実習依頼）、産社・総探等のエンパワメントタイムの教材開発

〇まとめ（デュアルシステムの成果と課題）

＜成果＞
・実習を行うことで生徒の自己肯定感、有用感が大幅に上がっている。
　※卒業アンケートでは、８割以上が肯定的な意見
・進学就職試験等での PR 素材になる。
・地域に学校のことを知ってもらえる。
・離職率の低下（様々な実体験が生きている）
・指定校求人の増加（企業にとっても社員研修の一環になっている）

＜課題＞
・教員の負担は大きい。
　→最初は、モデル授業等で少しずつスタートさせたらどうか。
・校内の組織体制の見直しが必要ではないか。

〇新学科への反映

・インターンシップの実施方法
　インターンシップの実施方法について、事前の個別面談やガイダンス、実習日誌、その振り返り等について学び、デュアルシステムに関する情報を多く収集できた。さらに、実習部分だけでなく、学校での座学での学びや選択科目の展開についても、本校における実践型インターンシップの検討に活用していきたい。
・地域連携
　地域との連携を進めるにあたって、教員が事業所に直接足を運ぶなど、直接のコミュニケーションを重点化している点が印象的だった。本校においても、担当教員だけでなく、組織として地域連携を進められる体制づくりを検討する必要がある。

■愛知県立惟信高等学校　令和５年 10 月 13 日（金）

出席者　【惟信高等学校】　岩堀昌史校長　図書探究部（中城牧彦先生　加藤史記先生）
　　ＣＮ桝本郁二氏
　　【守山北高等学校】　髙田法悟教諭

〇概要

＜Ｒ５年４月　文科省普通科改革支援事業採択　Ｒ７年度 地域社会学科設置予定＞
・普通科７クラス→Ｒ７年　地域社会学科　グローカル探究科
　※現在、１クラスにするか、７クラスにするか検討中

＜コーディネーターに関して＞
・名古屋西高校、五条高校で地域探究を担当していた元教員
・仕組みをしっかり作れば、担当者が変わっても継続できる。
・コーディネーターは外部から学校内部をみてもらえるよい機会

〇カリキュラム

・普通科も含めて「総合的な探究の時間」を強化する。
・新学科は、学校設定教科でさらに探究学習を深める。
・地域連携を進めるというよりは、学問的な探究学習を中心に検討している。
・近隣中学校には、あくまで普通科の延長線にあることを周知している。

〇現在の取組の２本柱

①「総合的な探究の時間」を中心とした「人間力」の育成
②全教員が行う授業改善による「学力」の育成

＜「総合的な探究の時間」に関して＞

・今年度の２学期から試行的にスタートした。来年度は全面実施の予定。
　※新学科１クラスと他のクラスとの融合が課題
・目的は、地域連携よりも学びの再発見としている。
　※最初はコーディネーターが中心となって教材を考え、徐々に教員に拡大する。
・「総合的な探究の時間」は自由
　※教科書がない探究学習に、どうやって教員が挑戦できるか。
・近年の課題
　※教員は、仕事が増えることに対する違和感が大きい。
・教員が一丸となるためには、教員間でどれだけ目的や意義を共有できるかにかかっている。
・学習内容（例）
　１年次：「地元の宝さがし」
　　・地域にある教材の掘り起こし、フィールドワークによる実地調査
　２年次：「私の主張（自分たちが社会を変えていくために）」
　　・社会をよりよくするための提言（個人の主張からチームの主張へ）
　　・夏休み中に各班でフィールドワーク。自分たちで探してアポをとる。その際、教員の関わりはゼロ。
　　・専門家を訪問サポーターとして位置付けて助言やアドバイスをもらう。

〇組織体制

令和５年５月に採択後、分掌構成を見直した。

・「図書部」を「図書探究部」に変更
　※以前は、「総合的な探究の時間」は各学年主任が各自で教材開発していた。昨年から図書部に探究係３名を追加。実質、４名＋CN で総探を開発している。
・今年度は、新学科関連のチームを分掌とは別に組織（５名）

〇PR に関して

・体験入学を活用し、各教科でのキャッチコピー等を紙媒体で配付した。

〇新学科への反映

・地域と連携したプログラムの先進事例

　教員側の大きな負担となる外部との連携だが、惟信高校ではアポ取りから当日のフィールドワークまでがほとんど生徒の手によって運営されていた。これまでの惟信高校の取組に対する地域の理解が根底にあるのは大前提だと思うが、「社会を信じる」という信念もその教育活動に反映されていた。本校でも失敗を恐れない集団づくり（生徒も教員も）と、地道な地域連携を継続させていきたい。

・教員集団の意識向上

教員集団の意識向上には、やはり生徒に身に付けさせる力について、生徒にも教員にもしっかりと共有することが大切だと感じた。職員研修やガイダンスの機会を持つだけでなく、生徒の振り返りやアンケート、生徒の活躍した様子を毎月の職員会議ですばやく共有を図っていきたい。

■愛知県立美和高等学校　令和５年 12 月 13 日（水）

出席者　【美和高等学校】　伊奈和彦校長
中田加代子先生（総務部新学科プロジェクトリーダー）
【守山北高等学校】　髙田法悟教諭

〇概要

＜Ｒ５年４月　文科省普通科改革支援事業採択　Ｒ７年度 地域社会学科設置予定＞

・普通科５クラス→Ｒ７年　地域社会学科　地域探究科設置
※５クラスすべてを新学科にする予定
・９割が大学進学
※現在、週２日は７限授業を実施（新学科も週２日は７限授業を実施予定）

〇特色

・令和３年から「美和高マインド」をスタート（地域のボランティアセンターとしての機能）
※地域活動部の生徒を中心に、地域からの様々な要望に応えていく。
（例）・市や市民活動団体、青年会議所主催のイベントに参加
※自分たちの活動 PR、子どもが遊べるブース作成
・高校生のボランティアコンテストに参加
・高大連携で、大学のゼミに参加
※アンケートの取り方・分析の手法を学び、イベントで実践
・地域の清掃ボランティアに参加
※全部活動が運営に携わる（掃除場所の割当や道具等）。

〇カリキュラム関連

・「総合的な探究の時間」３単位＋「学校設定教科」３単位
※普段の時間割では分散するが、学びの内容によっては丸一日地域探究を実施

〇今後

・来年度は、普通科の「総合的な探究の時間」1 単位だけで試行版で実施する。
・令和８年度から地域型中高一貫校に指定される。
※あま市、大治町の６中学校と連携し、連携型選抜入試の導入予定。
・インターンシップを導入する。
※方法：商工会議所からインターン受け入れ企業一覧リストを作成してもらう。
リストの中から生徒が選んで、生徒自身がアポとりからお礼状まで取り組む。

〇校内組織

・今年、新学科のプロジェクトチーム６名を編成（各分掌から１名ずつ）
※プロジェクトリーダーは総務部と兼務している（負担大）。
・来年は、新学科専用の分掌を設置する予定（新学科部２～３名）。
役割：学校設定教科と「総合的な探究の時間」の教材開発や外部連携、広報を担当

・コーディネーター探しにかなり苦労した。
　※現在のコーディネーターは金曜午後のみ。地域のパイプが強いので助かる。

〇広報

・連携型中高一貫により、高校生が中学校に広報に行くことで大きな宣伝になる。
・いかに総合型選抜につなげるかを PR する。大学では、よりプレゼン等の力が必要になる。
・入学後の出口を明確にする。大学とも連携して出口を保障する。
・市の広報誌に生徒の活動を載せてもらう。
　※地域探究部のボランティア活動等で市民の目につく機会が多い。

〇新学科への反映

・地域と連携したプログラムの先進事例
　美和高校では、新学科の推進以前から地域と協働した教育活動がなされていたが、今回の事業をきっかけに、さらにその連携が深まっている印象を受けた。特に「地域活動部」があることで、生徒が地元自治会のイベントに参加したり、地域の清掃ボランティアを企画・運営したりと、地域のニーズに応じたプログラムが運営されていた。本校においても、地域からの要望やニーズを受け取り、それらを教育活動に生かせるような仕組みづくりを図っていきたい。

３－６　新学科設立に向けた先行実施授業

（１）　出前授業

【日　　時】　令和５年６月 21 日（水）５・６限
【教　　科】　総合的な探究の時間（２年）
【学習内容】　他者になりきる
【目　　標】　▶ 自己の在り方や生き方を問う（実践し、行動に）。
　　▶ 社会課題に対して、主体的・協働的に学び、課題解決能力を向上させる。
　　▶ フィールドワークや発表を通じて、社会的マナーやプレゼンテーションスキルを向上させる。

【活動概要】
　生徒が各カテゴリー（高齢者、障がい者、性的少数者、保育士、妊婦、共働き家庭、農家、観光業者、プロスポーツ選手、介護士、災害弱者）から、その立場の人たちが抱える違和感や課題についてグループで探究した。特に、その立場の人たちがみている景色や困りごとについて、書籍やインターネット、これまでの自分たちの経験から情報を収集し、予想（仮説）を設定した。その後、外部からカテゴリーごとの専門家に出前授業をしていただき、インタビュー（取材）を実施し、自分たちの設定した予想について考察を深めることができた。さらに、事前に調査したことや取材をして学んだことを整理し、その立場の人が抱える違和感や課題に対する解決策を「アイデア」として発案し、それらをポスターにまとめて発表をした。この取組については、成果発表会として公開授業を行った。

滋賀県庁の職員による出前授業の様子

福祉施設の職員による出前授業の様子

保育士による出前授業の様子

地元農家による出前授業の様子

【生徒の主な感想（抜粋）】

〇今回教わった「自助」という自分の身を守る対策をしたり、災害弱者を地域で助けたりする「共助」など、普段から防災に関して意識を持ちたいし、準備しておきたい。また、モバイルバッテリーは、携帯電話だけでなく他の物の充電にも使えるということが分かったので、私もモバイルバッテリーを持ち歩いておこうと思った。（３組　テーマ「災害弱者」）

〇守山市は良好な自然があり、田園都市であることが分かった。今回の話を聞いて、守山市に住んでいるけれど、イベントや観光資源もたくさんあり、守山を元気にするためには、観光スポットなどを全国に広めるためのアピールは大切だと感じた。しかし、地域を盛り上げようとすると、メリットだけでなくデメリットもあり、両立は難しいと感じたが、これからの探究でメリットとデメリットをどのように解決できるか考えたい。
（５組　テーマ「観光業者」）

〇授業前は、それなりに調べたつもりだったけど、授業後は、まだまだ知らないことが多いことに気が付いた。また、他の班の質問に対する答えも印象に残っていて、「守山市は障がい者の人にとって過ごしやすい町ですか？」という質問に対して、「あなたはどう思いますか？」と返されていました。確かに、自分はどういう目でみているのだろうと考えたし、見直す機会になった。（４組　テーマ「障がい者」）

〇自分たちが思っていたよりも人手不足はあまりないということを知って、インターネットの情報は信じられないと思った。スマート農業やＡＩの話を聞いて、これからはもっと楽になっていくのだろうなと思った。（１組　テーマ「農家」）

〇高齢者に接する際に、認知症の人であれば、一つのことに対して一つの解答だけで答えるなど、気を付けることが見つかった。相手が認知症かどうかを、すぐに見分けられるわけではないが、その可能性もあると頭に入れながら接することができるようにしていきたいと思った。もっと自分たちができることについて知っていきたいし、それを実践していきたいと思った。（２組　テーマ「高齢者」）

〇あまり身近に性的マイノリティの方がいないので、普段聞けないことを聞くことができて貴重な体験になった。プライベートな質問にも答えていただき、新しい発見もあった。日常生活で困ることが多くあることが分かった。（４組　テーマ「性的少数者」）

【課題・次年度計画への反映方法】

本プログラムにおいて、成果発表会（ポスターセッション）を実施したが、各クラスやグループごとの成果物の差が非常に大きかった。また発表会自体が仲間うちで盛り上がっているグループもあり、出前授業等で関わっていただいた方にも参加いただけると、生徒の緊張感や質疑応答

の質も向上するのではないかと考えている。また、今回は全体での発表のみであったが、来年度についてはカテゴリーごとの中間報告会も実施し、各グループの成果物がさらにブラッシュアップできるようにプログラム化したいと考えている。

（2）　講演会

【日　　時】　令和５年 12 月８日（金）１・２限
【教　　科】　総合的な探究の時間（３年）
【講　　師】　伴野友彦さん《DAVID LAYER》株式会社 COLOR 代表取締役
　　伴野彰彦さん《DAVID LAYER》株式会社 COLOR 取締役
【学習内容】　夢をもつ大切さと楽しむこと
【目　　標】　▶ 起業時の苦労や課題について知り、社会人として生きていくためのヒントを得る（起業家精神）。
　　▶ 目標設定の重要性の確認
【活動概要】

令和５年９月に、イタリアのミラノで開催された世界有数の服飾ブランドの新作発表会「ミラノコレクション」に、日本国内初の男性テーラーデザイナーとして参加された伴野さんから起業される際の実体験を交えた話を聞くことで、社会人としての心構えや、高校生として今やるべきことなど進路実現のためのヒントを得た。また、伴野友彦さんは本校の卒業生であることから、本校の教育活動への理解も深く、今後もコンソーシアム等の学校運営にご協力いただけるよう働きかける。

講演会の様子①

講演会の様子②

守山のテーラーブランド社長が母校で講演　起業しミラノ・コレクションに出展

2

12/13(水) 16:03 配信

みんなの経済新聞
LOCAL NEWS NETWORK

伴野さん兄弟と、デビッド・レイヤーのスーツを着た守山北高校の生徒

メンズテーラーブランド「DAVID LAYER（デビッド・レイヤー）」（守山市焔魔堂町）の社長・伴野友彦さん兄弟が12月8日、友彦さんの母校、守山北高校（守山市笠原町）で講演した。（びわ湖大津経済新聞）

【写真】講演する伴野友彦さんと彰洋さん

報道資料 12/13（水）みんなの経済新聞

【生徒の主な感想（抜粋）】

〇将来の夢に追われて何をしたらいいか分からなくなる時が多かったけれど、伴野さんの話を聞いて、自分の好きなことを続けてそれを仕事にするのが一番だと気づいた。私は美容の専門学校に進むので、美容関係で頑張っていきたいと思います。（３組）

〇あきらめずしっかり目標に取り組めば、目標に近づいていくことを学んだ。自分はいつ死ぬか分からない、明日かもしれない、そう思うことで色々なことに挑戦できると聞き、その通りだと思った。伴野さんの行動力がすごいと思ったし、自分ももう少し動こうと思った。そして、夢を追う気持ちが以前よりも強くなった。（２組）

〇自分も今まで部活動をしてきたけれど、引退してから何に対して努力しようか迷っていた中で、今回の講演を受けて、一つのことに対して努力することも大切だけど、色んなことに挑戦することも大切だと感じた。（４組）

〇今回の講演を聴いて、どれだけ周りから笑われようと努力し続ければ夢は叶うものだと学んだ。自分も夢を諦めずに、最後の最後まで努力を続けていきたいと思う。しかし、時には自分のしていることが義務にならないように心に余裕を持って、楽しむことを忘れずに生きていきたい。（４組）

【課題・次年度計画への反映方法】

３年生にとっては社会に出る直前のタイミングであり、また講師が本校の卒業生でもあることから、これまでの講演会と比べると非常に前向きに講演を受けている様子が見られた。こういった授業に直接関わっていただける方にコンソーシアムのメンバーに入っていただき、「授業協力隊」のような形でコンソーシアムを構築できたらと考えている。

（３）　モデル授業

【日　　時】　令和６年１月 24 日（水）３限

【教　　科】　総合的な探究の時間（１年）

【授業の目的】
- 「みらい共創科」の新しい実習授業「みらい共創」と、総合的な探究学習「もりきた学」の模擬授業
- 授業内容の妥当性の確認と、今後の授業設計のための参考情報の収集
- 新学科の PR 用写真・動画の収録

【学習内容】　ワークショップの手法

【目　　標】
- ワークショップの手法を体験的に学ぶ。
  ①他者の意見や考えに触れ、多面的な視点で物事を捉える。
  ②様々な考えや意見を整理し、発表用模造紙にまとめる。
  ③各グループの意見や考えを発表し、全体で共有する。

【活動概要】

アイスブレイク・チェックインでグループワークの円滑化を行った後、「『もりきた』の高校生が行政や企業とコラボすることでできる最高の活動とは？」というテーマでグループワークを行った。個人でテーマについて考え、ポストイットにキーワードを記入し、一人ずつテーマについての考えを共有しながら、ポストイットを模造紙に貼ってまとめていった。最後に、教室全体で意見交換・結果報告を行い、授業の総括とした。

授業の様子①

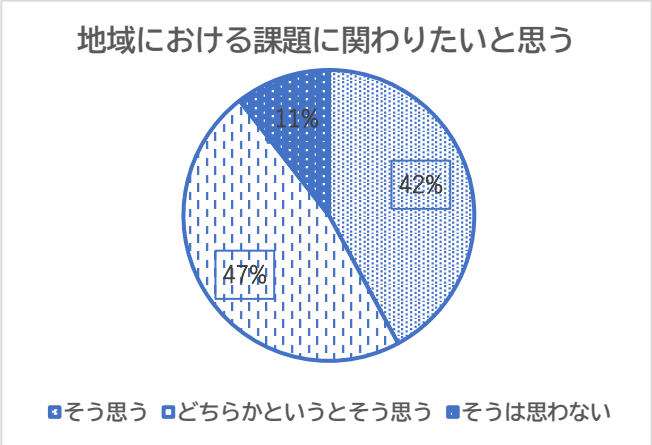
授業の様子②

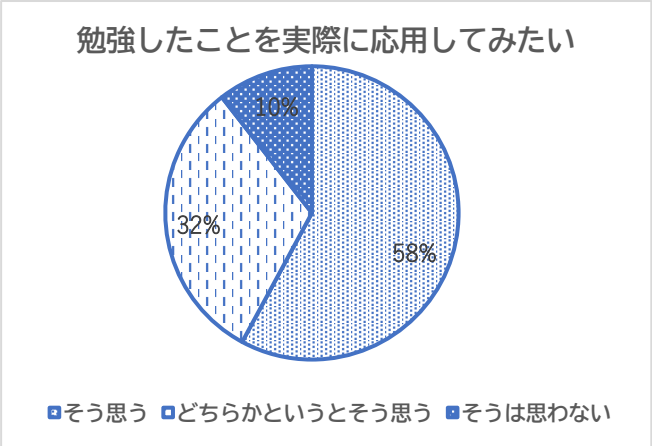
【課題・次年度計画への反映方法】

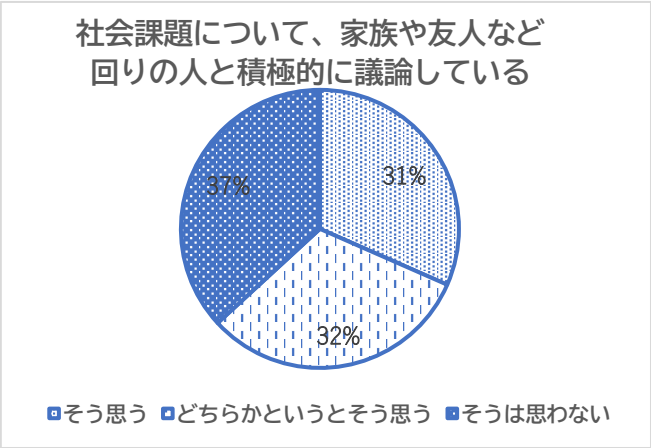
今回の授業では、授業サポーターとしてコーディネーターの上田氏や守山市役所の方にも、生徒に交じってグループに入っていただいた。ワークショップ全体としては、多様な意見が多く出たり、ポストイットがうまく整理されたりと、生徒だけではなく多くのサポートを得てワークショップが成立した印象がある。次年度は、サポーターなしでもワークショップが成立できるよう、事前事後の学習をプログラム化することと、場合によっては学年を越えたワークショップ等（メンター活動）も検討の余地がある。

【生徒の振り返りアンケート結果】

対　象：1年生 25 名







（4） フィールドワーク

【日　　時】　令和６年１月 24 日（水）５・６限
【教　　科】　総合的な探究の時間（１年）
【学習内容】　SDGs に取り組む地域
【目　　標】
- ▶ 地域課題を学び、自己の在り方や生き方を考える。
- ▶ 地域課題に対して、主体的・協働的に学び、課題発見能力を身に付ける。
- ▶ フィールドワークや発表を通じて、社会的マナーやプレゼンテーションスキルを身に付ける。

【活動概要】

「SDGs に取り組む地域」を大テーマにして、地域が抱える課題について調査した。はじめに、地域にある課題について目を向け、グループごとに課題設定を行った。次に、予備調査として、文献やインターネット等を用いて情報を収集した（２学期まで）。３学期では、課題の解決に取り組む企業や行政、団体等に実際にフィールドワーク（取材）を行い、その生の声や生の情報を獲得した。こうして集めた情報を分析・整理し、最終的には探究結果をスライドにまとめて発表した。

浄水場への見学の様子

自動車販売店での取材の様子

市役所での取材の様子

自治会の方への取材の様子

国際交流協会への取材の様子

【生徒の主な感想（抜粋）】

〇はじめは「なぜ？」が多かったが、学習を進めるうちに「こういうことか！」と変化したことが楽しかった。また、難しい内容だったので、グループワークの大切さが分かった。（２組）

〇班で協力するタイミングが遅く、自分の考えも主張できなかった。班の友だちに引っ張ってもらっていた。自分から進んで取り組めなかった。（４組）

〇インターネットで調べても、実際の立場の人じゃないと分からないことも多いので、専門家の人から話を聞けて理解が深まった。フィールドワークでは、今しかチャンスがないと思って、思い切ってたくさん質問をした。（５組）

〇事前に用意していた質問しかできず、反対に相手の方から質問されて困った。（５組）

〇SDGs は意外と自分たちの身の回りに問題があって、自分事として受け入れる必要があると思った。（１組）

〇自分たちの知らないところで、生活しやすい街づくりをしてくれている人がいることを知ることができた。それも街づくりに参加することにつながると思った。（１組）

〇どういう仕事に就きたいか、そろそろ考え始めようと思った。（３組）

【課題・次年度計画への反映方法】

令和５年度は、外部との窓口を１人の担当教員だけでなく授業担当の教員にもサポートしていただいた。しかし、フィールドワークの部分では、やはり先方の都合や雪等の天候によっても日時が変更することがある。また、事前のアポイントメントの電話対応や当日の運営、事後のお礼までの流れは、授業や日々の業務がある中で一人（少数）の教員が担うには限界があり、校内の人員配置や担当者の問題、また、地域と協働した学びを継続的に実施していける仕組みづくりが必要不可欠であると感じた。令和６年度については、各学年の「総合的な探究の時間」の担当者を教務課内で整理し、それぞれの担当者が学年団と密に連携がとれるような体制を整えたい。

（5） モデル授業

【日　　時】　令和６年３月 13 日（水）１限
【教　　科】　総合的な探究の時間（１年）
【授業の目的】
- 「みらい共創科」の新しい実習授業「みらい共創」と、総合的な探究学習「もりきた学」の模擬授業
- 授業内容の妥当性の確認と、今後の授業設計のための参考情報の収集
- 新学科の PR 用写真・動画の収録

【学習内容】　「人を想う心」ワークショップ
【目　　標】
- ワークショップの手法を体験的に学び、“人を想う心”について再考する。
  ①他者の意見や考えに触れ、多面的な視点で物事を捉える。
  ②様々な考えや意見を整理し、自身の考えの変化を感じ取る。
  ③各グループの意見や考えを発表し、全体で共有する。

【活動概要】
本日の目的について全体で共有した後、ペアインタビューの手法を用いて、「人を想う心」について多様な視点から考えを深めた。その後、ペアを解体して４人グループを構成し、他のペアのインタビューから得られた洞察や学びを共有した。最後に各グループで出た意見を全体にフィードバックした。今回の授業で用いたワークシート等はすべて回収し、次年度の授業設計のための分析資料とした。

▼モデル授業の様子

【課題・次年度計画への反映方法】
“人を想う心とは”という問いに対して、生徒たちは「やさしさ」であったり「気遣い」といったイメージが強く、例えば「叱ってもらえること」や「意見をぶつけ合うこと」など、“人を想う心”は本当に多面的であり多様なものであるという視点がほとんど見られなかった。また、グループで意見交流をする場面においても、授業者からの指示が曖昧だと、生徒たちは何を重点的に話し合えばよいか迷っている様子も見受けられたため、指示を明確にする場面と自由な意見交換を促す場面を区別しながら、授業を設計する必要があると感じた。

３－７　守山北高校研究成果報告会

開催日時　令和６年３月 14 日（木）14：00～15：00（守山市民ホール　学習室１）

内　　容　研究概要の説明、生徒の実践発表、新学科の概要説明

地方行政、地元市教育委員会、近隣の高等学校長、通学圏域の中学校長等に案内文を発送し参加者を募った。

はじめに守山北高校の概要と現状について触れた後、本年度の研究概要について説明を行った。その後、代表生徒による実践発表（質疑応答含む）を行った。質疑応答については、教員側は生徒が質問に対する受け答えができるのか不安な部分も大きかったが、フィールドワークやインターンといった実体験をしていたことで、自らの言葉で話している様子をみることができるなどしっかりと対応できていた。普段から、相手の質問の主旨を捉え、それを自分の考えや体験に基づいた対応をする練習の機会が必要だと感じ、来年度のカリキュラム検討にも活かしていきたい。生徒による実践発表の後に、コーディネーターから新学科の概要説明を行い、成果報告会を終えた。

▼実践発表の様子

〇研究成果報告会における生徒発表を受けての御意見・御感想

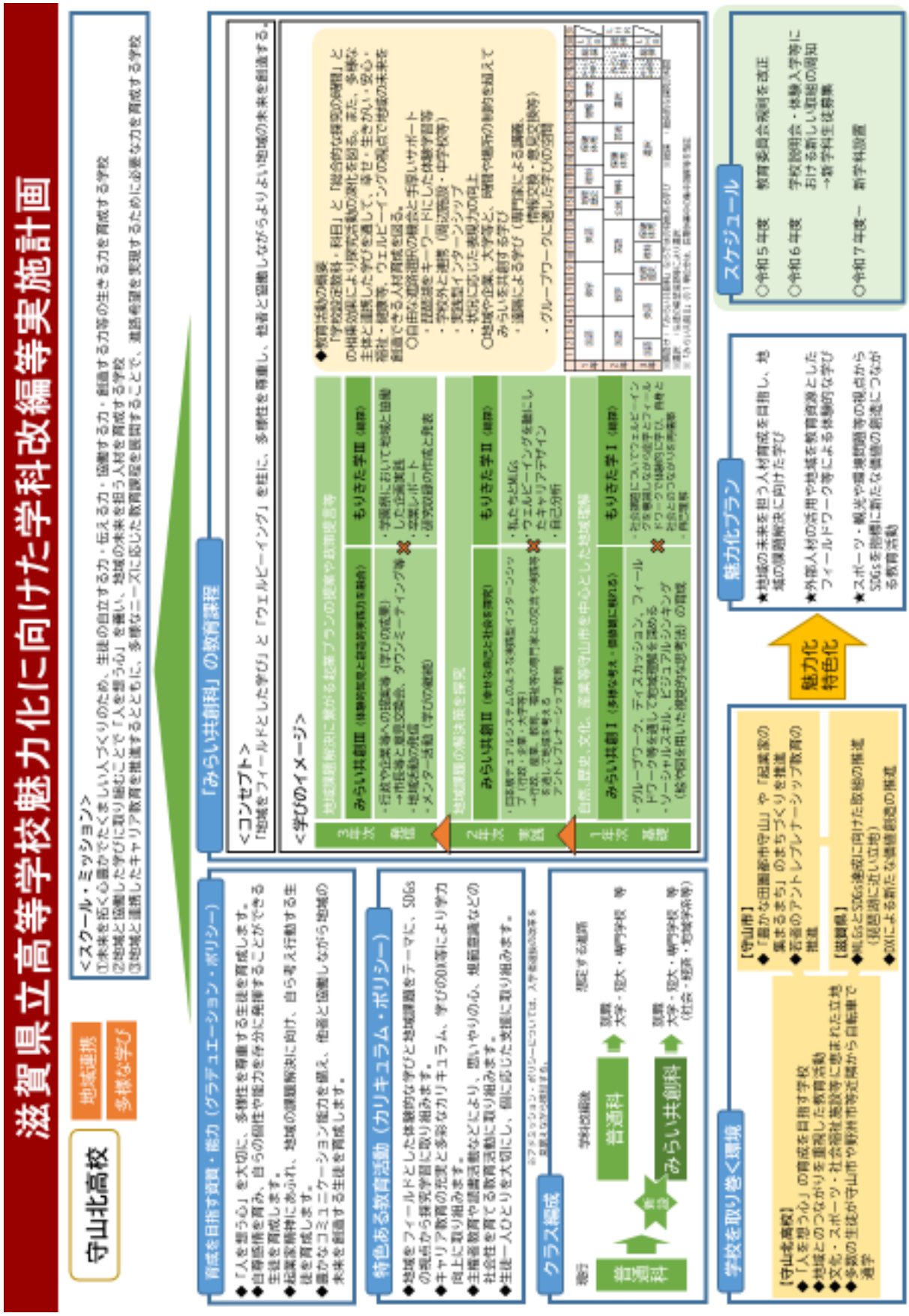
・全体的にまとまっていて、とても分かりやすい印象だった。

・探究活動というと、生徒は「アンケート」という方法を思いつきやすいが、アンケート調査は設計が難しく、探究テーマがデリケートな問題であった場合等はアンケートの実施自体が難しい。アンケート調査よりも、今回の研究成果報告会でのようなインタビュー形式で進めていく方が、教員の負担軽減や生徒自身の理解を深めるために良いのではないか。

・発表用スライドのデザインの面では、文字数を減らす方向で考えるだけでなく、やり取りの中身を分厚く紹介する方法を取っても良いと思う。それを通して、発言の内容を深めたりできるのではないか。

・今回の研究成果報告会のように、生徒の感じたそのままを受け止められるような学校であれば、例えば中学校での偏差値競争の中で「自分はできない」と思い込んでいるような子たちが、地域とのつながりを持つ中で「ここにいていい」と思えるような学校になれるのではないか。

・キャリアデザインということでは、発表することで自分の考えが豊かに出てきたと思う。自分の学んだことを常に見返すことができるようにすれば、それまでの行動を通して次のステージに入っていきやすいと思う。

・人の話を正しく理解し、自分の考えを正しく発信するのは、大人でも難しい。そういった「対話力」を磨くのに、質疑応答は有効だと思う。対話の機会を増やすことで、生徒は成長できるのではないか。

４－１　滋賀県立高等学校魅力化に向けた学科改編等実施計画